



行為者のキャラに着目したポライトネス研究

宿利, 由希子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2019-03-25

(Date of Publication)

2020-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7370号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007370>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

行為者のキャラに着目したポライトネス研究

審査委員： 定延利之教授

林 良子 教授

朱 春躍 教授

平成 31 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

宿利 由希子

目次

第1章 序論	1
第1.1節 問題意識と研究の目的	1
第1.2節 考察対象	3
第1.3節 用いる手法	7
第1.4節 本稿の構成	7
第2章 ポライトネス研究と本研究における定義	10
第2.1節 ポライトネス研究の概要	10
第2.2節 ポライトネスと性別	17
第2.3節 ポライトネスと日本語教育	20
第2.4節 先行研究の問題点と改善案	21
第2.5節 本研究におけるポライトネス	23
第3章 キャラ研究と本研究における定義	25
第3.1節 キャラ研究の概要	25
第3.2節 キャラと類似概念	28
第3.3節 キャラとことばの結びつき	32
第3.4節 本研究におけるキャラ	33
第4章 キャラのメカニズムとポライトネス評価	36
第4.1節 キャラにかかわるふるまい	36
第4.2節 キャラ化の材料	39
第4.3節 キャラ化・非キャラ行動によるインポライト評価の可能性	42
第4.4節 3つの個別研究とそれぞれの関係性	44
第5章 キャラ化のポライトネス評価（個別研究1）	46
第5.1節 研究の背景と目的	46
第5.2節 先行研究とその問題点	49

第 5.2.1 節 「ニヤニヤ」の被表現者	49
第 5.2.2 節 日本語学習者によるキャラ化	50
第 5.3 節 「ニヤニヤ」のキャラと日本語母語話者による「ニヤニヤ」使用	50
第 5.3.1 節 「ニヤニヤ」によるキャラ化の事例分析	50
第 5.3.2 節 「ニヤニヤ」のキャラに関する意識調査	53
第 5.4 節 日本語学習者の「ニヤニヤ」によるキャラ化とポライトネス評価調査	55
第 5.5 節 考察	58
第 5.6 節 まとめ	60
第 6 章 非キャラ行動のポライトネス評価（個別研究 2）	63
第 6.1 節 研究の背景と目的	63
第 6.2 節 先行研究とその問題点	65
第 6.2.1 節 動詞否定丁寧形と発話の印象	65
第 6.2.2 節 発音と発話の印象	66
第 6.2.3 節 キャラと発話の印象	67
第 6.3 節 調査概要	68
第 6.3.1 節 刺激音声	68
第 6.3.2 節 評価者と評価項目	70
第 6.3.3 節 予想	71
第 6.4 節 結果	72
第 6.4.1 節 予想 1・2・3 に関する結果	72
第 6.4.2 節 予想 4 に関する結果	77
第 6.5 節 考察	80
第 6.6 節 まとめ	84
第 7 章 キャラ化と非キャラ行動のポライトネス評価（個別研究 3）	86
第 7.1 節 研究の背景と目的	86
第 7.2 節 先行研究とその問題点	88

第 7.2.1 節 ラベル付けによるキャラ化	88
第 7.2.2 節 話題導入と冗談発話	90
第 7.3 節 談話データ	91
第 7.3.1 節 談話の収録	91
第 7.3.2 節 談話の転写	92
第 7.3.3 節 話題導入	93
第 7.3.4 節 冗談発話	93
第 7.3.5 節 ラベル付けによるキャラ化	94
第 7.4 節 キャラ化と非キャラ行動のポライトネス評価分析	95
第 7.4.1 節 キャラ化の材料としての話題導入	95
第 7.4.2 節 キャラ化の材料としての冗談発話	99
第 7.4.3 節 ラベル付けによるキャラ化	102
第 7.4.4 節 キャラ化と非キャラ行動のポライトネス評価	104
第 7.5 節 考察	111
第 7.6 節 まとめ	113
第 8 章 総合考察	115
第 8.1 節 行為者のキャラとポライトネス評価	115
第 8.2 節 日本語教育への提案	117
第 8.3 節 本研究の実証性と意義	119
第 8.4 節 予想される反論	119
第 9 章 終わりに	123
謝辞	126
資料	128
引用文献	129

第1章 序論

私たちはコミュニケーションに際して、どのような話をするか、どのようなことば遣いで話すかなど、さまざまな気遣いを行っている。従来、このような気遣いのメカニズムに関しては、ポライトネス理論 (Brown & Levinson 1978/1987, 以下 B&L) に基づいた説明や実証がなされてきた。ポライトネス理論とは、コミュニケーションの相手が持つ『他者に受け入れられて面子を保ちたい』『他者に干渉されて面子をつぶされたくない』という2つの意向を基本発想として持ち、これらの意向を尊重する行為をポライトな行為と考える理論である (B&L 1978/1987 他)。

本研究は、「行為者のキャラ (人物像) を考慮しないことがコミュニケーションの失敗を導きうる」というポライトネス理論の問題点を指摘し、ポライトネスの判断基準として「行為者のキャラ」を加えるべきことを示す。さらに、そのことを踏まえた、従来よりも現実的な日本語教育のあり方を提案する。

この第1章では、まず背景となる問題意識および研究の目的、研究の概要を説明する。以下、第1.1節では背景となる問題意識と研究の目的について、第1.2節では考察対象について、第1.3節では用いる手法について、第1.4節では得られる結論とその意義について、第1.5節では本稿の構成について述べる。

第1.1節 問題意識と研究の目的

コミュニケーションは、通信科学(Shannon & Weaver 1949)・非言語行動学(Ekman & Friesen 1969)・語用論(Sperber & Wilson 1986/1995²)など、さまざまな分野から研究されている。これらの研究成果により、発信者の発した情報が受信者に解釈される過程における「コード(Shannon & Weaver 1949)」や、「推論(Sperber & Wilson 1986/1995²)」の重要性が知られるようになっていく。

だが、私たちの日々のコミュニケーションは、しばしばうまくいかず、他者とのコミュニケーションに悩む日本語母語話者、日本語学習者は少なくない。コミュニケーションの成功例ばかりでなく、失敗例にも目を向け、失敗の原因を解明していくことは、コミュニケーションに関する理解を深化させるのではないだろうか。また失敗の原因から、より現実的な日本語教育のあり方が見えてくるのではないか。

以上の問題意識を背景として、本稿ではコミュニケーションのポライトネスの側面に関

する日本語母語話者および学習者の失敗例を取り上げ、うまくいかない原因について考察する。ポライトネスとは、脅威を与える意図がないらしいという含意を相手に伝えることで、潜在的に攻撃的な当事者間のコミュニケーションを可能にする行為者の配慮 (B&L 1978/1987), また人に対して自分の印象を良くすること (Watts 1992: 51)とされる。日本における研究では、ポライトネスは「円滑なコミュニケーションのための適切な言語使用 (井出 2006)」や「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動 (宇佐美 2003)」などと訳され、“politeness”という英語の和訳である「丁寧さ」とは異なるものと考えられている。ポライトネスを取り上げるのは、ポライトネスにかかわるコミュニケーションの失敗が、当事者間の人間関係に深刻なダメージを及ぼすと考えられるためである。また、日本国内の日本語学習者数は近年増加傾向にあり (文化庁 2017), 日本語教育のポライトネスに関する指導の向上は重要かつ急務であると考えられる。

従来のポライトネス研究は、ポライトネスの判断基準によって、大きく3つに分けることができる。1つ目は、「ポライトネスは行為から推論で判断される」と主張する研究である (B&L 1978/1987 他)。この主張は、ポライトな意図を持った行為者の行為から、受け手もしくは観察者が行為者の意図を「推論」によって再構築できるということを前提としている (B&L 1978/1987 田中他訳: 10)。2つ目は、「ポライトネスは社会規範で判断される」と主張する研究である (Gu 1990; Ide 1989 他)。3つ目は、推論と社会規範を分けず、相互に影響し合うものと捉える、「ポライトネスの判断基準は推論と社会規範のいずれでもありうる」という説である (Eelen 2001; Watts 2003; Mills 2003 他)。では、ポライトネスの判断基準は、「推論」と「社会規範」だけで十分であろうか。

確かに、「推論」はポライトネスの判断基準として必要である。その根拠は、社会規範に反していても、個人の行為からその気遣いが推論により察知され、ポライトと感じられることがあるからである。たとえば、日本語学習者が、「体重」と言えばいいところを「先生のご体重は」と「ご」をつけて発話したり、「つまらないものですが」と言うべき場面で「これはあなたのためにわざわざ持ってきました」と言ったりすることがある。これらの例は日本語社会の規範に反しているが、気遣いが伝わり、ポライトと感じられうる。

また、「社会規範」も判断基準として必要である。その根拠は、ポライトか否かが推論によらず社会規範との合致如何だけで決まる場合があるからである。たとえば、日本語社会では、膝をついてお辞儀する際は「三つ指」をつくことや、贈り物をする際は「熨斗」を付けることが社会規範とされている。日本語社会の多くの人間は「三つ指」や「熨斗」か

ら推論によりポライトな行為だという判断を導くことはできないが、「三つ指」「熨斗」をポライトな行為だと感じる。このような例は推論からは説明できないが、日本語社会の規範ではポライトな行為と認識される。だが、ポライトネスの判断基準は「推論」と「社会規範」だけで本当に十分なのであろうか。

本研究は、ポライトネスの判断基準として「行為者の人物像」、つまり「行為者のキャラ」を加えるべきことを示す、という目的を設定する（図 1.1 参照）。そのために、「行為者のキャラを考慮しないことがコミュニケーションの失敗を導きうること」を調査により明らかにする。さらに、そのことを踏まえた、従来よりも現実的な日本語教育のあり方を検討し、提案する。「キャラ」に関しては、本研究における中心的概念であるため、第3章と第4章で詳しく述べる。

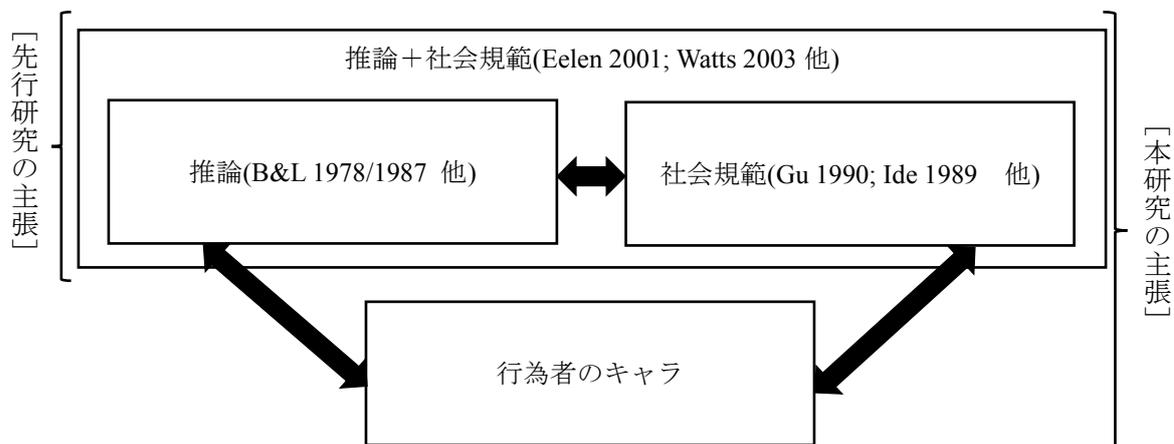


図 1.1 ポライトネスの判断基準

第 1.2 節 考察対象

以上の目的を達成するために、本稿は以下 3 つを考察対象とする。

考察対象 1：ことばが、被表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象

考察対象 2：ことばが、表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象

考察対象 3：ことばが、被表現者のキャラに関する認識の齟齬および表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象

考察対象 1 として、日本語学習者による作文に見られる笑い方の表現「ニヤニヤ」を、

考察対象2では、動詞否定丁寧形¹の「～ません」と「～ないです」を含む文の日本語学習者による発話を取り上げる。考察対象3では日本語母語話者による合同コンパ（以下、合コン）での「キャラのラベル（定延 2011）」付けとそれに対する反応、話題導入、冗談発話を取り上げる。以下、考察対象を紹介した上で、これらを対象に選んだ理由をそれぞれ述べる。

考察対象1は、ある行為者に関して、書き手が抱いている（と表現から読み取れる）キャラと、読み手が抱いているキャラとの間に齟齬があり、その表現がポライトと評価されず、場合によってはインポライトと認識されるという現象である。本稿では、笑い方の表現「ニヤニヤ」について、日本語学習者の作文における使用実態とそれに対する日本語母語話者の評価調査から考察する。先行研究によると、「ニヤニヤ」という笑い方の主体は日本語社会において「悪玉」キャラまたは「下品な善玉」キャラとされている（羅 2011）。このような認識が広く共有されているとすれば、よほど親しい間柄でも、行為者の笑いを「ニヤニヤ」と表現することはインポライトと認識される危険性が高いと予想される。本稿では、日本語学習者の作文における「ニヤニヤ」という表現の使用が、そう表現された被表現者のキャラによって日本語母語話者にインポライトと評価されることを証明する。

「ニヤニヤ」を選んだのは、日本語教育が特に動作を表す表現を、どのような行為者でも意図的に行えるものとして指導していることの弊害が示せると考えたためである。「ニヤニヤ」は、「ひとり満足しているときの表情（河野他 2003: 2）」、つまりどのような行為者でも意図的に操作して示すことのできる表情の表現として、日本語教育の中級段階で導入される語彙である。これに対し、インターネット上では不本意にも「ニヤニヤ」と表現された笑いの主体である日本語母語話者の不満や嘆きが観察される。このことは、「ニヤニヤ」と笑いを表現されるか否かが主体の意図的な表情のコントロールによるものでないこと、そして場合によっては「ニヤニヤ」という表現の使用が笑いの主体を傷つけるインポライトな表現と判断されやすいことを示している。以上のことから、「ニヤニヤ」という笑い方の表現がポライトネスの考察にふさわしいと考えた。

考察対象2は、同じ発話でも話し手のキャラにより聞き手・観察者のポライトネス評価が異なるという現象である。本稿では、日本語母語話者に、異なるキャラの日本語学習者による同一の発話内容の音声に関して印象評価をさせ、その評価の差からこの現象の存在

¹ 本稿では、川口（2006）および金（2010）に倣い、「～ません」「～ないです」で終わる動詞の形式を「動詞否定丁寧形」と呼ぶ。

を証明する。調査には、動詞否定丁寧形「～ません」と「～ないです」を含む文を使用する。動詞否定丁寧形に関する先行研究によると、従来「～ません」が規範的とされてきたが（川口 2006）、近年若年層日本語母語話者の間で、音声言語では「～ません」に「つめたい」「きつい」という印象が、「～ないです」に「やわらかい」「やさしい」という印象が持たれるようになってきた（澤田 2012）。また、音声言語の動詞否定丁寧形「～ないです」は「～ません」に比べ「親しみと丁寧さを併せ持つ表現」と認識されてきているという報告もある（澤田 2012）。

動詞否定丁寧形を選んだのは、日本語教育がポライトネスに関して「丁寧な言語形式」の指導にのみ力を注ぎ、発音や話し手のキャラといった要素に目を向けてこなかったことの弊害を示すのにふさわしいと考えるためである。動詞否定丁寧形「～ません」は「丁寧な言語形式」として初級段階で扱われ、学習者の使用頻度も高い。本稿では音声言語に関する調査を行うため、「～ないです」がよりポライトであると評価されるはずであるが、実際には話し手のキャラにより必ずしもそのように評価されないことを示す。

考察対象3は、合コン場面で話し手が初対面の相手に「ボケ」キャラ、「オネエ」キャラといったキャラのラベルを付け、そのラベル付けに対して相手が反応するという一連のやりとりを取り上げ、そのやりとりに対する他の合コン参加者の対応からポライトネス評価を観察する。特定のキャラとして扱われることには、周囲からの被理解感が高まり、集団における居場所が確立できるという利点がある一方、そのキャラにふさわしい言動を期待されたり強要されたりするといった行動の制限が生じるという問題点もある（千鳥・村上 2016）。このことから、キャラのラベル付けは、集団内の人間関係の構築や維持に役立つ気遣いの現れであると同時に、相手の言動の制限となる場合もあるふるまいと言える。前者は B&L のポライトネス理論における『他者に受け入れられて面子を保ちたい』という意向を尊重する行為、つまりポライトな言動となるが、後者は『他者に干渉されて面子をつぶされたくない』という意向を侵害するインポライトな言動と言える。キャラのラベル付けに関する合コン参加者たちのポライトネス評価は、そのラベルを受容するか、拒否するか、拒否する場合どのように拒否するかという、ラベルを付けられた被表現者の反応に影響を受けると考えられる。そのため、本稿では表現者によるキャラのラベル付けとそれに対する被表現者の反応という一連のやりとりが、表現者のキャラや被表現者のキャラに関する認識の齟齬により冗談として成立しない場合、ラベル付け自体が他の合コン参加者からインポライトと判断されることを示す。

キャラのラベル付けとそれに対する反応を扱うのは、これまでキャラ研究で盛んに議論されてきたテーマであり、かつポライトネスにかかわる問題であるにもかかわらず、キャラ研究、ポライトネス研究のどちらの領域でもお互いについてまったく触れられてこなかったためである。合コンを扱うのは、これまでポライトネス研究で行われてきた初対面発話の調査における不自然さをできるだけ軽減させるためである。ポライトネスに関する会話分析・談話分析では、気を遣う場面として初対面場面（特に2名による）の雑談の会話データがよく用いられる（たとえば三牧 2013）。しかしながら、まったく知らない2名が雑談する場面がそれほどあるのか、その相手と親交を深める必要性があるのか、という不自然さの存在は否定できなかった。合コンなら、初対面・非初対面の人たちが今後の関係の発展性を探りながら、雑談をして、親交を深めていく様子が観察できると考えた。また、初対面の2名による会話では、表現者の言動を被表現者がインポライトだと判断しても、直接表現者に「インポライトだ」と指摘することは困難であると予想される。そのため、インポライトな言動が埋没してしまう可能性が高い。一方合コンでは、他の参加者が表現者の言動に同調的な発話をするか、反対に否定的な発話をし被表現者を擁護するかを観察することで、参加者たちによるポライトネス評価を観察することが可能となる。個別研究と主な考察対象をまとめると表 1.1 のようになる。

表 1.1 個別研究と考察対象

個別研究	考察対象	キャラとことば
1 ことばが、被表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象	「ニヤニヤ」使用	キャラと動作の表現
2 ことばが、表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象	「～ないです」発話	キャラとことばの違い
3 ことばが、被表現者のキャラに関する認識の齟齬および表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象	キャラのラベル付け、それに対する反応	キャラとラベル付けおよび反応

これら3つの考察対象は、一見ばらばらで統一性のないものに見えるが、決してそうではない。これらはいずれも「人はみな同じ」「実は性差は存在する」という従来のポライトネス研究や日本語教育の行為者観に疑問を投げかけるものである。B&Lのポライトネス理論をもとにする研究の多くは、国や言語を超えた普遍現象としてポライトネスを捉えてきた。そのため、行為者に関して、人はみな同じであり、異なるのは文化や状況、話者間の関係性といった文脈であると考えてきた（第 2.1 節参照）。一方、ジェンダー研究の一環としてポライトネスを研究する Lakoff(1973, 1975)などは、ポライトネスに関する性差の存在

を主張する（第 2.2 節参照）。前者による行為者の捉え方は「人は同じで、異なるのは状況や話者間の関係」、後者は「実は性差は存在する」という主張と言える。そして、驚くべきことにこの構図は日本語教育においても採用されている。日本語教材は、初級において「人はみな同じ」とばかりに文字言語のことば遣いを扱い、中級では「実は性差は存在する」としてことばの性差をことさら強調する（水本他 2009; 水本 2015）。このような傾向を受け、日本語教師はポライトネスに関する指導をする際も、「人はみな同じ」か「実は性差は存在する」か、どちらかの行為者観を選ぶよう暗黙のうちに迫られることになる。本稿が取り上げる 3 つの考察対象は、「推論」と「社会規範」以外に、性差では捉えきれない行為者のキャラという判断基準が存在することを証明するものである。

第 1.3 節 用いる手法

考察に際して、本稿では、量的分析と質的分析を併用することにより、慎重な観察を行う。具体的に、考察対象 1（ことばが、被表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象）に関しては、言語行為のデータ（インターネットへの書き込み、オノマトペに関する文献、日本語教材など）による質的分析と、日本語母語話者を対象とした意識調査による量的分析を併用する。質的分析は実際の言語行為のデータを筆者の内省により観察する。また、この観察が筆者の個人的意見ではなく、日本語母語話者の間である程度共有された認識であることを示すため、日本語母語話者対象の意識調査を行う。考察対象 2（ことばが、表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象）について、日本語母語話者を対象とした意識調査による量的分析を用いる。これは、話し手のキャラのみを操作した場合の母語話者によるポライトネス評価の差の傾向を見るためである。意識調査には、動詞否定丁寧形を含む発話に関して、従来の研究では提示されてこなかった発話音声データを用いる。考察対象 3（ことばが、被表現者のキャラに関する認識の齟齬および表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象）に関しては、母語話者による合コン場面の談話を用い、話し手とその発話に対する参加者の反応を観察するという質的な分析を試みる。これらの手法を用いる理由は、第 4.4 節で詳しく述べる。

第 1.4 節 本稿の構成

博士論文は、全部で 9 つの章から構成されている。

次の第2章では、従来のポライトネス研究を概観し、その問題点を指摘した上で、改善方法を提案する。これまでのポライトネス研究には、「(文化や状況は異なるが,)人はみな同じ」「実は性差は存在する」という行為者観を前提にしているという問題点がある。ポライトネス評価には、ステレオタイプとしての性別が影響していることが明らかになっており、またステレオタイプは性別に関するものだけではない。

第3章では、本稿の理論的背景となるキャラという概念を、先行研究をもとに説明する。先行研究の定義をそのまま採用すると、キャラとしてふるまう行為者とそれを認識する行為者という複数の行為者が存在することによるキャラの認識の複雑性、そしてキャラの内面的な側面への偏重という2つの不都合が生じる。そのため本研究では、独自の定義の採用、および第4章で具体的に示す操作により、この問題の軽減を試みる。

第4章では、3つの考察対象に関する個別研究について、キャラ研究における位置づけから説明する。ポライトネス評価には、「キャラ化」「キャラ行動」「非キャラ行動」という少なくとも3つのキャラに関するふるまいがかかわっている。ある人物は、「キャラ化」される(特定のキャラとして扱われる)ことにより、周囲からそのキャラにふさわしい「キャラ行動」をとることが期待されることになる。第5章以降の個別研究では、不適切なキャラ化や非キャラ行動(キャラ行動とは異なる行動)によるキャラからの逸脱が、周囲からインポライトと評価されるという可能性について検証する。

第5章では、考察対象1(ことばが、被表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象)に関する個別研究1について述べる。「ニヤニヤ」という笑い方の表現によるキャラ化が、不適切な被表現者に対して行われるとき、そのキャラ化がインポライトと判断されることを、日本語母語話者対象の意識調査により証明する。

第6章では、考察対象2(ことばが、表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象)に関する個別研究2について述べる。「～ないです」という動詞否定丁寧形が、不適切な被表現者により発話される、言い換えれば非キャラ行動として発話される場合、その発話がインポライトと判断されることを、日本語母語話者対象の意識調査により証明する。

第7章では、考察対象3(ことばが、被表現者のキャラに関する認識の齟齬および表現者のキャラに関する認識の齟齬により、インポライトな言動として伝わる現象)に関する個別研究3について述べる。日本語母語話者による談話データを分析し、「ボケ」キャラ、「オネエ」キャラといったラベルによるキャラ化が、会話参加者たちに許容される場合と

インポライトと評価される場合を比較する。キャラ化が被表現者に拒否される場合、表現者と被表現者のキャラによって、会話参加者たちのポライトネス評価が異なり、キャラ化のインポライト評価につながることを示す。

第8章では、第5章～第7章で行った3つの個別研究の結果を総合的に考察したうえで、日本語教育への提案を行う。さらに、本研究の実証性と予想される反論について論じる。

第9章では、本研究をまとめ、今後の課題について述べる。

第2章 ポライトネス研究と本研究における定義

第2章では、ポライトネスに関する先行研究を概観する。第2.1節では、判断基準の観点からポライトネス研究の展開を紹介する。第2.2節ではポライトネスと行為者の関係に関する研究を、特に性別の側面から取り上げる。第2.3節ではポライトネスと日本語教育に関する研究と日本語教材におけるポライトネスの現状の一部を紹介する。第2.4節でこれらの問題点と改善案を指摘した上で、第2.5節で本研究におけるポライトネスの定義を示す。

第2.1節 ポライトネス研究の概要

第1章で述べたように、従来のポライトネス研究は、判断基準によって、「ポライトネスは行為から推論で判断される」と主張する研究 (B&L 1978/1987 他)、「ポライトネスは社会規範で判断される」と主張する研究 (Ide 1989; Gu 1990 他)、「ポライトネスの判断基準は推論と社会規範のいずれでもありうる」とする研究 (Eelen 2001; Watts 2003; Mills 2003 他) の3つに大別することができる (表 2.1 参照)。

表 2.1 ポライトネス研究の主な主張

	推論	社会規範	推論と社会規範
主な研究者	B&L, Lakoff, Leech	Ide, Matsumoto, Gu	Watts, Eelen, Mills
ポライトネスの捉え方	Grice の CP からの逸脱, 理想的主体による方略的対立 (摩擦) 回避・補償・緩和行動	社会規範に自動的に従うこと (個人的方略は西洋的)	社会的慣習行動・実践
普遍性	追求	否定	否定
方法論	トップダウン	トップダウン	ボトムアップ
行為者	合理的モデルパーソン (静的)	社会規範に自動的に従う構成員 (静的)	社会規範を内面化した個人 (動的)
関連する理論	Grice の協調の原理 Goffman のフェイス概念	個人的方略として B&L の理論	Bourdieu の社会理論, S&W の関連性理論

※栗原 (2008; 2009), 三牧 (2013) をもとに作成。

「ポライトネスは行為から推論で判断される」説 (以下, 推論説) の代表例である Lakoff(1973), B&L(1978/1987), Leech (1980, 1983)の研究では, ポライトネスを Grice (1967/1989) の協調の原理 (Cooperative Principle, 以下「CP」と略記) と相反する関係にある現象, または CP が主張する合理的効率性からの原理づけられた逸脱として位置づけて

いる。以下、まず CP を中心とした Grice のコミュニケーション理論を簡単に説明し、主に B&L (1978/1987) を中心に概要を紹介する。

Grice (1971/1989) は、受け手もしくは観察者が行為者の意図を合理的な推論によって再構築できることを前提とし、受け手によって理解されるように企図された行為者の意図 (implicature) がコミュニケーションの本質であると考えた。CP とは、協調的な会話の場面で、話し手が遵守するものと期待される一般原理である (ibid)。この原理にかなう結果を生じさせるために、話し手は量、質、関係、様態から成る 4 つの種類の原則に従わなければならない (詳しくは表 2.2 参照)。協調的な話し手の発話が CP に違反する場合、その発話には話し手の含意 (implicature) があり、話し手は聞き手がそれを把握する (すなわち、推論する) 能力があるとされる (ibid 清塚訳: 44)。

表 2.2 Grice の CP の原則

類型	原則
量の類型	要求に見合うだけの情報を与えるような発言を行いなさい、要求されている以上の情報を与えるような発言を行ってはならない
質の類型	真なる発言を行うようにしなさい
関係の類型	関連性のあることを言いなさい
様態の類型	わかりやすい言い方をしなさい

※Grice (1971/1989: 清塚訳 37-39) をもとに作成。

B&L (1978/1987) は、行為者の意図が、受け手や観察者の合理的な推論によって再構築されるといふ Grice の主張を前提とし、ポライトネスを CP の合理的効率性からの原理づけられた逸脱と捉えている (ibid 田中他訳: 7-10)。B&L の理論は、「フェイス (面子) (Goffman 1955/1956/1967))」という概念に基づいており、コミュニケーションの相手が持つフェイス保持の意向を尊重する話し手の配慮 (フェイスワーク) がポライトな行為であるという基本発想を持っている。フェイスは、合理的な行為者であるモデルパーソンが持つ、「他者に受け入れられてフェイスを保ちたい」という「ポジティブ・フェイス」と、「他者に干渉されてフェイスをつぶされたくない」という「ネガティブ・フェイス」の 2 つの欲求から成る (ibid 田中他訳: 79)。依頼や助言といったある種の行為は、本質的に相手のフェイスを脅かす行為 (face-threatening acts, 以後「FTA」と略記) となる (ibid 田中他訳: 85)。FTA の「深刻度 W_x 」は、話し手と聞き手の「社会的距離 D 」、話し手と聞き手の「相対的力 P 」、特定の文化における絶対的な「負荷度 R_x 」という 3 つの要因により、社会的変数として査定することができるとして、B&L は (2.1) の公式で示している (ibid 田中他訳: 98)。

(2.1) $W_x = D + P + R_x$

相対的力 P は、たとえば銀行の支店長がいつも強く、地位の低い労働者がいつも弱いというような固定的なものではなく、労働者が銃を抜いたり、支店長を裁く陪審員になったりすることで逆転しうる、場面によって変わる役割セットのようなものである (ibid 田中他訳: 101)。「 W_x 」や「 R_x 」の「 x 」は文化内ごとの負担の程度を示す(ibid 田中他訳: 98)。話し手は、FTA に関する自己の欲求と FTA の深刻度を勘案し、FTA の脅威を小さくする見込みがあるようなポライトネス・ストラテジーを合理的に選択する (ibid 田中他訳: 107-108)。ポライトネス・ストラテジーには、聞き手のポジティブ・フェイスを補償する「ポジティブ・ポライトネス (・ストラテジー)」と、聞き手のネガティブ・フェイスを補償する「ネガティブ・フェイス (・ストラテジー)」の 2 つがある(ibid 田中他訳: 91)。B&L は、フェイスを文化特有、集団特有、個人特有でありながら、相互行為者に共通する基盤であるとし、それに基づく自分たちの理論を普遍的なものと位置づけている (ibid 田中他訳: 82)。B&L のポライトネス・ストラテジーを表 2.3 に示す。

表 2.3 B&L(1978/1987)のポライトネス・ストラテジー

ポジティブ・ポライトネス	ネガティブ・ポライトネス
1. H (の興味, 欲求, ニーズ, 持ち物) に気づき, 注意を向けよ	1. 慣習に基づき間接的であれ
2. (H への興味, 賛意, 共感を) 誇張せよ	2. 質問せよ, ヘッジを用いよ
3. H への関心を強調せよ	3. 悲観的であれ
4. 仲間うちであることを示す指標を用いよ	4. 負担 R_x を最小化せよ
5. 一致を求めよ	5. 敬意を示せ
6. 不一致を避けよ	6. 謝罪せよ
7. 共通基盤を想定・喚起・主張せよ	7. S と H を非人称化せよ: 人称代名詞「私」「あなた」を避けよ
8. 冗談を言え	8. FTA を一般的規則として述べよ
9. S は H の欲求を承知し気遣っていると主張せよ, もしくは, それを前提とせよ	9. 名詞化せよ
10. 申し出よ, 約束せよ	10. 自分が借りを負うこと, 相手に借りを負わせないことを, オン・レコードで表せ
11. 楽観的であれ	
12. S と H 両者を行動に含めよ	
13. 理由を述べよ (もしくは尋ねよ)	
14. 相互性を想定せよ, もしくは主張せよ	
15. H に贈り物をせよ (品物, 共感, 理解, 協力)	

※「S」は話し手, 「H」は聞き手を表す。

B&L をはじめとする推論説の研究者は、行為者を合理的なモデルパーソンとして捉え、

ポライトネスの普遍性を説いた。彼らの主張、特に B&L のポライトネス理論を、個人的方略に偏った欧米中心的理論であると批判したのが「ポライトネスは社会規範で判断される」説（以下、社会規範説）である。その代表例である Matsumoto (1988), Ide (1989) および井出 (2006), Gu (1990)等は、B&L の主張する普遍的な個人のストラテジーとしてのポライトネスを西洋文化的なものとし、非西洋の特定の言語文化におけるポライトネスは、年齢や社会的身分などに応じ社会的に期待されている信念、つまり社会規範に従うことによって遂行されるものであると主張する。この立場は、同じ社会文化的背景を持つ人々は基本的に同じ価値観やポライトネス観、そしてポライトネス評価の基準を共有するという想定に基づいている (Watts 1992, 2003; Eelen 2001)。

この中でも Ide (1989: 243) は、B&L の理論を、個人主義と合理主義という西洋的先入観に基づく偏った理論だと痛烈に批判し、敬語のある日本語のポライトネスとは異なるものだと主張している。Ide は、前者の非敬語文化圏（西洋）のポライトネスを「働きかけ (volition)」、後者の言語文化圏（たとえば日本）におけるポライトネスを「わきまえ (discernment)」と呼び(ibid: 230–231), それぞれが異なるポライトネスの形であると述べている。働きかけが、話し手の意図に基づく個人の目的達成のための言語使用であるのに対し(ibid: 242) , わきまえとは、「社会的にこれはこういうものだとして認められているルールにほとんど自動的に従うことを意味し、[中略] 期待されている基準に従うということである (井出 2006: 115)」。わきまへの文化圏では、ポライトな言動が良い社会構成員の証とされる(Ide 2003)。どの言語、文化のポライトネスにも働きかけとわきまへの側面が存在するが(Ide 1989: 233), その比重は言語文化社会によって異なり、敬語文化圏の日本におけるポライトネスはわきまえが主であるという主張が一貫してなされている。

ポライトネスの判断基準は「推論」なのか「社会規範」なのか。このような「個人と社会」、「行動と構造」といった対立は、社会科学において長く議論されてきたテーマと言える。この点を、Sperber & Willson (1986/1995², 以下 S&W) の関連性理論や Bourdieu の社会理論を用いて説明したのが、「ポライトネスの判断基準は推論と社会規範のいずれでもありうる」説（以下、推論・社会規範説）である。その代表例である Watts (1992, 2003) および Watts *et al.* (1992), Eelen (2001), Mills (2003)の研究は、ポライトネスを社会・共同体との相互行為によって社会的価値観を創り出し評価する動的なもの、すなわち「ハビトゥス」の現れとして捉える。彼らの研究は、社会規範説のような「推論を重視する文化圏もあるが、社会規範を重視する文化圏もある」と2つを区別する捉え方ではなく、互いに影響を

与え合う関係として推論と社会規範を捉えていると言える。以下、S&W (1986/1995²) の関連性理論と Bourdieu の社会理論についてその概略を述べ、その後 Watts (1992, 2003)を中心に紹介する。

ポライトネスの判断基準という知識は、どのように共有されているのであろうか。そもそも本当に共有されているのか。これらの疑問に答えるのが、S&W の関連性理論である。S&W の関連性理論とは、コードモデルや Grice の理論を批判し、相互行為における認知と伝達のメカニズムを「関連性の原則」で説明しようとする理論である。コードモデルはメッセージのコード化とコード解読による伝達モデルである。このモデルには、聞き手が話し手の意図を正確に復元するためには、その意図に用いられる文脈情報はすべて話し手と聞き手が知っているだけでなく、相手が知っていることを相互に知っているという、「相互知識」が必要となる。この相互知識は、「話し手 A は聞き手 B が文脈情報を知っていることを知っていて、聞き手 B は聞き手 B が文脈情報を話し手 A が知っていることを知っていて…」という無限のループに陥るという問題を内在する (S&W 1986/1995² 内田他訳: 20) が、S&W の関連性の原則はその問題を解消する。関連性の原則は、「人間の認知は、関連性が最大になるようにできている」という認知に関する原則と、「すべての意図明示的伝達行為は、それ自身の最適の関連性の見込みを伝達する」という伝達に関する原則の2つから成る (ibid 内田他訳: 318)。「意図明示的伝達行為」とは、命題とそれを伝える意図を「顕在的 (manifest)」にする伝達行為のことであり、伝達者はこの行為により「関連性の見込み (顕在化された刺激が受け手にとって処理する価値のある関連性の高いものであるという見込み)」をも伝達する (ibid 内田他訳: 192)。そして受け手はこの刺激を、関連性が最大になるように推論により認知する (ibid 内田他訳: 318)。すなわち、ポライトネスの判断基準も、「相互知識」ではなく「顕在的」なものであるということになり、コードモデルによる「共有の無限ループ」問題から解放されることになる。また S&W は、Grice の理論について、CP を遵守した明示的な発話と CP からの逸脱である非明示的な含意の違いから出発しているが、前者を「慣習の集合をコードと捉えるコードモデル」に相当するものだと批判している (ibid 内田他訳: 198)。これに対し、関連性理論は、明示的なもの、非明示的なものの両方を含む意図明示的伝達行為に関して、その認知と伝達のメカニズムを説明することができる (ibid 内田他訳: 198–199)。

次に Bourdieu の社会理論であるが、これは、長く社会科学で議論されてきた個人と社会、行動と構造、主観と客観といった、二項対立を超える体系的試みである (Thompson 1991:

11; 栗原 2009: 84)。その理論にはさまざまな用語が登場するが、ここでは、推論・社会規範説に用いられる「ハビトゥス (habitus)」, 「資本 (capital)」, 「場または界 (champ/field)」, 「慣習行動・実践 (pratique, practice)²」に限り、その意味を説明する。「ハビトゥス」とは、諸々の性向 (dispositon, 行為者の行動や知覚を規定する潜在的な方向づけ) の体系として、ある階級や集団に特有の行動・知覚様式を生産する規範システム (Bourdieu 1979 石井訳: vi), すなわち「構造化された構造」であり「構造化する構造」である(Bourdieu 1980 今村・港訳: 83)。「資本」とは、階層や身分、教養や学歴といった、身につけたり社会から付与されたりする個人の資源が結びついたものである (Bourdieu 1979 石井訳: vi)。「場 (界)」とは、共通項を持った行為者の集合と、それに付随する諸要素 (組織, 価値体系, 規則など) によって構成される社会的圏域である (ibid 石井訳: vi)。「慣習行動・実践」とは、人が日常生活のあらゆる領域において普段意識的にまたは習慣的におこなっているさまざまな行動である (ibid 石井訳: vi)。Bourdieu (1990) は、慣習行動・実践を、場 (界) におけるハビトゥスと資本の融合による産物として、

(2.2) [(habitus) (capital)] + field = practice

という公式で示す。すなわち、行為者の「意図」と「社会規範 (への自動的追従)」を二分せず、それぞれが影響し合うものと捉える。ハビトゥスやその現れである慣習行動・実践は、特定の階級や集団、身分などの特徴を示し、その階級や集団、身分の行為者が慣習行動・実践を繰り返すことにより、同様の構造を再生産する(Bourdieu 1979 石井訳: 263-264)。その一方で、社会的に下位に位置する者が成り上がろうとしたり、上位に位置する者がそれを避けるためこれまでとは違った慣習行動・実践を見せるようになったりと、変化していく動的なものでもある(ibid 石井訳: 150)。

Watts (1992, 2003) をはじめとする推論・社会規範説は、ポライトネスの判断基準に関する知識の共有、そして「推論」と「社会規範」の二項対立問題を、関連性理論やハビトゥスの概念を援用することで改善した。Watts は、推論説や社会規範説が、社会や行為者を合理性や社会規範に従う静的な存在として扱っているため、先にある理論を支える現象を証拠として示すというトップダウン的傾向を持つという問題点も指摘している。この問題に

² 'pratique (practice)' は「慣習行動」, 「実践」, 「慣習行動・実践」, 「実際」など、さまざまな和訳があてられているが、本稿では「慣習行動・実践」に統一する。

関しても、推論・社会規範説は、行為者の慣習行動・実践を、ある程度の安定性はあるものの、時代や場によって変化する Bourdieu のハビトゥスの現れと捉え、実際の慣習行動・実践を観察するというボトムアップ的な方法論をとることで改善している(Eelen 2001)。このようなボトムアップ的方法論は、次節でも扱うエスノメソドロジーに基づく会話分析と類似している。さらに Watts は、これまでひとまとめにポライトネスとされてきたものを、慎重で適切な行動である「ポリティックな行為 (politic behavior)」と、適切さを越えたものである「ポライトネス」の2つに分けた。前者は現行の社会的相互行為に適切と認められる無標の行為であり、後者はそれを越えた有標の行為を指す (Watts 1992: 50–51)。反対に、「ポリティックな行為」から見て、否定的な有標の行為はインポライトネスと判断される (Watts 2003: 21)。Watts は、「ポリティックな行為」および(イン)ポライトネスを、Bourdieu の慣習行動・実践の一部と捉え、言語的慣習行動・実践を、

(2.3) [(linguistic habitus) (linguistic capital)] + linguistic marketplace = linguistic practice

という公式で示している(ibid: 150)。Watts (2003: 150) によると、言語的性向の体系である言語的ハビトゥスとは、個人が獲得した言語的資本がかけ合わされたものが、言語的場の客観化された言語構造と結合したものである。相互行為が「ポリティックな行為」なのか、(イン)ポライトな行為なのかという解釈は、相互行為者それぞれのハビトゥスと、その相互行為の目的のために社会集団が個人に与えるフェイスから派生する (ibid: 202)。さらに、Watts *et al.* (1992: 3–4) は、一般的な共通概念としてのポライトネス（第一のポライトネス）と、科学的概念としてのポライトネス（第二のポライトネス）を分けるべきだと主張し、Eelen(2001)にも支持されている。

以上、判断基準の別に基づきポライトネス研究の展開を概観した。B&L のポライトネス理論が引金となり、その判断基準が行為者の意図に関する「推論」なのか、「社会規範」なのか、その両方なのかという議論が活発に行われた。この問題は、推論・社会規範説が援用するハビトゥスの概念により、ある程度解決を見たと思なすことができる。だが、ポライトネス評価と行為者の関係については、「人はみな同じ」という普遍的な行為者観に立った B&L による話者間の関係性（話し手と聞き手の「社会的距離 D」、話し手と聞き手の「相対的力 P」）以外、ほとんど触れられていないという問題は残されている。

第 2.2 節 ポライトネスと性別

ポライトネスにかかわる行為者についての研究の多くは、前節で述べた話者間の関係性以外は性別に関するものである。そのため、本節ではポライトネス研究において行為者の性別に注目したもの、そしてエスノメソドロジー研究やジェンダー言語学からポライトネスに関連のあるものを紹介する。ポライトネスと性別の関係は、ポライトネス研究の先駆者とされる Lakoff(1973, 1975)の指摘を皮切りに、前節で述べた判断基準同様熱い議論がなされてきたテーマである。ここでは、まず Lakoff の主張を紹介し、その後の研究の展開を概観する。ポライトネスと性別に関する研究は、実際の言語使用を観察し必ずしも女性が男性よりポライトな言動を見せるわけではないことを示す研究(以下、性差不在説)、反対に実際の言語使用を観察し女性が男性よりポライトな言動を見せることを示す研究(以下、性差肯定説)、ポライトネスに関するジェンダー・ステレオタイプが存在を主張する研究(ステレオタイプ説)の、3つに分けることができる。

Lakoff (1973) は、ポライトネスの判断基準として推論説を唱える 1 人である。彼女は、(1)Be clear と (2)Be polite の 2 つから成る「語用論的能力の規則」の存在を主張し、前者を Grice の CP に沿った合理的言語行動、後者を CP と相反する関係にあるものと捉えた (ibid: 296)。(2)Be polite は「強要しない (Don't impose)」, 「選択の余地を与える (Give options)」, 「相手の気分を良くする (Make A (addressee) feel good – Be friendly)」の 3 つから成る (ibid: 296–298)。Lakoff(1975)は、男性に比べ女性の言動がポライトであるというステレオタイプや、間接的で繰り返しが多く、まわりくどい、不明確で誇張が多いという、Grice の CP に違反する女性のステレオタイプの会話のルールが存在を指摘する。Lakoff(1975)はポライトネスにかかわる性差を、男性と権力、女性と権力のなさという、両者の力関係を前提として論じており、独立した判断基準の 1 つとは考えていない。Lakoff の主張は、女性が権力を持てば、このようなステレオタイプは解消されると考えているようにも見えるため、「性差不在説」「性差存在説」「ステレオタイプ説」のいずれかに分類することは避け、あくまでポライトネスと性別に関する議論の出発点として扱う。

Lakoff の主張に対し、言語形式、談話、音響的特徴など、ポライトネスにかかわるさまざまな側面に関して、性差不在説を唱える研究が行われた。ポライトネス研究の中心的存在である B & L は、1987 年改訂版で、ジェンダーと「相対的力 P」を同一視する Lakoff の主張を批判的に取り上げ、女性が男性よりも常にポライトであるとする考えに疑問を呈した(B&L 1978/1987 田中他訳: 40–41)。また、Crosby & Nyquist(1977)は、Lakoff(1973, 1975)

が挙げたポライトネスにかかわる女性の言動の特徴について調査を行っている。彼らは、「警察官」と「来訪者」という役割を変数に加え、Lakoff が指摘する女性の言動の特徴の、男女による実際の使用量を比較した結果、女性による使用が男性に比べ有意に多かったが、それ以上に役割による使用量の違いが大きいことを示した(ibid)。この結果を受け、彼らは女性の言動の特徴の使用量が、相対的力関係で説明できるものではないと主張している(ibid)。日本語に関する研究でも、宇佐美(1994)が、話題導入のポライトネスの側面と性別および力(年齢と社会的地位)について調査し、性別に関係なく、力関係において上の者が自分本位に話題を導入する傾向にあることを報告している。

反対に、性差存在説を唱える研究も数多く行われている。男性による女性の発話への割り込みが多いこと(Zimmerman & West 1975)、女性に比べ男性が会話の主導権を握る傾向にあること(Maltz & Borker 1982)、男性がジョーク³を披露し会話の主役になることが多い一方、女性はそのジョークを聞いて笑うことはあっても笑わせる側になることはあまりないこと(Tannen 1990)など、ポライトネスにかかわるさまざまな性差の存在が主張された。会話における割り込みについて調べた Zimmerman & West(1975)は、同性間の会話では割り込みの回数に性差がないのに対し、異性間の会話では圧倒的に男性が女性の会話に割り込み、女性の発話を遮断していると述べている。江原他(1984)は、日本語母語話者を対象とした研究においても、Zimmerman & West(1975)と同様の結果が得られたことを報告している。この2つの研究は、エスノメソドロジーに基づく会話分析研究であり、第2.1節で述べた推論・社会規範説に近い行為者観を前提としている。エスノメソドロジーとは、社会成員による実際の言動を観察し、そこから社会規範をあぶりだそうとするボトムアップ的研究方法である。そのため、彼らの研究結果は、会話の相手の話に割り込む行為は話の主導権という力を持つ男性が行う場合、インポライトではない、という社会規範が存在することを意味することになる。また、社会規範説を唱える Ide(2003)は、ポライトネスに関する社会規範に従い、わきまえた言動を行うことが、良い社会構成員の証明となるとし、女性によるポライトな言動が男女の力関係に起因するという主張を否定する。Ide(2003)によると、ポライトネスをその特徴とする日本語の「女ことば」は、女房詞と遊女語をもとに形成され、所属するグループのことばである「位相語」の1つと位置づけられている。「位相語」とは、社会的・職業的役割により類型化された人々のことばの種類とされる(井出

³ 「冗談(ジョーク)を言え」は第2.1節で紹介したB&Lのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの1つである(表2.3のポジティブ・ポライトネス・ストラテジー8を参照)。

2006: 175)。Ide(2003)では、女房も遊女も教養のある地位の高い存在であり、そのことば遣いをもとに形成された「女ことば」は格式高いものであることや、現代において「女ことば」は社会的地位の高い女性によってその役割に応じて使用されることが述べられている。

実際の言動だけでなく、ポライトネスに関するジェンダー・ステレオタイプの存在を主張する研究も多い。Mills(2003 熊谷訳: 279)は、B&Lのデータがその主張に反し全般的に女性が男性よりも常にポライトであることを示していると指摘し、B&Lの研究が話し手のポライトであろうとする意図しか扱わず、意図とは合わないようなポライトネスのステレオタイプの評価を扱うことができないと批判する。推論・社会規範説を唱える Mills (2003 熊谷訳: 17) は、ポライトネスを、発話の特徴や個人の選択の結果ではなく、「実践コミュニティ(特定の目的を遂行するために集められた人々の集団)」が展開、支持、議論する慣習行動・実践、またはコミュニティ内で個人が自身について、また他者の行動や地位について評価する慣習行動・実践と捉えている。Millsによると、ジェンダー、人種、階級、年齢、学歴、教養といった要因が、それぞれの実践コミュニティ内での言語上の適切なふるまいに対する考え方を決定する(ibid 熊谷訳: 18)。日本語社会に関する研究では、江原(2001)が、行為に関する評価基準として男性版と女性版の二種類が存在し、それらが構造化された構造および構造化する構造としてのジェンダー・ハビトゥスとなり、またメディアが流布する「疑似科学的言説」などによって強化、維持されていることを指摘した。江原(2001)はまた、優しく穏やかな話し方や丁寧なことば遣いといった「女性らしさ」に関する信念が、女性たちの慣習行動・実践の実態にかかわらず強く支持されるステレオタイプのものであること、女性にはことば遣いだけでなく笑顔で対応するといった「感情労働」も求められることなどを指摘している。Millsや江原の主張は、丁寧で上品な「女ことば」が、イデオロギーに基づき作り上げられ、維持されてきたジェンダー・ステレオタイプであるとする中村(2007)の主張に通じるものである。中村(2007)によると、「女はどのくらい、どのように話すべきなのか」という日本語社会における「女の話し方」イデオロギーは、鎌倉・室町時代に流入した、中国の儒教思想に基づく女訓書により広まり、現代の「女ことば」にも影響を与えている。「女の話し方」イデオロギーにおいて良しとされる「女の話し方」は時代とともに変化するが、良いことば遣いをするのが「良い女」となることであり、ことば遣いが「女の価値」を決める1つの要素だとする姿勢は貫かれてきた(中村 2007)。戦後、「女ことば」は「日本女性が、その女らしい本性に基づいて話しつづけてきた日本語の伝統」であるという理念が広まり、現在一般の日本語母語話者だけでなく、言語学者に

も共有されている(ibid: 308-309)。

以上、ポライトネスと性別に関する研究を概観した。もし、ポライトネスの性差にかかわるハビトゥスが、本来的・生得的な差異ではなくジェンダー・ステレオタイプによるものであるならば、性差不在論と性差存在論の両方が存在する理由もそこに帰結すると考えられる。すなわち、ジェンダー・ステレオタイプがハビトゥスとなり、慣習行動・実践として前面に現れ、実際に観察される場合もあれば、観察されない場合もあるということである。ステレオタイプは性別によるものだけでなく、人種や宗教、外見、血液型、県民性によるものなど、数多く存在するが、日本語社会においてジェンダー・ステレオタイプがイデオロギーとして維持されてきたのだとすれば、他のステレオタイプよりも影響力が強くなったという可能性はある。しかしながら、このような可能性が他のステレオタイプによるポライトネスへの影響を軽視して良い理由にはならない。

第 2.3 節 ポライトネスと日本語教育

本節では、ポライトネスと日本語教育に関する先行研究、そして日本語教材におけるポライトネスの扱いについて、行為者の扱い方に注目し述べる。これらの多くは、ポライトネスに関するコミュニケーションの失敗を、「日本語社会と他言語社会の文化差」によるものとして取り扱っている (Gumperz 1982; 笹川 2016 他)。これはすなわち、行為者に関しては「人はみな同じ」という前提に立ち、日本語社会におけるポライトネスに関する推論パターンや社会規範などのハビトゥスを習得し、慣習行動・実践として反映しさえすれば、ポライトネスは伝わるという主張であると見なして良いであろう。一方、特に初級後半以上の日本語教材ではことばの性差を扱う頻度は高く (水本他 2009)、ポライトネスに関しても「実は性差は存在する」と暗に示しているものもある (たとえばスリーエーネットワーク 2001)。

笹川 (2016) は、1992 年に行ったポライトネスに関する 9 言語 (日本語, 韓国語, 中国語, タイ語, インドネシア語, ブルガリア語, ポルトガル語, ドイツ語, 英語) 比較調査の結果を再分析し、それぞれの言語社会における依頼表現の違いを紹介している。笹川は、異文化間コミュニケーションにおいて、ポライトネスに関する「ルール」の相違が、齟齬の原因になることが多いため、それぞれの「ルール」を知り、比較する必要があると主張する。ここで「ルール」と呼ばれるものは、日本語社会におけるポライトネスに関する推論パターンや社会規範などのハビトゥスと考えられる。笹川の主張は、ポライトネスに関する

日本語社会と学習者の母語社会のハビトゥスの違いを調べ、学習者が日本語社会のハビトゥスを習得し、慣習行動・実践として反映すれば、ポライトネスは伝わるという主張であり、「人はみな同じ」という行為者観に立つものとみなすことができる。

このような「人はみな同じ」という前提に立った研究に対し、初級後半の日本語教材は「実は性差は存在する」という前提が透けて見えるものが多い。たとえば、日本国内外で広く使われている日本語初級教材『みんなの日本語初級』には、初級後半に「勉強しろ」「走れ」などの命令形、「遊ぶな」「捨てるな」などの禁止形から成る命令文と禁止文が扱われるが、教師用の『教え方の手引き』には「年齢が上の男性から下の者に」「男性の友人同士」などその使用が男性に限られると書かれている（スリーエーネットワーク 2001: 80-82）。一方、命令文や禁止文の使用実態に関する研究では、性別による大きな差は見られないという報告がある（たとえば森 2013）。これは、ぞんざいとされる言語形式の使用は男性に限定され、女性の言動はポライトであるべきとする、「実は性差は存在する」というジェンダー・ステレオタイプを前提とするものである。このようなポライトネスにかかわる言語形式を扱う際、日本語教師は教材に従い「実は性差は存在する」という前提に基づき指導するか、「人はみな同じ」という前提に基づき指導するか、選択を迫られることになる。

以上、日本語教育とポライトネスに関する先行研究および教材において、基本的には「人はみな同じ」としながら、「実は性差は存在する」という行為者観が存在することを示した。次節では、第 2.1 節～第 2.3 節で示した先行研究の問題点を指摘し、改善案を示す。

第 2.4 節 先行研究の問題点と改善案

第 2.1 節～第 2.3 節では、従来のポライトネス研究を、判断基準、性別、日本語教育との関連において概観しまとめた。本節では、ポライトネスに関する先行研究の、解決されていない問題点を 2 つ指摘する。

1 点目は、ポライトネス研究の多くが前提とする、「人はみな同じ」という行為者観では捉えきれない現象がある点である。第 2.2 節で示したように、性別はポライトネスの判断に大きな影響を与えており、ポライトネス研究における性別は、時に推論の材料になり、時に社会規範に含まれるという、便利な扱い方をされている。たとえば、女性が男性に比べポライトであることを期待されるのは、推論説においては女性が男性より相対的力が弱いからであり(Lakoff 1973, 1975)、社会規範説においてはそれが望ましい女性の言動である

という社会規範が存在するから(Ide 2003; 井出 2006)である。いずれにせよ、行為者が男性か女性かという性別によって、期待される言動や評価が異なるのだとしたら、ポライトネスの判断基準にかかわる性差は、少なくともステレオタイプとしては存在していると考えられる。2点目は、ポライトネスの判断基準にかかわる行為者の要素について、「実は性差は存在する」と認めるだけでは不十分であるという点である。言い換えれば、「どのような男性／女性か」ということが判断基準となるということの意味する。現実のコミュニケーションにおいて、「人はみな同じ」「実は性差は存在する」という行為者観では捉えきれない現象を見出すことは難しいことではない。本研究の主張は、性別だけではなく、行為者の年齢、職業、階層、容姿・風貌、性格など、さまざまな要素がまとまった集合体としての行為者像、つまりキャラが、ステレオタイプのポライトネスの判断基準となりうるということである。同様の言動をした複数人に対する評価が、行為者によって異なることへの不満の例として、インターネット上の女性向け掲示板への投稿文を下の(2.4)(2.5)に示す。

(2.4) 匿名さん, 2016/12/18 投稿

職場で何かミスをしてそんなに怒られない人っていますよね。

前、職場の男性陣が〇〇さん(女性)なら、許してしまうなあと言っていて、羨ましさすぎる。。と思いました。

[ガールズちゃんねる, <http://girlschannel.net/topics/994589>, 2017年12月23日]

(2.5) 匿名さん, 2014/10/29 投稿

何をやっても許される人ってなんで?

同じ職場にいるんですが、遅刻の常習犯でおまけに仕事に居眠り当たり前。でも、上の人(男性達)からは好かれてる。決して可愛い訳でも綺麗な訳でもないのに..きっと同じ事私がしたらボロクソ言われるのに。不思議。

[ママ・スタジアム, <http://mamastar.jp/bbs/comment.do?topicId=2342318>, 2017年12月23日]

上の(2.4)(2.5)では、投稿者である女性が、行為者である別の女性への評価が自分への評価と異なることを、否定的に指摘している。どちらにおいても、投稿者と行為者は性別が同じで、受け手との社会的距離や相対的力の面で特に違いはないか、少なくとも投稿者はこれらの影響を大きく捉えていない。このような不平等な評価への不満は、インターネット

上に数多く掲載されており、(2.4)(2.5)が特殊な例であるというわけではない。行為者の性別以外の要素が評価に影響を与えており、その影響が決して小さいものでないことは明らかである。上の(2.4)(2.5)がポライトネスにかかわる現象であるか否か、書かれている内容から判断することは難しいが、コミュニケーションにおける行為者という要素が、ポライトネス評価においてのみ影響を与えないとは考えにくい。

本稿は、上述2点の問題を改善するために、ポライトネスの判断基準として行為者のキャラを導入することを提案する。第3章で詳しく述べるが、キャラとは、特定の言動と観念的に結びついた、つまり、ステレオタイプ的人間類型であり、年齢、性別、職業、階層、容姿・風貌、性格など、さまざまな要素を包む概念である。

第2.5節 本研究におけるポライトネス

本章で見てきたとおり、すでに先行研究による数多くのポライトネスの定義が存在する。本節では、先行研究の知見を踏まえた、本研究におけるポライトネスの概念について述べる。

本研究は、受け手・第三者が話し手・書き手の気遣いを感じ、話し手・書き手に対して悪い印象を抱かないという特徴を持つ、話し手・書き手の言動の様態を「ポライト」と呼ぶ。反対に、受け手・第三者が、話し手・書き手から気遣いを感じず、話し手・書き手に対して悪い印象を抱くという特徴を持つ話し手・書き手の言動の様態を、「インポライト」と呼ぶ。ポライトとインポライトの度合いが本研究における「ポライトネス」である。ポライトネスは、B&Lのネガティブ・ポライトネスとポジティブ・ポライトネスの両方を含むもの、すなわち“politeness”の和訳である「丁寧さ」と、“friendly”の和訳「親しみやすさ（親しさ）」から成るものとする（滝浦 2008）。後者には、ポライトネスに関するジェンダー・ステレオタイプとして指摘された共感や笑顔などの感情労働も含まれる。ポライトとインポライトの評価はあくまで程度問題であり、「どちらでもない」「どちらかわからない」という中間的な評価の存在も想定される（図 2.1 参照）。たとえば、「受け手・第三者が話し手・書き手の気遣いを感じるが、話し手・書き手に対して悪い印象を抱く話し手・書き手の言動」や、「受け手・第三者が、話し手・書き手から気遣いを感じないが、話し手・書き手に対して悪い印象を抱かない話し手・書き手の言動」といった、上述の定義の中間にあたるような言動は、図 2.1 の灰色部分のどこかに位置すると考えられる。ただし、Watts(2003)のように「ポリティックな行為」とポライトな言動をはっきりと区別すること

はしない。その理由は、これらを明確に二分することが困難であり、また本稿の目的から二分することに大きな利点はないと考えるためである。

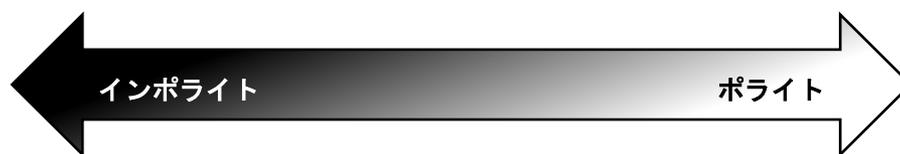


図 2.1 ポライトネス評価のイメージ

「気遣い」に関して、実際に気を遣ったか否かという行為者の意図は考慮しない。話し手・書き手が意図する場合の意図 “implicature”ではなく、受け手や第三者がことばから推論により勝手に読み取ってしまう話し手・書き手の意図 “implication”に関する気遣いのみを指す。また、「意図」と「社会規範」を明確に独立したものではなく、密接に関連し影響を与え合うハビトゥスとして存在すると考える。以後「意図」や「社会規範」という記述は、それぞれが影響を与え合うものを指す。

また、「話し手・書き手の気遣いの対象」として、受け手や第三者、組織やコミュニケーションの場など複数考えられる。これは、日本語社会におけるポライトネスが、受け手の2つのフェイスへの気遣いだけでなく、話し手・書き手と受け手、同席する他者との「円滑な(宇佐美 2003; 井出 2006)」コミュニケーション遂行に向けられた気遣いも射程に含むからである。極端に言えば、話し手・書き手が受け手の2つのフェイスを傷つけたとしても、他者を含むコミュニケーションが円滑に進み、コミュニケーションの場が和やかで穏やかな雰囲気になるならば、受け手にも他の参加者にもインポライトと評価されないことは十分にある。そのため、話し手・書き手の受け手に対する言動についての、コミュニケーションの場の同席者を含む第三者による評価を、本稿におけるポライトネス評価とし、受け手自身に評価を問うことはしない。また本稿は、コミュニケーションの失敗例を扱うため、第三者によるポライトネス評価のうち、インポライトと判断されるか(図 2.1 における黒色部分から黒色に近い灰色部分)許容されるか(図 2.1 における灰色部分から白色に近い灰色部分)という点に注目する。

第3章 キャラ研究と本研究における定義

本章では、本研究の理論的背景となるキャラについて述べる。第3.1節では、キャラ研究の概要を紹介し、第3.2節ではキャラの類似概念である「役割」および「成員カテゴリー」との違いについて、第3.3節では、キャラとことばの結びつきについて述べる。第3.4節では、本研究におけるキャラの定義と既存のキャラ概念との違いを示す。

第3.1節 キャラ研究の概要

本研究が理論的背景とする「キャラ」とは、日本語社会で一般的に広まっている概念であり、「本当は意図的に変えることができるが、変わらない、変えられないことになっているもの。それが変わっていることが露見すると、見られた方も、見た方もそれが何事であるかすぐに分かり、気まずい思いをする（定延 2015）」、「スタイル以上、人格未満」の、状況に応じて変わる人間（定延 2006, 2011, 2015 他）の類型である。「キャラ」は「キャラクタ」の略語であるが、本稿では原則的に「キャラ」に表記を統一し、引用の場合原典どおり「キャラクタ」を用いることとする。

「キャラ研究」と名のつく研究は、社会学やマンガ論などさまざまな分野で行われ、定義にも一貫性が見られない。定延（2018, 近刊）は定義によりキャラ研究を3つに分類している。1つ目は、英語“character”の和訳である、「登場人物」を指すものである。物語におけるキャラクタの配置や設定に関する研究がこれにあたる（たとえば新城 2009）。2つ目のキャラ研究におけるキャラは、「多くの場合、比較的に簡単な線画を基本とした図像で描かれ、固有名で名指しされることによって（あるいは、それを期待させることによって）、「人格・のようなもの」としての存在感を感じさせるもの（伊藤 2005: 95）」である。たとえば、マンガの登場人物があるコマでは8頭身、あるコマでは2頭身と姿を変化させても、読者に同一の登場人物であると認識させる、「同一性」を支える描画的特徴と言い換えることができる。これらに対し、定延（2006, 2011, 2015, 2018 他）や瀬沼（2006, 2007, 2018）による「現代日本語社会における、状況に応じて変わる人物像」というのがキャラ研究の3つ目となる。定延（近刊）は非意図的な行為者としてのキャラに注目しているが⁴、定延（2006, 2011, 2015, 2016, 2018）では、上に示した定義のとおり、意図的・非意図的両方を

⁴ 定延（近刊）は、定義を厳密化し、意図的に操作される場合を「偽の人格」「偽装」として非意図的な専門語「キャラ」と明確に区別している。

含む概念としてキャラを捉えている。瀬沼 (2007, 2018) は、若者コミュニケーションにおいて楽しく過ごすために意図的・非意図的に集団内に出現する役目のようなものとしてキャラを捉えている。また、瀬沼 (ibid) は、身体的な特徴、見た目、服装、性格、能力、話し方などから特定のキャラとして扱われるという、キャラのステレオタイプの側面を指摘している。

本研究は、行為者の意図性を問わないため、定延 (2015) の定義を概ね採用し、意図的・非意図的な側面の両方を扱う瀬沼のキャラ概念を一部加えて用いる。本稿における定義は第 3.4 節で述べるが、定延 (2015) の定義と共通する点として、以下、安定性、意図性、生産性と現れ方に関する特徴を紹介する。

定延 (2018: 2) によると、「スタイル」とは、意図的に切り替えられるものであり、かつ、あからさまに切り替えても差し支えないものである。たとえば、目上の相手に敬語で話し、目下の相手にぞんざいに話すといった現象がこれにあたる。また、「人格」とは、安定性が高く、普通は意図的に切り替えられないものである (ibid)。たとえば、解離性同一性障害 (いわゆる多重人格) などで、1 つの人格から別人格になると、先の人格時の記憶や感情が切り離され、忘れられるといったことが起こる。スタイルの意図的な切り替えとは異なり、人格が変わることは病理的な現象と言える。

これらに対してキャラは、「スタイル以上、人格未満」の安定性を持つ、「人間が外圧と内圧⁵のはざままでバランスをとってやっていくための баланサー (ibid: 4-5)」であり、人間の柔軟性と不変性を同時に扱うことのできる概念である。定延 (2006) によると、キャラは「実際には私たちが場面や相手に応じて多かれ少なかれ変えているにもかかわらず、場面や相手によって変わらず、ちょうど身体のように安定していて、一人に 1 つしかない (ibid: 118-120)」と見なされている。そのため、キャラの切り替えが目撃された場合、その行為者も目撃者も気まずい思いをすることになる。キャラの切り替え (変更) や取得は、個人が意図的に行う場合もあれば、個人の意図とは関係なく特定のキャラにされてしまっている場合もある。次に示す(3.1)は前者、(3.2)は後者の例である。

(3.1) 「キャラ変更成功した人いますか？」

nreuii さん, 2013/08/08 投稿

⁵ 外圧とは、学校やバイト先などのそれぞれの「状況に対応せよ」という圧力であり、内圧とは、「いつも素の自分のままでいたい。状況が変わっても変わりたくない」という欲望である (ibid: 4)。

キャラ変更成功した人いますか？

私はいじられキャラなのですが少しだけキャラ変更したいと思っています

[後略]

bawdieslike8 さん, 2013/08/08 投稿

私は高校二年生です。私は、中学1年の時は女子とは思えない位男子とケンカして先生に呼び出され…。それでも友達とは仲良くやってきました。しかし、このまま荒れたキャラでいくのはキツイと思い、夏休み明けに雰囲気を変えて登校し、イライラしても我慢して大人しい女の子を演じました。そしたら、いつのまにか、自分も普通に大人しいキャラになり、中3では幼馴染の男子に、すっごく女っぽくなったなっていわれました♪そのおかげで、現在高校では天然キャラでやっていけてます♪

[Yahoo! JAPAN 知恵袋, https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q14111522309,

2018年1月3日]

(3.2) 「フレッシュャーズ 本当は私、違うんです！ 職場でつけられたこんなキャラ」

- ・ 職場／親分キャラ, 職場以外／いじられキャラ

職場内の引っ越しでおじさんをこきつかって以来、すっかり親分キャラが定着してしまった (女性/27歳/運輸・倉庫)

- ・ 職場／ホモキャラ, 職場以外／真面目キャラ

部署の同僚にいじられたのがきっかけで定着。最初は戸惑いを感じていたが、今ではそのキャラを楽しむ余裕さえ生まれた (男性/28歳/その他)

[マイナビ学生の窓口, <https://gakumado.mynavi.jp/freshers/articles/10939>, 2018年1月3日]

(3.1)では、現在のキャラを変えたいがキャラ変更は成功するものなのかという nreui さんの問いかけに、bawdieslike8 さんが成功者として回答している。bawdieslike8 さんは、以前の「荒れた」キャラから、意図的に「大人しい」キャラ、「天然」キャラとなり、周りからもそのようなキャラとして認められたと述べている。(3.1) は意図的にキャラを選ぶことができることを示す例と言えるであろう。一方 (3.2) は、「本当の私=素」と「職場でのキャラ」が異なり、状況や周りの期待から個人の意図とは関係のないキャラにさせられることがあるという事実を示す例である。「本当の私=素」といっても、自身が何キャラなのかを

知らない人は多く（瀬沼 2007）、実際に意図的なキャラの取得や切り替え（変更）が成功しているか失敗しているかは把握しにくいようである。また、キャラのあからさまな切り替えや意図の露見は周囲を戸惑わせたり、場合によっては非難されたりするという点（瀬沼 2007）⁶において、スタイルとは大きく異なる。ただし、「遊び」の文脈」や冗談発話におけるキャラの切り替えは「公然と意図された「キャラ変え」」であるが、例外的に非難の対象にはならない（定延 2011: 35, 2016 191-198）。

さらに、キャラは、実際の社会的属性に還元されないものをも含む観念的な概念であり、そのため次々に新しく生み出されるという生産性の高いものでもある。たとえば、日本語社会では、断定の「だ」の代わりに「でおじゃる」と言う「平安貴族」や、「ワレワレハウチュウジンダ」などと全体に平坦な音調で話す「宇宙人」といった存在が観察される。だが、実際に「でおじゃる」と話す平安貴族の存在を示す資料がなく、宇宙人はまだ発見されていないことから、これらの観察は属性や役割に還元されないものである（定延 2011）と言える。(3.1)(3.2)に示した「いじられ」キャラや「天然」キャラのような知名度の高いと予想されるものから、(3.2)の「ホモ」キャラや次章で見る「スロット」キャラなど、知名度のそれほど高くないと予想されるものまで、インターネット上では数多くのキャラに関する言及がなされており、その生産性の高さがうかがえる。キャラは、観念的なものであるがゆえに、新たに生まれやすいと言えるであろう。

キャラの現れ方について、私たちは個人の外見や話し方、姿勢や持ち物など、実にさまざまなものから行為者のキャラをうかがい知ることができる。「歯形のついた鉛筆。一点の曇りもない眼鏡。抜け殻のように脱ぎ捨てられた寝間着。[中略] これらは持ち主の行動を語り、結果として持ち主の「人となり」つまりキャラを雄弁に語る（定延 2009）」。また、キャラはことばとも密接に結びついており、他言語社会より日本語社会においてその結びつきが強いという指摘もある（詳しくは第3.3節で述べる）。

以上に示した、安定性、意図性、生産性と現れ方に関する特徴において、定延のキャラと本研究のキャラは共通している。

第3.2節 キャラと類似概念

本節では、キャラの類似概念と考えられる2つの概念を紹介する。まず、伝統的教科

⁶ たとえば、瀬沼（2007: 83）「天然ボケ」の男子高校生A君が「演技している」と言ったとたん、周りの友人から「天然じゃねーのかよ。計算かよ！」といったツッコミが入った」という事例を報告している。

学における行為者としての「役割」概念について、次に、それに対抗する形で唱えられた社会的構築主義における行為者としての「成員カテゴリー」概念について述べる。その後、キャラとの違いを指摘する。

パーソンズやリントンに代表される伝統的社会学において、行為者は、中枢に「自己」を持ち、場面に応じて「役割」を使い分ける存在として扱われてきた (Burr 1995)。「役割」とは、若者、母、女、医師など、行為者が担う社会的類型であり、「～として」の「～」に代入されるものである。また、役割は「地位」ということばで言い換えることもでき、個人の能力や個性とは関係なく、地位に備わっている権利や義務を「役割期待」として伴う (Nadel 1957)。人間はこれらの多様な役割を理解し使い分ける担い手として社会的相互作用に登場する (Parsons 1951)。

伝統的社会学の「役割」による行為の説明は、たとえば「女はポライトに話すべき」といった、社会規範による行為者の行為への制約と見なされ、固定的であるという批判を受けた。伝統的社会学の「役割」概念に対抗する形で、Sacks(1972)は行為を可能にするものとして社会規範を捉え、「成員カテゴリー化装置」という概念を提唱した。成員とは、特定の文化社会の構成員を意味する用語ではなく、「常識的知識を適切に用いることにより、自然言語を使いこなして事態を記述できること (Garfinkul & Sacks 1970)」という能力を指す。そして、成員カテゴリー化装置とは、成員を「男性」「女性」「教師」「生徒」のようなカテゴリーに分類する、「性別」や「職業」などの仕組みである(Sacks 1972)。「男」「生徒」などの成員カテゴリーの使用は、「教室に「男性」が10名、「女性」が12名いる」のように人物に関する言及として現れる場合と、「「女性」は「男性」よりポライトだ」のような期待を伴って現れる場合があり(Schegloff 2007)、後者の成員カテゴリーに期待される活動は「カテゴリー付随活動」と呼ばれる(Sack 1972)。Sacks (1972)は、社会規範が行為や行為者を制約するのではなく、社会規範によって行為者による行為が可能になると主張する。たとえば、授業中に教師が学生に静かにするよう注意する行為は、「学生は授業中静かにしなければならない」「教師は授業中静かにするよう学生を注意してよい」という社会規範が存在するからこそ可能になる (前田他 2007)。

伝統的社会学における「役割」と、「成員カテゴリー」は、自己に関する前提や社会規範の考え方に違いは見られるものの、ある場面において「何者として見られるか」「何者としてふるまうか」の「何者」に代入されるアイデンティティ類型であるということは一貫している。

これらの概念とキャラの間には、少なくとも3つの点で違いが見られる。1つ目は、キャラの観念的な側面である。特定のキャラとして見なされる理由が、役割期待やカテゴリー付随活動に基づく場合もあるが、それらとは無関係のステレオタイプや行為者の外見、声質、雰囲気などに基づく場合もある。そのため、キャラと役割/成員カテゴリーが一致しないことにより、ある役割/成員カテゴリーとして見られなかったり、ある役割/成員カテゴリーとしてふるまっても偽者と見なされたりすることがある。たとえば、漫才コンビのボケとツッコミは、それぞれボケる働き、ツッコむ働きを期待される役割/成員カテゴリーであるが、「あのコンビのツッコミは実は天然ボケ（キャラ）だ」などと指摘される場合がある。(3.3)は、このことを示すインターネット上の掲示板に見られた例である。

(3.3)「素の性格とボケ・ツッコミの担当が正反対のコンビと言えど・・・」

補足 私がそれをよく思うのは、「麒麟です。」

漫才のネタ中でも、田村さんの天然アドリブを川島さんがツッコむシーン、よく見ます。

フリートークだと、もはやボケとツッコミが逆転してます。

特に今売れてる芸人コンビって、そんなタイプが多いような気がします。

[Yahoo! 知恵袋, https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1011195655, 2018

年 12月 25日]

(3.3)では「素の性格」ということばが使われているが、これはあくまで掲示板の投稿者による認識であり、スタイルなのか人格なのかはっきりしないもの、つまりキャラであると考えられる。この場合、ツッコミが「天然ボケ」キャラだとしても、その人物がツッコミとして壇上に立ち、観客の期待に応える限り、観客がその人物の役割や成員カテゴリーをボケに換えて漫才を見ることはない。反対に、周囲の助言によりボケ役とツッコミ役を交換し、成功した漫才コンビも存在する。(3.4)はその例である。

(3.4)『芸人志願～お笑いタレントを目指すキミへ～』紹介コメント

NCS時代のナイナイが「ボケとツッコミ逆や」と指摘され、現在のスタイルに変わったのはよく知られる話だが、その指摘をしたのも本多だった。岡村は推薦文で「『ボケとツッコミ逆や』と言われてなければ今の僕たちはなかった」と本多への感謝を伝えている。

[お笑いナタリー, <https://natalie.mu/owarai/news/134242>, 2018年12月25日]

(3.3)はキャラと役割／成員カテゴリーが一致しない例、(3.4)はキャラに合わないために役割／成員カテゴリーとして見られない例である。つまり、役割／成員カテゴリーが実際の言動や働きにもとづいた類型であるのに対し、キャラは実際の言動、働きを伴わない場合も含んだ、観念的かつステレオタイプのな類型であるということである。

2つ目は、キャラの生産性に関する側面である。役割も成員カテゴリーも、「外国人＋社員＝外国人社員」「女性＋従業員＝女性従業員」などの複合化が可能であるが、どこまでの複合に耐えうるか、先行研究からは判断できない。これに対し、キャラは生産性の高さという特徴を持ち、複合化したものも多く見られる。本稿が観察する「下品な善玉」キャラ（考察対象1におけるキャラ）、「日本企業に約2年勤めている日本語の発音の上手な外国人社員」キャラ（考察対象2におけるキャラ）や、「女性ボケ」キャラ（考察対象3におけるキャラ）といった複合的な行為者は、キャラ概念でなくては捉えきれないであろう。少なくとも、役割や成員カテゴリーの先行研究において、このように複雑に複合化された例は見当たらない。特に成員カテゴリーは、会話参加者たちを「男性と女性」に分ける「性別」、「子供と母と父」に分ける「家族」といった、分類の装置から生まれた概念であり、キャラを用いれば可能な「女性ボケ（女性＋ボケ）」キャラや「オネエ（男性＋女性的）」キャラといった無関係に複合化した人間類型の会話の分析には適していないと考えられる。

3つ目は、役割や成員カテゴリーが、他の役割や成員カテゴリーへの切り替えが場面や状況の切り替えとともに行われれば、受け手や第三者にある程度受け入れられるのに対し、キャラの切り替えは場面や状況の切り替えとともに行われても気まずさを伴う点である。たとえば、子どもが成長して大人になったり、平社員が昇進して主任になったり、夫が離婚して他人になったりするという、役割／成員カテゴリーの切り替えは、社会規範と結びついているため、スタイルの切り替えのように社会的に受け入れられている。一方、「真面目」キャラの男性教師が彼女の前では「幼児」キャラになるというようなキャラの切り替えは、場面の切り替えとともに行われたとしても、目撃された場合、行為者本人や目撃者にある種の気まずさを生じさせる可能性が高い。本稿が観察する「女性ボケ」キャラも、場面によって「女性ツッコミ」キャラや「キャリアウーマン」キャラなどに切り替わることは十分考えられるが、切り替わりが目撃された場合、その女性自身も目撃者も気まずさを感じるであろう。

役割／成員カテゴリーと本稿におけるキャラには、少なくとも以上3点の違いが存在する。

第3.3節 キャラとことばの結びつき

本節では、先行研究が指摘するキャラとことばの結びつきについて説明し、本稿の個別研究においてどの結びつきを扱うのかを述べる。定延（2011, 2016）によると、ことばとキャラのかかわり方には少なくとも4つの種類がある（表3.1参照）。

表3.1 ことばとキャラの結びつき方

キャラの分類	キャラの例	結びつき方	ことばの例
ラベル付けられたキャラクタ	「幼児」キャラ	キャラをことばが表す	「子ども」
表現キャラクタ	「悪者」キャラ	キャラの動作をことばが表す	「ニタリとほくそ笑む」
発話キャラクタ	「老人」キャラ	キャラがことばを発する	「わしじゃ」
思考キャラクタ	「上品な女性」キャラ	キャラの思考をことばが表す	「わたくし、 <u>「おかしいぞ」</u> と思いましたの」

※定延（2018: 15）をもとに作成（下線は筆者による）。

一種目は、たとえばある成人男性について「あの人は「坊っちゃん」だ」などと言う場合のかかわり方で、この時、「坊っちゃん」ということばはその成人男性が自己中心的あるいは幼児的なキャラであることを示している。この「坊っちゃん」のようなことばは「キャラクタのラベル」、それにより表されるものは「ラベル付けられたキャラクタ」と呼ばれる（定延 2011: 112）。

二種目は、たとえば「たたずむ」のは「大人」の直立状態、「ニタリとほくそ笑む」のは「悪者」の微笑というように、動作を表現することばが、動作だけでなく、その動作を行うキャラをも示すという場合のかかわり方である。「ニタリとほくそ笑む」のようなことばは「キャラクタ動作の表現」、それにより表されるキャラは「表現キャラクタ」と呼ばれる（定延 2011: 118）。キャラクタ動作の表現は、「このような人物はこのような動作をしそうだ」という、母語話者が共通して持つイメージを反映していると言える。したがって「対面場面で発話中の女性は、同じく対面場面で発話中の男性と比べてジェスチャーの頻度が高い」（荒川・鈴木 2006）、「発話時に男性は片手を動かしがちだが女性は両手を動かすことが多い」（金田 2016）といった、現実の動作観察に基づく指摘とはズレることもある。

三種目は、たとえば「そうじゃ、わしが知っておる」と言うのは「老博士」、「ほほほ」

と笑うのは「お嬢様」というように、ことばが内容だけでなく、その内容を話す話し手のキャラをも示すという場合のかかわり方である。「そうじゃ」のようなことば遣いは「役割語」(金水 2003)⁷、「老博士」のようなキャラは「発話キャラクタ」(定延 2006, 2011)と呼ばれる。二種目同様、「でおじやる」と話すのは「平安貴族」のように、現実とは異なる場合もある。

最後の四種目は、「それでわたくしも、これはあやしいぞって思いましたの」と貴婦人が言う場合の「これはあやしいぞ」のように、思考を表すことばが、思考だけでなく思考の行い手のキャラをも示すものである(定延 2016: 26)。下線部のようなことばは「内言」、それにより表現されるキャラは「思考キャラクタ」と呼ばれる(定延 2016: 26)。

本研究の個別研究では、以上の4種のうち、多様な広がりがあり、出現頻度も高いと思われる一種目、二種目、三種目とことばのかかわり方、すなわち「キャラクタのラベルとラベル付けられたキャラクタ(第7章)」、「キャラクタ動作の表現と表現キャラクタ(第5章)」、「役割語と発話キャラクタ(第5章, 第6章, 第7章)」を考察対象として取り上げる。「役割語と発話キャラクタ」の関係は、「キャラクタ動作の表現を話したり書いたりする」という行為や「キャラクタのラベルを付けたりそれに反応したりする」行為にも関連するため、3つの個別研究すべてでふれることになる。

第3.4節 本研究におけるキャラ

定延(2006, 2011, 2015, 2016, 2018, 近刊他)の定義を全面的に採用した場合、以下2点において不便が生じるため、本研究は定延の定義を部分的に採用し、瀬沼のキャラ概念をも加えた、独自の定義を用いることとする。

1 点目は、定延の専門語「キャラ」の定義が内面的な側面を主に射程としている点である。定延(2016, 2018, 近刊)は、伊藤(2005)によるキャラ、すなわちマンガの登場人物の同一性を表す描画的特徴と、自身の主張するキャラを明白に区別している。しかしながら、日本語社会で一般的に用いられている「キャラ」ということばは、必ずしも内面的側

⁷ 金水(2003: 205)は、「ある特定のことば遣い(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くとき特定の人物像(年齢, 性別, 職業, 階層, 時代, 容姿・風貌, 性格等)を思い浮かべることができるとき, あるいはある特定の人物像を提示されると, その人物がいかにも使用しそうなことば遣いを思い浮かべることができるとき, そのことば遣いを「役割語」と呼ぶ。」と定義した。金水(2015)は金水(2003)の定義についていくつかの問題点を指摘し、「(社会・地域)方言のステレオタイプ」すなわち、「(実在と否とを問わず)社会的グループと結びつけられた話し方のパターンを役割語という」との限定を加えている。だが本稿では記述の簡単さを優先して、金水(2003)の定義を用いることとする。

面のみを指すわけではない(詳細は第4章を参照されたい)。「メガネをかけているから「メガネ」キャラ」といった視覚的特徴によるものや、「声がおかまっぼい」から「オカマ」キャラ」といった声質によるものなど、内面的側面によらないものも、日本語社会ではキャラとして扱われている。本研究では、第5~7章の個別研究で扱うキャラに関しても、外見や声質といった特徴がキャラとして見なされる材料の一部となり、かつポライトネス評価に少なからず影響を与えていると考えるため、内面的側面が問題にならないものもキャラとして扱う。ただし、これらはキャラと見なされる理由の次元に違いがあると考えられるため、第4章で分類を試みる。

2点目は、キャラの意図性に関する点である。たとえば定延(2011:11)では、「「望みの人物評を得るために、自分の人物像をさりげなく演出しよう。だが、その意図を察知されてなるものか」という取り繕い」における意図的な演出の「人物像」もキャラと呼んでいる。一方定延(近刊)は、瀬沼(2018)による意図的なキャラの存在の主張を認めつつも、専門語としてのキャラを「非意図的に変わる人間の部分」と定義しなおし、両者を明確に区別している。確かに、知らず知らずのうちにそのようなキャラになっていた、という非意図的なキャラは存在する(第3.1節(3.2))。だが、本研究は意図性や演技性を程度問題と考え、これらを帯びるものもキャラに含める。その理由は、ポライトネス同様、キャラに関する実践や判断も、個人の意図(および受け手の推論)と社会規範が相互に影響し合って現れたハビトゥスの現れであると考えためである。演技によるものなのか、周囲の期待に自動的に従った結果なのかをはっきりと区別することは困難であり、またこれらに分けることが本研究の目的ではない。さらに、意図的な「キャラ作り」や演技は、連続的に行われるとは限らず、たとえば気分がすぐれず普段どおりにふるまえない場合や、自身のキャラに多少不満があるが周囲の期待を裏切りたくないと考え場合など、行為者は多かれ少なかれ演技をして「それまでの自分(それまでのキャラ)」とつじつまを合わせる。このような挿入的な演技の回数が増えるほど、第3.1節の(3.2)に示したようなズレが生じたり、不満が募り(3.1)で見たキャラ変更の欲求が強まったりすると考えられる。ただし、第5~7章の観察では、行為者の意図どおりのキャラとして他者に認識されているかどうかは問題にせず、あくまで他者が行為者をどのようなキャラとして扱っているかという点に注目する。

以上を踏まえ、本研究ではキャラを、以下の特徴を有する「スタイル以上、人格未満」の、状況に応じて変わる人間の類型と定義する。

- ・ 本当は意図的に変えることができるが、変わらない、変えられないことになっているもの。それが変わっていることが露見すると、見られた方も、見た方もそれが何事であるかすぐに分かり、気まずい思いをする（定延 2015）。
- ・ 行動、性格、嗜好、外見、声質、出自などの特徴をもとに、ステレオタイプの的に他者から類型化される。
- ・ 類型化のもととなる行動や性格、嗜好、外見、声質、出自などの特徴は、特定の人物にのみ所有されているわけではなく、同じ特徴を持つ人物がある程度存在する（ゆえに類型化が可能となる）。

上述のキャラの定義は、定延のキャラ概念に瀬沼のキャラ概念を融合したものと言えるであろう。このキャラ概念をポライトネス研究に取り入れることにより、日本語社会におけるポライトネス評価をより現実的に記述することができるようになる。そして、類型化されたキャラとポライトネス評価の結びつきを、日本語教育において学習者に提示することができるようになる。キャラは、スタイルのように意図的にコントロールすることが容易なものではないが、人格のような固定的なものでもない。そのため、さまざまなキャラとポライトネス評価の結びつきに関する情報を提供していくことにより、それぞれの日本語学習者が自分に合ったポライトな言動を習得、実践していくことが可能となる。このことは、日本語母語話者による日本語学習者の「日本人に近い外国人」キャラと「変な外国人」キャラへの分類による弊害（詳細は第6章参照）の軽減や、ポライトネスの実践および評価の多様化にもつながる。

次章以降ではキャラとポライトネス評価のかかわりについて述べていく。

第4章 キャラのメカニズムとポライトネス評価

本章では、ある人物がどのような流れで特定のキャラとして認識されるのか、キャラにはどのような種類があるのかといったキャラの生成と維持のメカニズムについて、そしてそのメカニズムとポライトネス評価の関係について述べる。第4.1節では、「キャラ化」「キャラ行動」「非キャラ行動」というキャラにかかわるふるまいからキャラのメカニズムを述べる。第4.2節では特定のキャラとして認識される際に手がかりとして用いられる特徴(材料)について述べる。第4.3節では、キャラのメカニズムとポライトネス評価に関する2つの可能性を指摘する。第4.4節では、第4.3節で指摘した可能性を検証するため第5章～第7章で行う個別研究について説明する。

第4.1節 キャラにかかわるふるまい

本節では、キャラにかかわるふるまいとして、「キャラ化」「キャラ行動」「非キャラ行動」という3つの概念について、順に述べる。

「キャラ化(瀬沼 2007; 斉藤 2011)」とは、手がかりとなる特徴(以下、「材料」)から、行為者自身を含む特定の人物を特定のキャラとして認識し、扱うことである。キャラ化には、材料をもとに他者からキャラが与えられるという「キャラの付与⁸」と、行為者自身が意図的に特定のキャラを演じる「キャラ作り⁹」があると指摘されている(千島・村上 2015)。しかしながら、行為者の意図性については解明が困難であり、またキャラには集団内で他律的に決定されるという性質がある(瀬沼 2007; 斉藤 2011)。さらに、他者の認識に関しても、意図性の解明同様、実際に認識したのかどうかを解明することは難しい。そこで本稿では、行為者が他者によってキャラを与えられる場合の、他者のふるまいのみをキャラ化と呼ぶこととする。さらにキャラ化には、直接「キャラのラベル(第3.2節)」に言及する場合と、直接言及しない場合とがある。「キャラクタ動作の表現(第3.2節)」を用いて行為者の言動を表現することでキャラ化を行う場合は後者となる。次に示す(4.1)はキャラ化される行為者を前にして直接「天然(ボケ)」キャラというキャラのラベルに言及する(2行目)ことでキャラ化を行った例、(4.2)は「いじられ」キャラというキャラのラベルには言及せず、キャラ化される行為者に対する扱いのみからキャラ化を行った例である。以下、

⁸ キャラにかかわるふるまいの分類は、定延(近刊)から着想を得た。定延(近刊)でも「キャラ付与」という概念が紹介されているが、本稿における定義とは異なる。

⁹ 「キャラ設定」とも呼ばれる(たとえば[MENDI, <https://mendi.jp/articles/view/70685>, 2018年10月19日])

キャラ化される行為者を「被表現者」、キャラ化する行為者を「表現者」と呼ぶ。

(4.1) 男女2人 A: 女性, B: 男性, 大学生くらいで私服を着ていた

01 A: (引かないと開かないドアを何度も押していた)

02 B: あれーひょっとして天然？

03 A: (笑って) そんなことないよーたまたまだよー

04 B: さっきも何もないところで、つまずいてたでしょ？

05 A: 本当, 天然じゃないんだって (笑い)

[瀬沼 2006: 66]

(4.2) いじられキャラに疲れました。

私はよく友達にいじられますが M ではありません。最初はいじられキャラというほどでもなかったのですが、私がぽっちゃりしているので (原文ママ), 別のクラスの友達が私のことを『ぶーちゃん (由来は豚から来ています)』と呼び, それを聞いていた私と同じクラスの友達2人がよく私をいじってくるようになりました。[中略] こういうときは最初は適当に笑っていたけど, もうヒドすぎて愛想笑いさえ出来なくなりました。[後略]

[Yahoo! JAPAN 知恵袋, 2010/09/16, https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1247095962, 2019年01月02日]

(4.1)のようなラベル付けによるキャラ化も, (4.2)のような扱いによるキャラ化も, 出会って間もない関係性で初めて行われる (瀬沼 2006: 66) 場合もあれば, すでに知り合いである関係性で以前も言及されたが再度行われるという場合もあると考えられる。扱いによるキャラ化が何度か行われた後に, ラベル付けによるキャラ化が行われるといった場合もあるだろう。そのため, 本研究では新出なのか既出なのか, ラベル付けによるのか扱いによるのかにかかわらず, 行為者が他者によってキャラを与えられる場合の, 観察可能な他者のふるまいをすべてキャラ化と呼ぶこととする。

「キャラ行動」とは, キャラ化された被表現者に期待される「キャラに沿ったふるまい (千鳥・村上 2016)」である。キャラ行動には, 「このような行動をとる」という期待だけでなく, 「このような行動は取らない」という期待も含まれる。第3.2節で示したキャラのことは遣いである「役割語 (金水 2003)」による発話はこれに当たる。また, キャラ行動

には被表現者が非意図的に行う場合と、意図的に行う「キャラ作り」とが考えられるが、本研究では意図的・非意図的の区別をせず、どちらもキャラ行動と呼ぶ。事例は次に述べる「非キャラ行動」と合わせて示す。

「非キャラ行動」とは、キャラ化された被表現者がとったキャラ行動以外の、キャラ化した表現者や第三者がキャラと行動の不一致として認識する行動である。非キャラ行動は、意図的に行われる場合と非意図的に行われる場合があり、またキャラにふさわしくない材料の提示も含まれる。第三者が、キャラ化された被表現者について、キャラにふさわしくない情報を暴露することにより、キャラからの逸脱と認識される場合も考えられるが、本稿では取り上げない。キャラ行動に関して、被表現者の想定と表現者や他者の期待に齟齬がある場合、被表現者の言動は非キャラ行動と認識されやすいと考えられる。次の(4.3)は、非キャラ行動をとることで、友人からキャラからの逸脱、キャラの崩壊を指摘された被表現者の例である。

(4.3) キャラ崩壊と言われることが辛い。

私は、顔は可愛くないと思いますがなぜか、女子力高くて清楚でおしとやかで賢くてとにかく女の子らしいというイメージを持たれてしまいます。

実際は女子力なんてないし、清楚ですなんて言えないし（チャラチャラしてて不純とかではない）、外ではきちんと振る舞っているだけで、家とか気を許した人の前では女子とは言い難い感じです。

なので、周りの友達と同じようにしては「え、意外。。。キャラ崩壊。。。」と意外がられ、その度に恥ずかしさとか悲しさとか悔しさ？とか…とりあえず泣きそうになります。周りの友達は何れも少し下品な発言でおもしろい事が言えても、私は少し言っただけでキャラ崩壊。〔後略〕

[Yahoo! JAPAN 知恵袋, 2014/09/12, https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q12135469017, 2018年10月18日]

(4.3)は、特にキャラのラベルは示されていないが、「女子力高くて清楚でおしとやかで賢くてとにかく女の子らしい」という（仮に）「清楚女子」キャラとしてキャラ化されている被表現者の例である。この例では、おしとやかなふるまいがキャラ行動として期待されているが、それに反して「少し下品な発言でおもしろい事」を言うという非キャラ行動をとっ

たことで、キャラ化した表現者（友人）からキャラ逸脱・崩壊と認識されている。この被表現者が、友人が期待するキャラ行動を取り続ければ、キャラ逸脱・崩壊を免れ、キャラは維持されると考えられる。

以上3つのキャラにかかわるふるまいの流れは、図4.1のように示すことができる。図4.1の左側が被表現者、右側が表現者によるふるまいである。被表現者が何かしらの材料を意図的・非意図的に提示し、それを受けて表現者が被表現者に対して何らかのキャラ化を行う。被表現者が期待されるキャラ行動をとれば、表現者はキャラが維持されていると認識し、反対に被表現者が期待とは異なる非キャラ行動をとれば、表現者はキャラ逸脱と認識し、キャラ行動をとるよう被表現者に強要することもある。本研究では、個人と社会を相互に影響を与え合うものとするため、行為者たちのふるまいを点線で囲っている。黒い矢印は行為者たちのふるまいの時間経過を、白い矢印はふるまいが相手に影響を与える様子を示す。

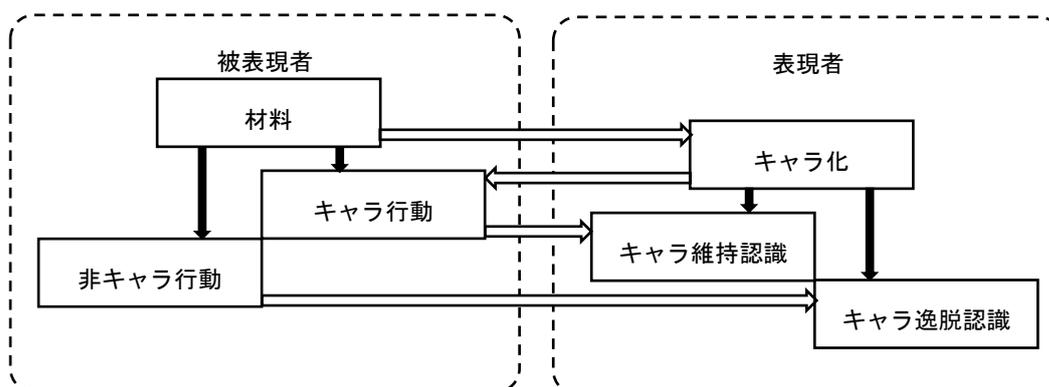


図4.1 キャラ化とキャラ行動・非キャラ行動の流れ

キャラにかかわるふるまいの流れは、キャラ化される被表現者が意図的・非意図的に提示する材料により始まっている。次節では、どのようなものがキャラ化の材料になるのかを、キャラのラベルから見ていく。

第4.2節 キャラ化の材料

本研究の言うキャラ化の材料とは、人格のようなものとしての存在感を感じさせる行動や性格、嗜好、外見、声質、出自などの特徴であり、斉藤（2011: 234）が指摘する「同一性を伝達するもの」に近い。そのため、材料が共通している場合、複数の行為者が同一の

キャラとしてキャラ化される。本節ではこの定義に従い、先行研究により指摘されているキャラのラベルを用い、材料の分類を試みる。

キャラ化の材料には、行動的性質の材料、身体的性質の材料、資本的性質の材料の、少なくとも3つの種類が存在する(表4.1参照)。以下、瀬沼(2007: 5, 77-78)で得られたキャラのラベルの例とラベル付けの意味および理由(材料)をもとに1つずつ見ていく。

表 4.1 キャラ化の材料の分類

材料の分類		キャラ化の意味・理由	キャラのラベル
性質分類	下位分類		
行動的性質	行動	グループ内でからかわれる	「いじられ」キャラ
	性格	頼りになる, 男っぽい	「あねご」キャラ
	嗜好	ギャンブルのスロットが大好き	「スロット」キャラ
身体的性質	外見	ヒゲが濃い	「ヒゲ」キャラ
	声質	声がおかまっぽい	「オカマ」キャラ
資本的性質	出自	実家が田舎	「田舎」キャラ
	所有物	お金がいつもない	「貧乏」キャラ

※瀬沼(2007: 77-78, 2008: 30)をもとに作成。

行動的性質の材料とは、「いじられる」から「いじられ」キャラ、「勉強が苦手, 発言がバカっぽい, 常識を知らない」から「バカ」キャラというように、被表現者の言動によってキャラ化される際の材料である。第3.3節に示した「役割語(金水 2003)」による発話や「キャラクタ動作(定延 2011 他)」による動きはここに分類される。また、行動的性質の材料は、「頼りになる, 男っぽい」から「あねご」キャラ、「責任感がない」から「無責任」キャラといった性格にかかわるものや、「ギャンブルのスロットが大好き」だから「スロット」キャラといった嗜好にかかわるものも、行動と密接に関係することから下位分類として含む。これらは Bourdieu の慣習行動・実践(第3.1節)に近いものである。

身体的性質の材料とは、「ヒゲが濃い」から「ヒゲ」キャラ、「顔がかわいい」から「かわいい」キャラといった外見にかかわる材料、「声がおかまっぽい」から「オカマ」キャラといった声質にかかわる材料などのことである。また、「メガネをかけている」から「メガネ」キャラといった、装着品や衣服, 髪型などのファッションにかかわるものも、身体の一部としてキャラ化の材料とされるため、身体的性質の材料に含むこととする。ただし、キャラ化後にキャラにふさわしくない装着品をつけたり(あるいは装着をやめたり), 髪型を変えたりすることは、あくまで(非)キャラ行動として扱う。装着品や衣服, 髪型などのファッションにかかわる部分は、Bourdieu の慣習行動・実践(第2.1節)に含まれるが、

顔つきや声質などは含まれていない。

資本的性質の材料とは、「実家が田舎」だから「田舎」キャラ、「お金がいつもない」から「貧乏」キャラというように、被表現者の出自や有形・無形の所有物に関する材料である。瀬沼（2007）には見られなかったが、「子供」だから「普通体で話す」というキャラ行動が期待される「子供」キャラにおける年齢、「女性」だから「丁寧なことば遣いで話す」というキャラ行動が期待される「女性」キャラの性別、「外国籍」だから「片言の日本語を話す」というキャラ行動が期待される「外国人」キャラの国籍（出自の一種）などの属性もこの分類に入る。

キャラ化は1つの材料により行われる場合もあるが、複数の材料から行われる場合もあり、表4.1に示したキャラ化の分類は必ずしも独立していない。第4.1節(4.2)の「いじられ」キャラに出た「ぶーちゃん」も、「ぼっちゃんりしている」から「ぶーちゃん」というあだ名を付けられることで「ぶーちゃん」キャラというキャラ化がまず起こり、その後もさまざまなキャラ化が行われ、結果的に複合体として「いじられ」キャラになっていたという可能性が考えられる。このような段階的キャラ化による複合体としての「いじられ」キャラ化のもう1つの例を(4.4)に示す。

(4.4) いじられキャラについて。

私は、いつの間にかいじられキャラになっていました。

クラブ内での事なのですが、3年生が私を入れて4人います。今まで、仲が悪くなったことはほとんどなくて、良い雰囲気でした。

でも、最近私がいじられキャラみたいな扱いを受けるようになりました。

ちょっとぐらい嫌な事をされても、毎回怒っていたらめんどくさい奴って思われそうだったので、笑って受け流していました。

でも、今日いきなり一人の子が、私のことを「ダニ」と呼び始めました。

最初は「ダニじゃないしー」と笑って対応していたけど、ほかの2人まで私のことをダニと呼びに来ました。

嫌だったので「私ダニじゃないから！ほんとに嫌だからその呼び方止めて！」と言いました。

でも、全然聞いてくれなくて、ダニと呼ぶのをやめてくれませんでした。

大きい声で呼びに来たし、とても恥ずかしくて悲しかったです。。

どうしたらいいと思いますか？

[Yahoo! JAPAN 知恵袋, 2017/05/27,

https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13174768913, 2018年10月28日]

(4.4)では、キャラ化の材料は明らかになっていないが、「ダニ」というあだ名が付けられることで、「ダニ」キャラというキャラ化が起こり、キャラ化への拒否が受け入れられず、結果的に「いじられ」キャラとして定着したという流れが見える。ここで例に挙げた「ぶーちゃん」や「ダニ」は、一般的に「あだ名」と呼ばれる呼称であり、あだ名がそのままキャラのラベルとなる場合があることを示している。ただし、「ぶーちゃん」や「ダニ」が呼称としてもキャラのラベルとしても成立するのに対し、「いじられ」のように呼称としては用いられにくいキャラのラベルや、反対に氏名の一部を変えるなどして作られる「(山田→)やまちゃん」や「(さちこ)→さっち」などの、キャラとは考えにくいあだ名も存在する。そのため、あだ名とキャラのラベルは重なる部分も大きいと同義ではないと言える。

また、材料の量とキャラ化への影響力により、キャラの維持や逸脱につながるキャラ行動および非キャラ行動の範囲は異なる。たとえば、「メガネをかけている」という身体的性質の材料のみから「メガネ」キャラとキャラ化された被表現者に関して言えば、「メガネをかけずに登校（出勤）する」という非キャラ行動をとるだけでキャラ逸脱につながる。一方、「実家が田舎、なまっている」から「田舎」キャラとキャラ化された被表現者が、「なまりなく話す」という非キャラ行動をとっても、「実家が田舎」という理由でキャラが維持される場合も考えられる。

以上、キャラのラベルと材料の分類を試みた。次節では、キャラのメカニズムとポライトネス評価に関する2つの可能性について述べる。

第4.3節 キャラ化・非キャラ行動によるインポライト評価の可能性

本研究が射程とするキャラとポライトネス評価のかかわりは、以下2つの可能性に関してである。

可能性1：被表現者が表現者にキャラ化され、被表現者や第三者がそのキャラを受容しない場合、表現者によるキャラ化はインポライトとして評価される。

可能性2：キャラ化された被表現者の非キャラ行動はインポライトとして評価される。

まず可能性1について。キャラ化されることは、周囲からの被理解感が高まり、また集団における居場所が確立できるという利点がある一方、キャラ行動を期待されたり強要されたりするという行動の制限が生じるという問題点もある（千鳥・村上 2016）。B&Lのポライトネス理論で考えると、被キャラ化により被理解度の高まりが感じられる場合、キャラ化はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーと解釈することができる。反対に、被キャラ化の結果、行動の制限という不利益のみが生じた場合、キャラ化はネガティブ・フェイス侵害のFTAということになる。

可能性2について。先行研究において、キャラ行動をとり、周囲の期待に応えることが、集団における関係性を安定化させる気遣いとして認識されることが報告されている（千鳥・村上 2015）。その反対に、非キャラ行動をとることが、周囲の期待に応えず、集団における関係性を不安定にさせる¹⁰、気遣いの足りない行動、つまりインポライトな行動として認識されると考えられる。B&Lのポライトネス理論で考えると、共通基盤を揺るがすポジティブ・フェイス侵害のFTAに当たる。前述のキャラ化とキャラ行動・非キャラ行動の流れの図で示すと、縦縞の矢印がインポライトとなる場合が可能性1、斜線の矢印がインポライトとなる場合が可能性2である（図4.2参照）。

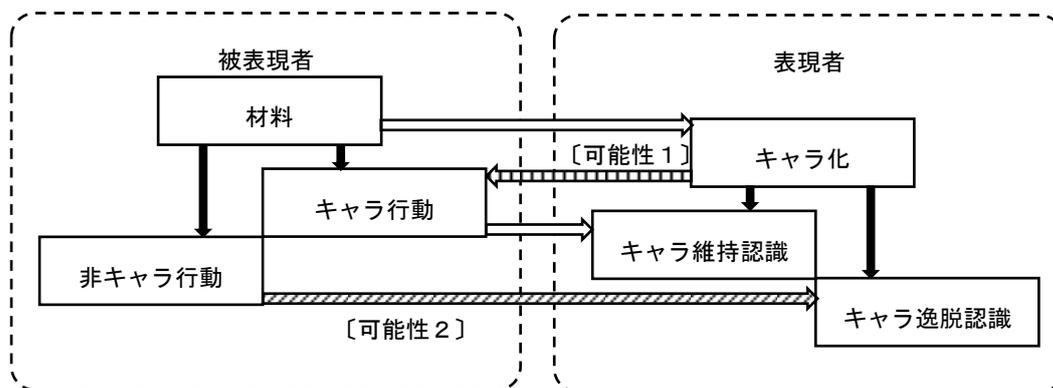


図4.2 キャラにかかわるふるまいとポライトネスに関する可能性

B&Lのポライトネス理論を含む先行研究の知見だけでは、この2つの可能性に関するポライトネス評価のメカニズムを説明することができない、というのが本研究の主張である。

¹⁰ 拒否されたキャラ化や非キャラ行動によるキャラ逸脱ならば必ずインポライトと評価されると主張したいわけではない。瀬沼（2006）が指摘するように、キャラ化や非キャラ行動が笑いつながる場合もあることは認めつつ、インポライトとなる場合を観察したいと考える。

第5章～第7章で行う3つの個別研究を通して、可能性1および2がインポライトと評価される場合があること、その理由が状況や話者間の人間関係（たとえばB&L 1978/1987; 井出 2006）、性別（たとえばLakoff 1973, 1975; Ide 2003）では説明しきれないこと、キャラという概念を用いれば説明できることを示す。

第4.4節 3つの個別研究と関係性

本節では、まず第5章～第7章で行う3つの個別研究をそれぞれ説明し、その後3つの関係性について述べる。

第5章の個別研究1では、日本語学習者による作文に現れた、笑いの表現「ニヤニヤ」によるキャラ化が、第三者である日本語母語話者にインポライトと評価される現象を見る。日本語母語話者の「ニヤニヤ」によるキャラ化に関する先行研究の知見を参考に、学習者の使用例と日本語母語話者による意識調査結果から考察する。ポライトネス評価は、第三者である調査協力者（日本語母語話者）の意識調査の結果をもとに判断する。

第6章の個別研究2では、日本語学習者による発話に現れた、動詞否定丁寧形「～ないです」発話という非キャラ行動が、第三者である日本語母語話者にインポライトと評価される現象を見る。日本語母語話者の「～ないです」発話に関する先行研究の知見を参考に、収録した発話音声を用いた意識調査結果から考察する。ポライトネス評価は、第5章同様、第三者である調査協力者（日本語母語話者）の意識調査の結果をもとに判断する。

第7章の個別研究3では、日本語母語話者による合コンの談話を用い、キャラ化と非キャラ行動が同時に起きる場合、会話参加者にインポライトと評価されるのはどちらであるかを分析する。キャラ化は、キャラのラベルに直接言及するものを扱う。非キャラ行動は、キャラのラベル付けによりキャラ化された被表現者の反応の側面から考察する。第7章におけるポライトネス評価は、会話参加者による観察可能な言動をもとに判断し、参加者自身へのインタビューや第三者対象の意識調査は行わない。インタビューを行わないのは、特定のキャラ化場面や非キャラ行動場面について質問することで、質問されなければ注意を払わなかったふるまいを焦点化させてしまう可能性があるからである。また、第三者対象の意識調査を行わないのは、収録した談話データにおけるキャラ化および非キャラ行動が、談話の断片を提示し評価させるには、多分に状況依存的であるためである。このような不都合があるにもかかわらず、この談話データを用いるのは、キャラ化と非キャラ行動を同時に観察することで、キャラとポライトネスにかかわる日本語母語話者のふるまいの

諸相が、十分に観察できるからである。

以上のとおり、第5章の個別研究1および第6章の個別研究2では日本語学習者の、第7章の個別研究3では日本語母語話者のキャラ化と非キャラ行動によるポライトネス評価への影響という異なる考察対象を観察する。また、個別研究1および個別研究2では意識調査、個別研究3では談話データの分析と、異なる手法をとることになる。考察対象と手法の別には3つの理由がある。1つ目は、日本語学習者の日本語能力がポライトネス評価に与える影響である。もし、日本語学習者による談話データを用いるとすると、キャラに関する点以外にも、日本語能力の低さによる誤用や発話内容に対する認識の齟齬が生じる可能性がある。第5章および第6章の意識調査では、そのような要素を可能な限り排除、整理している。2つ目は、母語話者と学習者の間の、キャラ化とキャラ行動の違いである。日本語母語話者と日本語学習者では、キャラ化されるキャラが異なり、よって期待されるキャラ行動も異なると考えられる。3つ目は、データ収集の困難性である。日本語母語話者によるキャラ化は、初対面場面の談話において観察できると予想される一方、学習者によるキャラ化はいつどこで観察されるか予測することができない。以上の理由から、考察対象と手法にばらつきが生じている。とはいえ、キャラ化と非キャラ行動によるポライトネス評価への影響を実証することには、ある程度成功したと考えている。さらに、第8章の考察で詳しく述べるが、第5章の個別研究1および第6章の個別研究2で浮かび上がる疑問や問題が、第7章の個別研究3の結果から解決、改善している。3つの個別研究について、表4.2にまとめる。

表 4.2 3つの個別研究におけるふるまい・行為者・評価者の関係

	ふるまい	考察対象	行為者	評価者
個別研究1	キャラ化	「ニヤニヤ」使用	表現者：学習者	母語話者（第三者）
個別研究2	非キャラ行動	「～ないです」発話	被表現者：学習者	母語話者（第三者）
個別研究3	キャラ化	ラベル付け	表現者：母語話者	母語話者 (会話参加者)
	非キャラ行動	ラベル付けへの反応 (冗談発話の欠如)	被表現者：母語話者	

第5章 キャラ化のポライトネス評価（個別研究1）

本章では、第4.3節で述べた可能性1，すなわちキャラ化はインポライトにつながるのかという点について、日本語学習者の作文に見られた、他者（キャラ化される被表現者）の笑いを表現する際の「ニヤニヤ」使用によるキャラ化をもとに検証する。「ニヤニヤ」を扱うのは、従来この表現が笑いの主体の意図により説明され、その使用にかかわるポライトネス評価が、話者間の人間関係による推論や、女性の笑いには使用しないという暗黙の社会規範などに求められてきたためである。第5.1節では、研究の背景と目的を、第5.2節では「ニヤニヤ」に関する先行研究を整理しその問題点を述べる。第5.3節では、被表現者の笑いを表現する際の「ニヤニヤ」使用が、話者間の人間関係による推論や、女性には使用しないという暗黙の社会規範では説明しきれないことを示す。第5.4節では、「ニヤニヤ」によるキャラ化のポライトネス評価について、日本語学習者の作文の使用例を用いた日本語母語話者対象の意識調査を行い、分析、考察する。第5.5節では、本章の観察について総合的に考察し、第5.6節ではまとめを述べる。

第5.1節 研究の背景と目的

人はさまざまな方法で笑い、その笑い方は笑いの主体である行為者の意図や感情を表すと考えられている。たとえば、「ニコニコ」は「うれしそうに笑みを浮かべ続ける」様子、「ニヤニヤ」は「声をたてないで、表情だけで笑い続けるさま。冷やかに、意味ありげにうす笑いを浮かべる」様子を表すとされる（小野 2007）¹¹。この2つは、どのような笑いの主体でも、意図的に使い分けたり、感情に合わせて表現したりすることが可能な笑い方と考えられ、非日本語母語話者への日本語教育においても、そのような説明や指導がなされている。これは、「人はみな同じ」であり、意図や状況によって表情が変わってくるという説明と言える。

しかしながら、このような説明に反し、インターネット上には「ニコニコ」と「ニヤニヤ」は感情に合わせてだれにでも意図的に使い分けられるものではないということを示す指摘が散見される。すなわち、ある人物の笑い方が第三者によって表現される際、その人物がどんなにうれしそうに笑みを浮かべていても、「ニヤニヤ」としか表現されないという

¹¹ 「ニコニコ」「ニヤニヤ」は「にこにこ」「にやにや」とひらがな表記されることもあるが、本稿では原則カタカナ表記とし、引用の際は原文どおりの表記に従うこととする。

指摘である。次の(5.1)と(5.2)は、「ニコニコ」したいができない、「ニコニコ」しているつもりが「ニヤニヤ」と表現されてしまう、という笑いの主体による報告である（以下、下線は筆者による）。

(5.1) 僕，笑顔がニコニコではなくニヤニヤらしく，気持ち悪いらしいです。どうやったらニコニコ笑顔が作れますか？

[Yahoo! JAPAN 知恵袋, 2015/06/13,

https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13146667368, 2018年10月4日]

(5.2) どうやったらニコニコ笑顔が作れますか？ [・・・] 自分ではニコニコしているつもりでも「ニヤニヤ」と受け取られる時があります。シチュエーションとしては、
1. ピアノの発表会に祖父が来てくれてステージからニコッとしたつもりが。後日祖父と話した時に「ニヤッ¹²としてたね」と言われました。 [・・・] 2. 会社の上司も目が細くそして目力が強い方です。会話が終わった後， [・・・] 無言で見つめられると焦ってしまい緊張をほどきたくニコニコしてみたところ。「何ニヤニヤしているんだ」と突っ込まれることが何度か発生しました [・・・] 言われるたびに，地味に小さくショックを受けています。 [・・・]

[YOMIURI ONLINE 発言小町, 2017/03/21,

<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2017/0321/798036.htm>, 2018年8月7日]

(5.1)は一般向け掲示板に，(5.2)は女性向け掲示板に投稿された相談文であり，(5.1)の投稿者は男性，(5.2)は女性と推察される。(5.1)および(5.2)の投稿者は，笑いが自身の意図や感情に関係なく「ニヤニヤ」と表現されることを否定的に捉えている。これらの書き込みから，「ニコニコ」や「ニヤニヤ」は感情に合わせてだれにでも意図的に使い分けられるものではないこと，他者による「ニヤニヤ」という表現が被表現者である笑いの主体を傷つけ，場合によってはインポライتنا表現と判断される可能性があることがうかがえる。同様の相談は他のインターネット書き込みサイトでも度々観察されるものであり，けっして珍し

¹² 「ニヤニヤ」と「ニヤッ」は厳密には異なるが，(5.2)の投稿者は特に2つを区別しておらず，また笑いの主体のキャラの傾向としては共通しているという指摘がある（羅 2011）ため，ここでは区別せず記載する。

いものではない¹³。

他者の笑いの真の意図や感情などわからないにもかかわらず、私たちはなぜインポライトになりうる「ニヤニヤ」という表現を、他者の笑いを表すのに用いるのであろうか。また、「ニヤニヤ」は日本語教育において中級レベルで導入される、日本語学習者が触れる機会の少なくない語彙であるが、日本語学習者が「ニヤニヤ」使用の危険性について指導されていない場合、「ニヤニヤ」使用が被表現者である笑いの主体や第三者にインポライトと評価される危険性は、日本語母語話者以上に大きくなるのではないか。このような疑問を背景に、本章は以下3点を明らかにすることを旨とする。

- 第1点、 一般的に、どのような場合なら「ニヤニヤ」の使用が許容され、インポライトとならないと考えられているのか。
- 第2点、 「ニヤニヤ」は日本語母語話者の間でどのようなキャラの笑いとして認識されているのか。
- 第3点、 日本語学習者による「ニヤニヤ」の使用はどのように評価されるのか。

以上3点を明らかにするため、本章では、日本語教育教材を含めた日本語母語話者による「ニヤニヤ」の使用例を観察し、事例分析および意識調査を行う。さらに、日本語学習者の「ニヤニヤ」の使用例と、それに対する日本語母語話者の評価についても調査する。

あらかじめ結論を述べると、日本語母語話者は「ニヤニヤ」にふさわしい話者間の関係に関する認識だけでなく、ふさわしい主体であるキャラについての認識もある程度共通して持ち、「ニヤニヤ」という表現を使用している。また、日本語教材における「ニヤニヤ」の例文は男性性と結び付けられることが多いが、「ニヤニヤ」にふさわしいと考えられているキャラは複数存在し、性別だけでは説明できない。さらに、日本語学習者はふさわしくないキャラの笑いに「ニヤニヤ」を使用し、それが誤用として修正されたり、否定的な意図を伴う使用と判断されたりするという事態が起こっている。

¹³ インターネット上の掲示板には、他にも「ニコニコとニヤニヤの違いを教えてください。自分ではニコニコしているつもりですが、ニヤニヤすると言われてしまいました。[Yahoo! Japan 知恵袋, https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1076781075, 2018年10月4日]」や「にやにやと にこにこの違いってなんですか？高1女子です(*^^*)仲のいい男の先生からよく〇〇ニヤニヤすんな！とか、いっつもニヤニヤしてると、笑いながら冗談混じりな感じで言われます。ニヤニヤしてるつもりはなくて、常に笑ってるからだと思うんですけど、なんでニヤニヤしてるって言われるんでしょうか？[...][Yahoo! Japan 知恵袋, https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q14184192539, 2018年10月4日]」といった書き込みが多数見られる。

第 5.2 節 先行研究とその問題点

本節では、「ニヤニヤ」の被表現者に関する研究（第 5.2.1 節）、日本語学習者によるキャラ化の表現とキャラ化された被表現者のキャラの齟齬に関する研究（第 5.2.2 節）の順に、本研究に関連する先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。

第 5.2.1 節 「ニヤニヤ」の被表現者

オノマトペの研究や日本語教育において、「ニヤニヤ」の使用は笑いの主体の意図や感情によって説明できるものとされてきたため、「ニヤニヤ」表現による被表現者については特に言及されてこなかった。これに対し、キャラ研究の分野には、「ニヤニヤ」にふさわしいとされるキャラが存在し、その認識が母語話者間である程度共有されているという報告が少数ではあるが存在している（羅 2011; 定延 2013; 宿利 2017a, 宿利 2017b; 宿利・羅 2017）。

羅（2011）は、日本の小説やマンガに現れる笑いのオノマトペを分析し、「ニヤニヤ」「ニヤリ」などの「ニヤニヤ」類が「下品な善玉」キャラまたは「悪玉」キャラの笑い方として使われていることを指摘している。定延（2013）でも、「徳の高い正義の人」キャラは「ニヤニヤ」の主体にふさわしくないことが指摘されており、この指摘は羅（2011）の主張を支持するものである。また、ロシアの作家ドストエフスキーの小説『罪と罰』における笑いの表現について考察した宿利（2017a）、宿利・羅（2017）では、ロシア語原文の“улыбнуться (ulybnutsya, 微笑する)”, “с улыбкой (s улыbkoy, 笑みを浮かべて)”という表現が、さまざまなキャラの登場人物の笑い方の表現として用いられているのに対し、日本語訳では「聖母のような若い女性」キャラなら「微笑む」, 「殺人犯の男性」キャラや「精神を病んだ中年女性」キャラなら「ニヤニヤする」や「ニヤリと笑う」というように、登場人物のキャラによって訳語が使い分けられていることを指摘している。

これらの知見は、日本語社会に「ニヤニヤ」という表現にふさわしいキャラが存在し、「ニヤニヤ」とキャラの結びつきがある程度母語話者間で共有されている可能性を示唆する。だが、これらの先行研究で扱われた小説やマンガは量的に十分でなく、特定の作家や翻訳者のみに見られる傾向である可能性もある。そこで第 5.3.2 節では、「ニヤニヤ」笑いの被表現者のキャラに関する事例分析と日本語母語話者対象の意識調査を行う。

第 5.2.2 節 日本語学習者によるキャラ化

日本語学習者が用いた表現がキャラにふさわしくないと判断されるとどうなるのであろうか。宿利 (2018a; 2018b) は、日本語学習者の作文コーパス 4 種¹⁴に見られる語彙の誤用について調査し、誤用である理由が意味的には説明できず、キャラと語彙との齟齬により誤用とされているものがあることを報告している。たとえば、宿利 (2018b) は「タバコを吸って、酒によっているビジネスマンのイメージ」という学習者の作文の一部における「ビジネスマン」が誤用とされ、「サラリーマン」に修正されている例を報告している。大辞泉によると、「ビジネスマン」は「事業を営む人。実業家。会社員。特に事務系の仕事をする人」を、「サラリーマン」は「給料で生活する人。月給取り。勤め人」を意味する。辞書の記述からは、なぜ上の例の「ビジネスマン」が誤用で「サラリーマン」に修正されたのかを説明することはできない。これは、添削者である日本語教師にとって、「タバコを吸って、酒によっている」という動作の表現から連想されるのが、「ビジネスマン」ではなく「サラリーマン」であったことを意味すると考えられる。つまり、日本語学習者の使用した表現（「タバコを吸って、酒によっている」）と被表現者のキャラ（「ビジネスマン」）が合っていない場合、誤用として修正されることがあるということである。先行研究では「ニヤニヤ」に関する例は報告されていないため、第 5.4 節では筆者が担当する学習者の「ニヤニヤ」使用が誤用とされる事例について紹介する。

第 5.3 節 「ニヤニヤ」のキャラと日本語母語話者による「ニヤニヤ」使用

本節では、「ニヤニヤ」にふさわしい被表現者のキャラについて述べる。まず、他者の笑いを表現する際の「ニヤニヤ」使用がインポライトとならず許容されると一般的に考えられている事例について、オノマトペに関する文献、日本語教材に見られた日本語母語話者の使用例から述べる（第 5.3.1 節）。さらに、「ニヤニヤ」にふさわしい笑いの主体のキャラについて、日本語母語話者対象の意識調査結果から述べる（第 5.3.2 節）。

第 5.3.1 節 「ニヤニヤ」によるキャラ化の事例分析

本小節では、「ニヤニヤ」によるキャラ化がインポライトとならず、許容されると一般的に考えられている状況を、オノマトペに関する文献や日本語教材を用いた事例分析の結果

¹⁴ 宿利 (2018a) では「学習者作文コーパス「なたね」」を、宿利 (2018b) ではこれに加え「日本語学習者による、日本語・母語対照データベース (作文対訳 DB)」「オンライン日本語誤用辞典」「日本語学習者作文コーパス」、合計 4 つのコーパスが使用された (それぞれの URL は巻末の「資料」欄に示す)。

から述べる。使用する文献と資料として、「ニヤニヤ」という表現が観察されるものを選んだ(表 5.1 参照)。インポライトとならず許容されている使用例として、キャラ化する表現者がキャラ化される被表現者の笑いを直接「ニヤニヤ」と表現し、かつ被表現者がその表現を否定したり、表現者に対して不満を表明したりしていないものを選定した。これらの事例について、実は被表現者が「ニヤニヤ」と表現されたことに不満を抱き、インポライトだと認識している可能性は否定できないが、少なくともオノマトペに関する文献や日本語教材にそのような注意書きはない。そのため、これらを一般的に許容されている事例とするのは妥当であると考えられる。

表 5.1 事例分析に使用した文献および教材

オノマトペの文献	『日本語オノマトペ辞典』, 『「擬音語・擬態語」使い分け帳』
日本語教材	『語彙力ぐんぐん1日10分』, 『新完全マスター語彙日本語能力試験N2』, 『日本語を楽しもう!』, 『NIHONGOe な』

分析の結果、「ニヤニヤ」使用が許容されると一般的に考えられている事例は、話者間の社会的距離に関するものと力関係に関するものの、大きく2つに分けることができること、また、被表現者がふさわしくない場面で笑顔を見せる際に、表現者が「ニヤニヤ」によりキャラ化することがわかった。さらに、これらの事例における主体は、主体が判別できるものすべてにおいて、男性であることも明らかになった。

話者間の社会的距離と力関係は、それぞれ第 2.1 節で見た B&L のポライトネス理論における社会的距離 D と相対的力 P に相当すると考えられる。まず、前者の社会的距離に関するものについて、日本語教材に出てくる例を次の(5.3)に示す。

(5.3)A: なんだおまえ、そんなににやにやして、気持ちが悪い。

B: だって、僕がガールフレンドがいないって言ったら、店長がね、妹さんを紹介してくれるって!

【解説】ひとり満足しているときの表情。

[河野他 2003: 2]

(5.3)には特に話者 A と話者 B がどのような人物か、どのような関係にあるかという説明はないが、普通体(常体)で話していること、また「おまえ」「僕」「ガールフレンドがいない」などの表現の使用から、社会的距離の近い、親しい男性同士の会話であると推察され

る。自身の笑いを「ニヤニヤ」と表現され、「気持ちが悪い」とまで言われているにもかかわらず、被表現者である話者 B は特に不満を示すことなく受け入れ、ふさわしくない場面で笑顔を浮かべた理由を「だって～」以下で説明している。話者 A の「ニヤニヤ」によるキャラ化や攻撃とも取れる発話が、真剣な攻撃ではなくからかいの冗談発話として話者 B に受け入れられていることがわかる。

次に、力関係に関するものとして、オノマトペの文献の例を(5.4)に示す。

(5.4) [・・・] いつも笑顔の彼は、会社でも人気がある。「にこにこしていて感じが良い」と言われる。[・・・] ある時、仕事のミスをして上司に呼ばれた。上司のお小言を食らい、部屋を出る時、いつものように自分を鼓舞するために笑顔になった。すると、上司にとがめられた。「にやにやして、反省してないのか？」上司に見えないところで笑顔になればよかったと後悔したが、遅かった。

[山口・佐藤 2006: 63]

(5.4)は、部下である男性が上司に注意され、浮かべた笑顔についても非難されている例である。笑いの主体である男性は「ニヤニヤ」と表現されたことを否定しておらず、上司の発話をインポライトなものを見なしてはいない。反対に、注意された後という不適切な場面で笑顔を見せた自身の行動について反省している。上位者である上司が下位者である失敗した部下の笑いを「ニヤニヤ」と表現しても、インポライトとは認識されないということを示す例と言える。

力関係で説明できるものとして、もう1つオンライン日本語教材の例を(5.5)に示す。

(5.5)大学の授業中、夏休みに彼女と旅行したときのことを思い出して一人でにやにや笑っていたら、先生に「何をにやにやしてるんだ」と注意されてしまった。

[国立国語研究所, 「日本語を楽しもう!」]

(5.5)では、授業中という笑顔を見せるには不適切な場面で男子大学生が笑っていることについて、大学の教員から注意を受けている。教員は「ニヤニヤ」という表現を使い、笑いの主体も自身の笑いを「ニヤニヤ」と表現し、教員に「ニヤニヤ」と表現されたことを受け入れている。上位者である教師が下位者である学生の笑いを「ニヤニヤ」と表現して

も、無礼にならず許容されるということを示す例である。

以上、笑いの主体を前に直接その笑いを「ニヤニヤ」と表現しても許容されると一般的に考えられている例を見た。(5.3)~(5.5)の例はいずれも、社会的距離の近い、または力関係が上位にある人物による「ニヤニヤ」の使用がインポライトとはならない、先述のポライトネス理論の社会的距離 D と相対的力 P で説明できる例と言える。このような関係性にある表現者が、不適切な場面で笑顔を見せる被表現者に対して冗談や注意として発話する場合、「ニヤニヤ」は許容されると考えられる。また、これらの例の被表現者がいずれも男性であったことから、オノマトペ研究や日本語教育が、「ニヤニヤ」と男性性を暗に結びつけて示していることも明らかになった。

しかしながら、第 5.1 節の (5.2) で見た被表現者は、社会的距離の近い祖父や、力関係が上位にある上司から「ニヤッ」「ニヤニヤ」と笑いを表現されたことを否定的に捉えていた。また、(5.1) で「ニヤニヤ」と笑いを表現されたことを否定的に捉えていた笑いの主体は男性であった。これらは、「ニヤニヤ」によるキャラ化がインポライトとなる度合いの算定に、B&L の主張する社会的距離や相対的力といった話者間の関係以外の要素が存在すること、そしてその要素とは主体の性別だけでないことを示唆していると考えられる。次小節では、話者間の関係と性別以外の要素を明らかにするため、母語話者対象の意識調査を行う。

第 5.3.2 節 「ニヤニヤ」のキャラに関する意識調査

意識調査は、日本語母語話者 52 名 (平均年齢 20.7 歳, $SD=3.45$) を対象に、「ニヤニヤ」という表現にふさわしいまたはふさわしくない笑いの主体のキャラを尋ねる質問紙調査の形で行った。質問紙では、特に文脈情報を与えず、子ども、若い女性、若い男性、中年女性、中年男性、老人、善人、悪人、上品な人、下品な人、頭のいい人、頭の悪い人、容姿の整った人という 13 種のキャラを提示し、それらが「ニヤニヤ」という笑いの主体としてふさわしいかを「ふさわしい」「ふさわしくない」「どちらとも言えない」の 3 件法で判定してもらった。13 種のキャラは、羅 (2011)、宿利 (2017a)、宿利・羅 (2017)、およびこれらを参考に行った予備調査の自由記述結果をもとに選定した。具体的には、日本の小説やマンガに現れる笑いのオノマトペを分析した羅 (2011) の、「にやにや」「にやりにやり」「にやり」などの「ニヤニヤ」類が「下品な善玉」または「悪玉」キャラの笑い方であるという指摘から、善人、悪人、上品な人、下品な人の 4 種のキャラを設定した。また、ロシアの小説『罪と罰』のロシア語原文と、日本語訳の比較を行った宿利 (2017a) および比

較に中国語訳を加えた宿利・羅（2017）の、同様のロシア語の笑いの表現が「若く（容姿または心が）美しい女性」や「子ども」、「上品な男性」のキャラなら「にっこり」などの「ニコニコ」類、「（精神状態のおかしくなった）中年男性／女性」のキャラなら「にやり」などの「ニヤニヤ」類の日本語訳があてられるという指摘から、子ども、若い女性、若い男性、中年女性、中年男性、頭のいい人、頭の悪い人の7種のキャラを設定した。これら11種のキャラと自由記述欄を設け、14名の日本語母語話者を対象に行った予備調査において、「ニヤニヤは老人にも使う」「容姿の整った人の笑いにはニヤニヤはおかしい」という記述が見られたため、老人と容姿の整った人の2種を追加した。

カイ二乗検定および多重比較（js-STAR ver-sion8.0.1j）を行った結果、「ニヤニヤ」の主体として、「子ども（ $X^2=52.78$, $df=2$, $p<.01$ ）」「若い女性（ $X^2=12.04$, $df=2$, $p<.01$ ）」「若い男性（ $X^2=66.28$, $df=2$, $p<.01$ ）」「中年男性（ $X^2=18.50$, $df=2$, $p<.01$ ）」「悪人（ $X^2=61.66$, $df=2$, $p<.01$ ）」「下品な人（ $X^2=92.47$, $df=2$, $p<.01$ ）」「頭の悪い人（ $X^2=46.31$, $df=2$, $p<.01$ ）」が有意にふさわしく、「善人（ $X^2=24.50$, $df=2$, $p<.01$ ）」「上品な人（ $X^2=66.28$, $df=2$, $p<.01$ ）」「容姿の整った人（ $X^2=9.50$, $df=2$, $p<.01$ ）」が有意にふさわしくないと評価された。調査結果を表5.2に示す（ゴシックは有意となった数値である）。

「ニヤニヤ」と笑いを表現されることに不満を感じる男性（たとえば前述の(5.1)の男性）や女性（たとえば(5.2)の女性）がいることから、この結果が、どのような「子ども」「若い女性」「若い男性」「中年男性」でも「ニヤニヤ」にふさわしいという認識が母語話者間である程度共有されていることを意味するとは考えにくい。そうではなく、「子ども」「若い女性」「若い男性」「中年男性」のうち、「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」のような特徴を持つキャラが、「ニヤニヤ」の主体として日本語母語話者に認識されていると考えるのが妥当であろう。

この意識調査結果から、人間関係などの文脈情報がない場合でも、「ニヤニヤ」という表現と被表現者のキャラとの結びつきに関する認識を、母語話者がある程度共通して持っていることがわかった。また、このことから、日本語社会において他者（被表現者）の笑いを「ニヤニヤ」と表現することは、「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」のような特徴を持つ「子ども」「若い女性」「若い男性」「中年男性」キャラにキャラ化することであるということが明らかになった。

表 5.2 「ニヤニヤ」の笑いの主体に関する意識調査結果

キャラ \ 尺度	ふさわしい	ふさわしくない	どちらとも言えない
子ども	42名 / 80.8%	6名 / 11.5%	4名 / 7.7%
若い女性	29名 / 55.8%	13名 / 25.0%	10名 / 19.2%
若い男性	45名 / 86.5%	4名 / 7.7%	3名 / 5.8%
中年女性	22名 / 42.3%	24名 / 46.2%	6名 / 11.5%
中年男性	31名 / 59.6%	15名 / 28.8%	6名 / 11.5%
老人	16名 / 30.8%	29名 / 55.8%	7名 / 13.5%
善人	11名 / 21.2%	34名 / 65.4%	7名 / 13.5%
悪人	44名 / 84.6%	5名 / 9.6%	3名 / 5.8%
上品な人	3名 / 5.8%	45名 / 86.5%	4名 / 7.7%
下品な人	50名 / 96.2%	0名 / 0.0%	2名 / 3.8%
頭のいい人	16名 / 30.8%	22名 / 42.3%	14名 / 26.9%
頭の悪い人	40名 / 76.9%	2名 / 3.8%	10名 / 19.2%
容姿の整った人	9名 / 17.3%	27名 / 51.9%	16名 / 30.8%

※ 13種のキャラそれぞれにおいて N=52。

第 5.4 節 日本語学習者の「ニヤニヤ」によるキャラ化とポライトネス評価調査

本節では、「ニヤニヤ」によるキャラ化のポライトネス評価について、日本語学習者の作文の使用例を用いた日本語母語話者対象の意識調査を行い、分析、考察する。学習者作文コーパスなどに「ニヤニヤ」の使用例が見当たらないため、ここでは筆者が担当した日本語作文授業での学習者の使用例を紹介する。

次の (5.6)は、日本の4年制大学に学部生として留学している韓国語母語話者の学生による作文の一部である¹⁵。

(5.6)日本は礼儀を大切にする国である。優しい笑顔は基本で、よく「すみません」、「ごめんなさい」、「ありがとうございます」みたいなことばを使う。もし、このようなコミュニケーション・スタイルを従わない場合、無礼な人になる。私も礼儀を大切にする人だからたぶんコミュニケーション・スタイルが韓国より日本にもっと近いと思う。そんな私は韓国では優しいふりをする人に通じる。

¹⁵ 作文は書き手である学習者の承諾の下に掲載している。

韓国にも礼儀はきっとあるが「すき」、「きれい」ははっきり表現するタイプだ。だからいつもにやにやする日本人を理解できないかもしれない。「ばじめて会った人にどうしてそんなに優しいの？」って聞いたことがある。日本だったらあたりまえなことだが韓国ではわざわざそうする必要を感じない。[・・・]

(5.6)には、日本のコミュニケーション・スタイルを礼儀正しいと評価し、表現者自身もそのようなコミュニケーション・スタイルに従っているという内容が書かれている。国籍や母語は異なるが、表現者である学習者が自身に近い存在として日本人を捉えていることがうかがえる。「ニヤニヤ」の主体は日本人一般であり、この学習者との力関係や、主体の性別は特定されていない。

全体的に日本のコミュニケーション・スタイルや日本人に好意的である分、「ニヤニヤ」という表現が目につく。笑いの主体である被表現者の日本人に対する、「礼儀を大切にする」「優しい笑顔」という前半の肯定的なキャラ化と、「ニヤニヤ」による否定的なキャラ化は相反する対立的なものである。書き手の学習者は、「声をたてないで、表情だけで笑い続けるさま。冷ややかに、意味ありげにうす笑いを浮かべる（小野 2007）」様子、という辞書や日本語教材どおりの意味で使用しており、特に日本人を「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」としてキャラ化したいわけではないと予想される。そしてもちろん、礼儀正しく優しい笑顔を浮かべる「いい人」キャラの日本人でも、時には意味ありげにうす笑いを浮かべるということもあるだろう。だが、書き手の意図とは無関係に、「実は日本人に否定的な印象を抱いており、「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」という否定的なキャラ化をあえてしようとしているのではないか」という推論を働かせる日本語母語話者がいるのではないか。その笑いが「ニヤニヤ」に見えているのなら誤用ではないが、他の日本語母語話者が読んだら不愉快になるのではないか。このような考えから、筆者は「にやにやする」を比較的中立と思われる「いつも笑っている」に修正した。

このような認識が筆者の個人的なものなのかどうかを調べるため、日本語を母語とする日本語教師に作文を添削してもらった形で意識調査を実施した。調査では、日本の大学、日本語学校で働く 30 歳台～60 歳台の日本語教師 13 名（男性 4 名、女性 9 名）に、(5.6)を加工した作文の一部を提示し、誤用や不自然な部分を修正してもらった。作文の一部には、(5.6)に見られるような語彙的および文法的に不自然な点を数箇所含めた。調査協力者には、作文の書き手に関して、日本の 4 年制大学に学部生として留学中の非母語話者であると伝

え、「韓国」という国名は「A国」と修正して提示した。協力者はすべて日本人であり、笑いの主体である「日本人」に含まれているが、直接自身の笑いを「ニヤニヤ」と表現されたわけではないため、第三者の評価者と考える。

調査の結果、13名中8名が「にやにやする」を誤用または不自然とし、7名が「にこにこする(2名)」「にこにこしている(2名)」「わらっている(1名)」「微笑んでいる(1名)」「笑顔の(1名)」に修正した。残りの1名は、誤用または不自然として「にやにやする」に下線を引いたが、修正案は記入しなかった。調査協力者の年齢や性別、日本語教育歴や働いている日本語教育機関に共通性は認められなかった。調査結果を表5.3に示す。

表 5.3 添削意識調査によるポライトネス評価結果

誤用／正用	出身地	日本語教育歴	コメント
誤用 8 名 (男性 2 名, 女性 5 名)	秋田県, 大阪府, 千葉県, 東京都, 兵庫県, 宮城県	6 年～30 年	前の部分と合わない。印象が悪い。不自然。アカデミックな表現として不適切。
正用 5 名 (男性 2 名, 女性 3 名)	愛媛県, 富山県, 兵庫県, 北海道, 宮城県	5 年 7 か月 ～15 年	留学生だから問題ない。他の部分の誤用・不自然さの方が気になる。日本語能力から修正の必要なし。

誤用または不自然とした8名に、その理由を尋ねたところ、「優しい笑顔という前の部分と合わないから(3名)」「本当にニヤニヤしているように見えているかもしれないが、印象が悪いから(2名)」「なんとなく不自然に感じたから(2名)」「否定的な価値観を含むことばを、アカデミックな課題に使うのは不適切だから(1名)」というコメントを得た。「前の部分と合わない」という指摘は、礼儀正しく優しい笑顔を浮かべる日本人は、いつも優しい笑顔を浮かべているはずであるという前提に基づくものと考えられる。時には意味ありげにうす笑いを浮かべることもあるだろうという可能性は重視されず、表現と被表現者のキャラの齟齬として修正されている。また、「本当にニヤニヤしているように見えているかもしれないが、印象が悪い」は、意味的には正用かもしれないが、失礼だから修正したという指摘である。「印象が悪い」ということばは、笑いの主体である被表現者の日本人を、「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」というキャラとして否定的に表現していることに対するものと考えられる。

誤用または不自然としなかった5名の調査協力者からは、「失礼な表現かもしれないが、留学生だから良いかなと思った(2名)」「構成などほかの部分の方が気になった(2名)」「作文の日本語能力を考え、修正しなくても良いと判断した(1名)」というコメントを得た。

これらのコメントから、表現者が非母語話者であり、その日本語能力が低いと見なされた場合、「ニヤニヤ」の使用は無礼でも誤用でもなく、特に注目されないということがわかる。このことは、表現者の日本語能力が十分に高いと認識されれば、使用した「ニヤニヤ」はインポライトと判断され、場合によっては日本人を意図的に「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」というキャラとして否定的に表現していると判断される可能性を示唆する。

以上の結果は、「ニヤニヤ」の使用が表現と主体のキャラの齟齬により誤用として修正されたり、ないはずの悪意が推論により導き出されインポライトと評価されたりすることを示している。また、表現者が非母語話者で日本語能力が十分に高くないと判断された場合は、「ニヤニヤ」使用が特に注目されないということも明らかになった。

第 5.5 節 考察

本節では、本章を全体的に考察する。前節では、母語話者の日本語教師による学習者の作文の添削調査から、「ニヤニヤ」の使用が表現と被表現者のキャラの齟齬により誤用として修正されたり、ないはずの悪意が推論により導き出されインポライトと評価されたりするということが明らかになった。この結果について、「「ニヤニヤ」という表現にはそもそもマイナスの印象が含まれているのだから当然だ」という指摘があるかもしれない。確かに、「子ども」「若い女性」「若い男性」「中年男性」のうち、「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」のような特徴を持つキャラが、「ニヤニヤ」の主体として日本語母語話者に認識されていることが第 5.3.2 節で行った意識調査の結果から示されており、「ニヤニヤ」がマイナスの印象を含むことは否定できない。だが、もし「ニヤニヤ」がマイナスの印象を含んでいるせいで、他者の笑いを表現するには不適切であるとするならば、日本語母語話者による「ニヤニヤ」使用はいつもインポライト、ということになってしまう。そしてもちろん、現実的にそうならないことを私たちは知っている。では、どのような状況なら他者の笑いに対する「ニヤニヤ」使用は許容されるのか。

ポライトネス理論が主張するように、社会的距離や力関係という人間関係により、「ニヤニヤ」使用が許容される場合があることは、第 5.3.1 節で見た。前節の結果についても「笑いの主体である日本人一般は、表現者である学習者の知らない人、つまり社会的距離の遠い関係にある人も多く含むため、インポライトなのだ」という解釈が可能となるかもしれない。もしそうなら、学習者が特定の日本人と親しくなったり、特定の日本人より上の地位に立ったりすれば、「ニヤニヤ」使用は許容されることになる。この解釈は、オノマトペ

研究や日本語教育による説明と重なる。だが、第 5.1 節の(5.2)で見たとおり、社会的に近い相手や力関係で上位にある相手の「ニヤニヤ」使用が、主体を傷つけるインポライトな表現となる場合がある。そのため、話者間の人間関係のみから「ニヤニヤ」使用に関するポライトネス評価を説明することはできない。

第 5.3.1 節の事例分析では、人間関係に関する知見以外にも、笑いの主体が男性性に偏っているということが明らかになった。これは、「ニヤニヤ」の主体は男性である」という、オノマトペ研究や日本語教育に見られる暗黙の説明と考えることができる。では、男性の笑いを「ニヤニヤ」と表現する場合、いつでもインポライトにならないのかというと、第 1 節の(5.1)で見たとおり、必ずしもそうではない。

第 5.4 節では、書き手である学習者（キャラ化する表現者）は、何らかの材料をもとに、笑いの主体である日本人（キャラ化される被表現者）をまず「優しい笑顔」という表現からキャラ化し、続いて「ニヤニヤ」使用によって「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」にキャラ化している。つまり、計 2 回キャラ化しているということになる。評価者である日本語教師たちの多くは、「優しい笑顔」という表現による 1 回目のキャラ化と、「ニヤニヤ」と結びついた「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」という 2 回目のキャラ化のキャラとが合っており、齟齬が生じていると判断し、インポライトまたは誤用として修正を行ったと考えることができる。この場合、1 回目のキャラ化のほうがインポライトまたは誤用であり、2 回目のキャラ化が適当であると判断することも可能であるが、評価者の多くは 2 回目のキャラ化を不適切と判断した。それは、評価者自身がすでに「日本人」という笑いの主体を心内で何らかのキャラにキャラ化しており、そのキャラが「ニヤニヤ」する「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」キャラではなく、「優しい笑顔」の「いい人」キャラに近かったためと考えられる。その場合、表現者と評価者のキャラ化に齟齬が生じ、表現者のキャラ化はインポライトと評価される。以上の流れを図 5.1 に示す。



図 5.1 笑いの主体に対するキャラ化をめぐるポライトネス評価のメカニズム

このように考えると、第 5.1 節の(5.1)(5.2)の笑いの主体が、自身の笑いを「ニヤニヤ」と表現されたことを否定的に捉えていた理由が説明できる。すなわち、(5.1)(5.2)の主体をポライトネスの評価者と考えると、被表現者が自分自身に対して抱いているイメージとしてのキャラと、「ニヤニヤ」によってキャラ化された「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」というキャラが異なったために、「ニヤニヤ」使用をインポライトと判断したことになる。

そしてもう 1 つ、第 5.4 節の添削調査で忘れてはならないのが、評価者である日本語教師による、日本語学習者に対するキャラ化の側面である。キャラ化に対するポライトネス評価には、キャラ化される被表現者のキャラと、キャラ化する表現者のキャラの両方が影響を与えると考えられる。添削調査では、評価者である日本語教師が、書き手である学習者を「日本語能力の低い外国人」キャラとしてキャラ化した場合、笑いの主体である日本人に対する学習者のキャラ化が合っておらず齟齬が生じていても、それは単なる「日本語能力の低い外国人」キャラのキャラ行動であると認識され、インポライトとはならず、許容されたり、修正されたりする。以上の流れを図 5.2 に示す。学習者は、笑いの主体である日本人をキャラ化する表現者であると同時に日本語教師にキャラ化される被表現者でもあり、また、日本語教師は笑う日本人と学習者をキャラ化する表現者であると同時に学習者のキャラ化を評価する評価者でもあることになるが、わかりにくくなるためそれぞれ表現者、評価者とだけ記す。

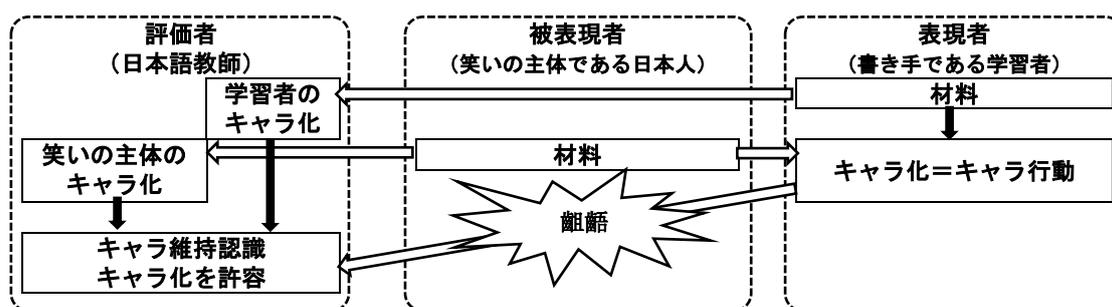


図 5.2 笑いの主体と学習者に対するキャラ化をめぐるポライトネス評価のメカニズム

第 5.6 節 まとめ

本章では、一般的にどのような場合なら「ニヤニヤ」の使用が許容され、インポライトとならないと考えられているのか、「ニヤニヤ」は日本語母語話者の間でどのようなキャラの笑いとして認識されているのか、日本語学習者による「ニヤニヤ」の使用はどのように評価されるのか、という 3 つの疑問を背景に、他者の笑いを「ニヤニヤ」と表現する際の、

状況および笑いの主体のキャラについて調査を行った。その結果、日本語社会では社会的距離の近い場合や力関係が下の主体の笑いを表現する場合に「ニヤニヤ」を使用しても許容されることが多いこと、オノマトペ研究や日本語教育の世界では、「ニヤニヤ」の主体が男性性に偏っていることが示された。また、日本語母語話者は「ニヤニヤ」の主体として、「子ども」「若い女性」「若い男性」「中年男性」のうち「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」という特徴を持つキャラがふさわしいという認識をある程度共通して持っていることが明らかになった。さらに、日本語学習者はふさわしくない主体の笑いに「ニヤニヤ」を使用することがあり、そのキャラ化が母語話者に誤用として修正されたり、否定的な意図を伴うインポライトな表現の使用と判断されたりすることがあることもわかった。

ただし、本章の調査には少なくとも以下3点の問題がある。1点目は、「ニヤニヤ」という言語形式のみを考察対象としている点である。わずか1つの対象を考察することで、キャラクタ動作の表現によるキャラ化とポライトネス評価の関係をすべて語る事が不可能なのは自明である。今後、「ニヤニヤ」以外にも、キャラクタ動作の表現によるキャラ化とポライトネス評価についてのさらなる実証研究を行っていく必要がある。とはいえ、キャラ研究で言及されてきた「ニヤニヤ」というキャラクタ動作の表現と、ポライトネス評価の関係の一端を明らかにした本章の試みは、これまでまったく実証されてこなかった問題に光を当てたという意味で意義深い。

2点目は、キャラ化の材料としての日本語能力とポライトネス評価の関係性についての説明が不十分な点である。「ニヤニヤ」によるキャラ化へのポライトネス評価が、キャラ化される被表現者（笑いの主体）のキャラと、キャラ化する表現者（作文を書いた学習者）のキャラの両方から影響を受けていることは既に述べた。後者に関して、日本語社会における推論パターンや社会規範を習得し、日本語学習者が日本語母語話者並みの日本語能力を身につければ、ポライトネス評価は高くなるのかという疑問が生じるが、本章の結果からその疑問への回答を示すことはできない。

3点目は、ポライトネス評価におけるキャラ化とキャラ行動の関係についてまったく論じられていない点である。本章ではキャラ化にのみ特化した研究目的を設定したが、実際には、「ニヤニヤ」使用により不適切なキャラ化を行うということが、日本語能力の十分でない日本語学習者というキャラのキャラ行動と判断され、キャラ化がインポライトとは評価されない場合があることが示された。このことは、表現者のキャラとキャラ行動の関係もポライトネス評価に影響を与えていることを示す結果と言える。キャラ化と非キャラ行

動が同時に起こる場合、どちらがどのようなポライトネス評価を受けるのかといったことは、本章の結果からは明らかにならない。

2点目と3点目、つまりキャラ化の材料としての日本語能力とポライトネス評価の関係、そしてキャラ化とキャラ行動の関係については、第6章の個別研究2および第7章の個別研究3で論じることとする。

第6章 非キャラ行動のポライトネス評価（個別研究2）

本章では、第4.3節で述べた可能性2，すなわち非キャラ行動はインポライトにつながるのかについて、日本語学習者の発話音声データに対する日本語母語話者のポライトネス評価をもとに検証する。さらに、第5章で問題となった、キャラ化の材料としての日本語能力と、ポライトネス評価の関係性についても観察する。発話音声は、ロシア語を母語とする日本語学習者による動詞否定丁寧形「～ません」と「～ないです」を含む発話である。第6.1節では、研究の背景と目的を、第6.2節では動詞否定丁寧形をはじめ、本研究にかかわる先行研究を整理しその問題点を述べる。第6.3節では、日本語母語話者を対象に行ったポライトネス評価に関する意識調査の概要を述べ、第6.4節ではその結果を示す。第6.5節では、調査結果を踏まえた考察を行い、第6.6節でまとめを述べる。

第6.1節 研究の背景と目的

日本語の動詞否定丁寧形には、「食べません」「食べないです」という2つの言語形式が存在するが、文字言語と音声言語でポライトネスに関する評価に揺れが見られることが報告されている。動詞否定丁寧形に関する先行研究において、文字言語では「～ません」が規範的とされてきた（川口 2006）が、音声言語では日本語母語話者による「～ないです」の使用が多く（小林 2005; 金 2010）、若年層日本語母語話者にとっては「～ないです」のほうが「～ません」より丁寧さと親しみを感じる表現である（澤田 2012）という報告もなされている。一方、日本語教育においては、文字言語の影響からか「～ません」のみが扱われることがほとんどである（小林 2005）¹⁶。もし、日本語学習者の発話においても、音声言語では「～ないです」のほうが「～ません」よりポライトだと評価されるのだとすると、「～ません」のみを扱う、特に初級の日本語教育は学習者に不利益を与えている可能性がある。日常会話の運用を目指す授業においては「～ないです」も扱うべきだという指摘もある（小林 2005）。

このような指摘どおりに「～ないです」を指導しさえすれば良いのかというと、もちろんそうではない。「～ないです」を指導する前に、解明しなければならない点が少なくとも2つある。1点目は「～ません」「～ないです」の役割語としての側面について、2点目は

¹⁶ 小林（2005）は、『日本語能力試験出題基準』、『A Dictionary of Basic Japanese Grammar』、『日本語初歩』、『みんなの日本語 初級 I 本冊』、『Situational Functional Japanese Volume One: Notes』、『Japanese for Busy People I』という6種の代表的な日本語教科書や参考書における述語否定丁寧形について調べた。

発音とポライトネス評価の関係についてである。

1 点目について。「すべてのことばは役割語（定延 2011）」であり、いわゆる「標準語」発話もキャラを連想させる度合いである「役割語度（金水 2003）」は高くないものの、たとえば「田舎者」キャラは「標準語」を話さないだろう」という期待を伴う非キャラ行動となる。動詞否定丁寧形に関しても、「西洋人」キャラと「～ませーん」というモーラが挿入された「～ません」発話のつながりが指摘されており（依田 2011）、「～ません」と「～ないです」のような初級段階で扱われる言語形式もキャラ行動・非キャラ行動となるということとは否定できない。

2 点目について。音声言語の場合、アクセントやイントネーションなど、発話の音響的特徴が印象を左右することはすでに知られている。たとえば、ロシア語母語話者独特のイントネーションは、英語や日本語を話す際の印象に影響し、インポライトな印象や威圧感を与える点が指摘されている(Comrie 1984; マディヤロヴァ 2004)。筆者が日本語教師として教壇に立ったシベリアでも、ロシア語を母語とする日本語学習者の、「知りません」「わかりません」という否定文発話が、日本語母語話者にインポライトな印象や威圧感を与え、母語話者が不快感を示す場面に遭遇することが少なくなかった。たとえ音声言語ではポライトだとされる「～ないです」形式を教えたとしても、音響的特徴のせいでインポライトと評価される可能性は十分に考えられる。

以上のような疑問を背景に、本章では、ロシア語を母語とする日本語学習者（本章では以下、ロシアの学習者または学習者と記載）による動詞否定丁寧形「～ません」と「～ないです」の発話の音声を用いて印象評価を行い、言語形式、発音、話者のキャラがポライトネスを含む印象の評価に与える影響を観察する。まず、先行研究をもとに「～ません」発話が「非母語話者」キャラのキャラ行動として日本語母語話者に認識されていることに触れ、その後以下2点を明らかにする。

第1点、 日本語学習者による「～ないです」発話はどのように評価されるのか。

第2点、 ポライトネス評価と発話の音響的特徴の関係はどのようなものか。

あらかじめ結論を述べると、発音が上手で日本での生活が短い日本語学習者、および発音があまり上手でなく日本での生活が長い日本語学習者による「～ないです」発話はインポライトと評価される。また、発音の上手さはアクセント・イントネーションの自然さと

関連しているが、アクセント・イントネーションが自然ならば必ずしもポライトネスの評価が高くなるわけではない。

第 6.2 節 先行研究とその問題点

本節では、本章に関連する先行研究を、動詞否定丁寧形の発話と印象に関する研究（第 6.2.1 節）、発音と発話の印象に関する研究（第 6.2.2 節）、キャラと発話の印象に関する研究（第 6.2.3 節）の順に概観し、その問題点を指摘する。

第 6.2.1 節 動詞否定丁寧形と発話の印象

動詞否定丁寧形の先行研究には、日本語母語話者の使用実態に関するものが多く、ポライトネスを含む印象を調査したものは 2 つしか見当たらない。これらは、「～ないです」のほうがポライトで印象が良いと主張するもの（澤田 2012）と、「～ません」のほうがポライトで印象が良いと主張するもの（宿利・大内 2018）に分かれるが、後者は文字言語色の強い文を用いた調査を行っており、問題点も多い。

澤田（2012）が日本語を母語とする大学生を対象に行った調査では、目上の人物との会話場面における動詞否定丁寧形で終わる文について、「～ないです」を「自然」と評価した母語話者数が「～ません」を「自然」と評価した母語話者数を上回った。また、澤田の調査の被験者は、「～ないです」を伴う文を「やわらかい」「やさしい」「親しみと丁寧さを持つ表現」と肯定的に評価したが、「～ません」を伴う文は「キツパリ言いすぎ」「愛想がない」「否定が強すぎる」「つめたい」「きつい」「丁寧さにかける」と否定的に評価した。ただし、この調査では被験者に対して文字による刺激の提示しか行われておらず、音声による具体例が提示されていないという問題点がある。そのため、被験者それぞれが思い描いた発話の違いに調査結果が影響された可能性がある。

日本語母語話者とロシアの学習者による動詞否定丁寧形を含む文の発話音声の印象を比較した宿利・大内（2018）の調査では、母語話者の発話も学習者の発話も「～ないです」より「～ません」のほうが「丁寧さ」「感じの良さ」に関して高く評価された。また、学習者の「～ないです」発話は「丁寧さ」に関して母語話者と同程度に評価される一方、「感じの良さ」に関して母語話者の発話より低く評価されることが明らかになった。この結果から、学習者の「非日本語母語話者」というキャラによって、動詞否定丁寧形を含む文の発話に対する評価が異なる可能性が示された。ただしこの調査は、文字言語色の強い日本語

教材の会話文を刺激音声に用いている点、調査の際刺激音声のみを提示し文脈情報を提示していない点、また学習者の「～ないです」発話の発音に不自然さが残り調査結果に影響を与えた可能性がある点など、課題が多い。

以上、取り上げた両研究にはそれぞれ問題点があり、それらの問題点を改良した調査が必要である。

第 6.2.2 節 発音と発話の印象

動詞否定丁寧形に注目した発音研究は見当たらないが、日本語母語話者の発音と発話のポライトネスを含む印象に関する研究や、日本語学習者の発音の上手さによる印象評価への影響に関する研究は数多く存在する。本小節では、まずポライトネスにかかわる発音の研究を紹介し、その後ロシアの学習者による日本語発話の発音についての研究を紹介する。

日本語母語話者による発話のピッチ、音域、発話時間や速度とポライトネスに関する研究の主張はさまざまであり、ポライトネスと発話の音響的特徴の関係を説明する共通の知見は得られていない。ピッチに関しては、母語話者の丁寧な発話では、男女問わずピッチが高くなるとする研究（洪 1993）と低くなるとする研究（鶴谷 2016）が存在する。さらに、中年女性の発話においては低いピッチが「丁寧さ」を表し、高いピッチが「親しさ」を表すという報告もある（荻野・洪 1992）。音域に関しては、「丁寧さ」を表す発話は音域が狭く抑えられるとする研究（洪 1993; 鶴谷 2016）と、「親しさ」を表す発話はピッチの上下の変動が著しい傾向にある（荻野・洪 1992）とする研究がある。発話時間に関しては、ポーズを含めた発話時間の長さを母語話者の丁寧な発話の特徴とする指摘がある（洪 1993; 鶴谷 2016）ものの、その長さは発話により異なると予想される。発話速度については、評価者が早すぎるまたは遅すぎると判断する場合、丁寧だと評価されない(Ofuka *et al.* 2000)が、これも発話や聞き手により異なる可能性が高い。

ロシアの学習者の発音に関する研究は数少ないが、母語話者による評価を扱った渡辺・松崎（2014）は母語話者にとって不自然な音響的特徴を記述しており、本研究の参考になる。渡辺・松崎（2014）によると、母語話者は単音（「ですが」を「でずが」と発音する等）、リズム（長音挿入等）、アクセント・イントネーションといった点に注目し、学習者の発音の「自然さ」を評価するという。本研究は「自然さ」評価を調査するものではないが、これらは母語話者が注意を向ける点として本研究にも応用できる。

本小節で概観したように、ポライトネス評価と直接的につながるとされる音響的特徴に

関する主張はさまざまであり、ポライトであるという評価に必ず結びつくような音響的特徴を見いだすのは困難であると考えられる。しかしながら、ロシアの学習者による発音が原因で、聞き手にインポライトな印象や威圧感を与えることが指摘されており（マディヤロヴァ 2004）、そのような悪印象につながる、つまりインポライトと評価される音響的特徴を探ることは可能であると考ええる。

第 6.2.3 節 キャラと発話の印象

本研究に関連する、話者である学習者のキャラと発話の印象に関する研究は、片言の日本語を話す発話キャラクタの役割語としての側面に関するものと、日本語能力の高低による母語話者の評価の違いに関するものの 2 つに分けられる。

前者について、依田（2011）は、昭和初期から戦後のフィクション作品を分析し、「終助詞「ね」の誤用」、「モーラの挿入および消去」、「母語の出現」、「カタカナ表記による視覚的効果」といった「西洋人」キャラ¹⁷の話す片言日本語の特徴をまとめている。片言日本語を話す「西洋人」キャラは、「愛嬌のある、伶俐には見えないけれども憎めない存在」という親しみやすい性格的特徴も有している（ibid: 233）。特に「でーす／まーす／ませーん」という文末表現と「西洋人」キャラの結びつきが顕著であることが指摘されている（ibid: 229）。このことから、特に「せ」と「ん」の間にモーラの挿入が見られる「～ません」の発話は、片言日本語であり「西洋人」キャラのキャラ行動として認識されている可能性が非常に高いと言える。

後者について、一般の日本語母語話者は、初級学習者の文法やアクセント・イントネーションなどの発音に関して、初級であることを考慮し甘く評価する傾向があることが指摘されている（小池 1998）。小池（1998）が、初級日本語学習者によるロールプレイのデータを用いて、日本語母語話者を対象に行った印象評価調査では、「習いたての日本語だっていういこと（原文ママ）を心に入れたら、そんなにね、多少間違っても～（p. 152）」とコメントした母語話者がおり、初級者であることを考慮し、甘く評価していることがうかがえる。また、日本語母語話者・上級学習者・初級学習者の発話を母語話者が評価する際、母語話者と上級学習者の発話は同じ基準で評価される一方、初級学習者には異なる基準が用いられること、上級学習者への評価が厳しくなることも明らかにされている（岡田・杉

¹⁷ 「西洋人」キャラとは、アメリカ、イギリス、フランスなどの欧米諸国出身者「髪は金色で肌が白く、高い鼻を持つ」という外見特徴を持つ登場人物で、「アナタハ、カミヲ、シンジマースカ?」のような片言の日本語を話すキャラ（依田 2011: 213-214）のことである。

本 2001)。岡田・杉本（2001）は、日本語母語話者 1 名、上級日本語学習者 2 名（1 名は上級学習者役、もう 1 名は初級学習者役）の断り発話の読み上げ音声を用い、母語話者に印象評価をさせた。その結果、母語話者と上級学習者の発話は同様の評価基準で評価されたが、初級学習者の発話は異なる評価基準により評価された。さらに、上級学習者の発話は母語話者と初級学習者より「不快と思う」という低い評価を受けた。岡田・杉本（2001）には、調査時に学習者のレベル（上級・初級）を被験者に提示したかどうかは明記されていないが、読み上げのセリフはそれぞれのレベルに合った語彙・文法を用い岡田・杉本が作成している。提示されていない場合は、語彙や文法から、被験者が話者のレベルを推定し、それが評価に影響を与えたと考えられる。

以上、特に「せ」と「ん」の間にモーラが挿入された「～ませーん」という発話が、「片言日本語を話す」キャラのキャラ行動と考えられていること、初級学習者という「日本語能力の低い外国人」キャラなら甘く評価され、上級学習者という「日本語能力の高い外国人」キャラなら日本語母語話者と同等に、時にはより厳しく評価されることがわかった。本研究では、発音の上手さという日本語能力の要素に、日本の日本企業における勤務年数の長さという日本生活の長短の要素を加え、「外国人らしい外国人」キャラと「日本人に近い外国人」キャラへの評価の違いを見ることとする。

第 6.3 節 調査概要

本節では、ロシアの学習者の発話音声に関する日本語母語話者対象の意識調査について、刺激音声（第 6.3.1 節）、評価者と評価項目（第 6.3.2 節）、予想（第 6.3.3 節）の順に述べる。

第 6.3.1 節 刺激音声

読み上げを行う調査協力者として、ロシアの学習者 6 名（R1～R6）を採用した。6 名はすべて女性（20 歳台～40 歳台）で、日本語能力試験 N2 合格以上の、シベリアの文化センターや大学で日本語を教える日本語教師である。収録前に OJAD 日本語読み上げチュータズキクンを用い韻律を視覚的に提示しながら調査者と発音練習を行った。これは、特に動詞否定丁寧形以外の部分の韻律の不自然さが残り、評価に影響を与えることがないように行ったものである。韻律の視覚提示は読み上げ音声の自然性に効果的であることが実証されている（峯松他 2016）が、後述するとおり（第 6.4.2 節参照）アクセントやイントネーションに不自然さが残る発話もあった。刺激文は、動詞否定丁寧形に関する先行研究（金

2010; 川口 2014) で挙げられた自然発話に近い文 13 種を採用した。これらの文を「～ません」「～ないです」の 2 形式で準備し、合計 26 種の会話文を用いて音声収録を行った。

26 種の会話文から、金 (2010) の意識調査で「～ないです」が「～ません」よりふさわしいと 6 割以上の母語話者に選ばれたもの 3 種と、川口 (2014) で「～ないです」の発話例として提示されたもの 1 種の、計 4 種×2 形式を採用することとした。ただし、発話(2)は、金 (2010) では「食べるラー油」という表現が用いられていたが、本研究では既習語彙「沖縄料理」に修正した。川口 (2014) の例は特に「～ません」に比べ「～ないです」の使用が優勢であるというものではないが、発音が重視されるビジネス場面(小河原 2001)の会話であり、「～よ」「～ね」などの終助詞なしの言い切りの形で使用された例であるという理由から選択した。刺激音声として用いた 4 種を発話(1)～(4)とし、下に示す。これらは同僚との雑談(発話(1)～(3)) および仕事に関する会話(発話(4)) である。

発話(1) 【同僚の Aさんと 2人で雑談している場面】

A: カラオケにはよく行くんですか？

B: 前は月 1 で友達と行ってましたが、最近行ってません／行ってないです。

発話(2) 【同僚の Aさんと 2人で雑談している場面】

B: 私、最近、沖縄料理にはまってるんですが、上田さんは、沖縄料理とか 食べませんか／食べないですか？

発話(3) 【出張で他地域にいる同僚と 2人で電話で雑談している場面】

A: 今日、こちらでは初雪が降りました。そちらはどうですか？

B: 雪ですか！！こちらはまだ降ってません／降ってないです。

発話(4) 【同僚と 2人で表を確認している場面】

A: 罫線の横に今、チェックが入ってますか。

B: 入ってません／入ってないです。

刺激音声は、(1)～(4)の発話ごとに 6 名の調査協力者による 2 形式の音声をランダムに配列して作成した。発話(1)～(4)の 4 種×「～ません」「～ないです」の 2 形式×調査協力者 6 名で、合計 48 発話となった。各発話の間に評価のためのインターバルを 20 秒入れ、刺激音声は約 23 分となった。

第 6.3.2 節 評価者と評価項目

印象評価は、2017 年 11 月～12 月に神戸市の大学で行った。評価者は、18 歳から 30 歳までの大学学部生、大学院生計 61 名の日本語母語話者である。性別は男性 14 名、女性 47 名と女性が多い。評価者の出身地は、中部地方から九州地方までの西日本である。評価の前に、評価者には「日本の日本企業で働いている外国人」とその同僚の母語話者の会話であるという偽の情報を与えた。また、評価者を「2 年群」「10 年群」「対照群」という 3 つの群に分け、外国人の日本企業での勤務年数について異なる偽の情報を与えた（表 6.1 参照）。なお、評価者には話者の母語や国籍に関する情報は与えていない。

表 6.1 評価者群と提示した話者の勤続年数情報

	評価者群		
	2 年群	10 年群	対照群
評価者人数	20 名	20 名	21 名
勤務年数情報	約 2 年	10 年以上	年数情報無

評価項目として、「日本語のレベル」「丁寧さ」「親しみやすさ」「同僚としての望ましさ」の計 4 つを採用した。「日本語のレベル」は、話者の発音の上手さに関する評価を見るために設定した。刺激音声には同じ文を用いているため、「日本語のレベル」を尋ねられた評価者は、発音の上手さのみから評価すると考えた。判定の前に、2 年群には話者の勤務年数が約 2 年であることを、10 年群には 10 年以上であることを考慮して、判定するよう指示した。また、「丁寧さ」と「親しみやすさ」は、ポライトネス理論 (B&L 1978/1987; 滝浦 2008) および動詞否定丁寧形の印象に関する先行研究 (澤田 2012) を参考に設定した。「同僚としての望ましさ」は、ポライトネスだけでなく、日常的にかかわる人間、共同作業を行う人間としての話者の発話の評価を尋ねるために設定した。評価の前に、自身の同僚であると仮定して判定するよう全評価者群に指示した。「日本語のレベル」は「下手な～上手な」について、「丁寧さ」は「失礼な～丁寧な」について、「親しみやすさ」は「親しみにくい～親しみやすい」について、「同僚としての望ましさ」は「同僚として望ましくない～同僚として望ましい」について、それぞれ 5 件法で評価させた。5 件法の尺度は、「非常に当てはまる：1」、「やや当てはまる：2」、「どちらでもない：3」、「やや当てはまる：4」、「非常に当てはまる：5」の 5 つとした。調査票の提示例を表 6.2 に示す。

表 6.2 調査票の提示例

発話(1)	非常に当てはまる		やや当てはまる		どちらでもない		やや当てはまる		非常に当てはまる	
下手な	1	...	2	...	3	...	4	...	5	上手な
失礼な	1	...	2	...	3	...	4	...	5	丁寧な
親しみにくい	1	...	2	...	3	...	4	...	5	親しみやすい
同僚として望ましくない	1	...	2	...	3	...	4	...	5	同僚として望ましい

評価項目にはポライトネス（「丁寧さ」「親しみやすさ」）に加え、「日本語のレベル」「同僚としての望ましさ」という項目があるが、以後4つをまとめて評価項目、または印象と呼ぶ。なお、「印象が良い／悪い」を「評価が高い／低い」「評価が甘い／厳しい」と記すことがある。

第 6.3.3 節 予想

発音が印象評価に影響を与える可能性を考慮し、分析の際に刺激音声を発音の上手な群（以下、発音上群）と、あまり上手でない群（以下、発音下群）の2つに分けることとした。発音上群・下群の選別は、筆者を含む母語話者3名が単音、リズム、アクセント・イントネーション、流暢さに注目して行った（分類は第 6.4.1 節、調査協力者ごとの発話の音声情報に関しては第 6.4.2 節を参照されたい）。その上で、結果について以下4つの予想を立てた。

予想1：「～ないです」発話は「～ません」発話より評価が高い。（言語形式）

予想2：発音上群は発音下群より評価が高い。（発音）

予想3：2年群・対照群は10年群より評価が高い。（話者情報）

予想4：評価の高い／低い発音には共通した音響的特徴が存在する。

宿利・大内（2018）とは異なり、本研究は自然会話に近い刺激文を採用しているため、予想1は、音声言語では「～ないです」発話の印象が良いとする澤田（2012）をもとに設定した。予想2は、本研究で用いる刺激音声の話者はいずれも上級レベルの学習者であり、また同僚という設定であるため、発音が上手なほうが評価は高くなると考えた。予想3は、母語話者による初級学習者の発話に対する評価は甘くなる傾向があるとする小池（1998）を参考に、勤務年数が短いまたは不明の場合、長い場合より評価が甘くなる、つまり長い

場合評価が厳しくなると考えた。ただし、予想1~3に関しては、上級学習者の発話は母語話者の発話と同様の基準で評価されると主張する先行研究もあり、発音が上手で勤務年数が長い場合、母語話者同様「～ないです」発話の評価が高くなる一方、発音があまり上手でなく勤務年数が短いまたは不明の場合は、母語話者や上級学習者とは異なる基準で判断され、「～ません」発話の評価が高くなるというような評価の差が生じる可能性もある。この可能性については、結果を踏まえて考察する。予想4は、ロシアの学習者による発話の音響的特徴を記述した渡辺・松崎（2014）と、ロシアの学習者の発話が日本語母語話者に与える悪印象を指摘したマディヤロヴァ（2004）を参考に設定した。渡辺・松崎（2014）は発音の不自然さに注目したもののだが、本研究においても特に自然さとかかわりがある「日本語のレベル」といった印象に関連する特徴が観察される可能性は十分あると考えた。予想1~3は第6.1節で示したリサーチクエスションの第1点に、予想4は第2点に相当する。

第6.4節 結果

本節では、予想1・2・3に関する結果（第6.4.1節）と、予想4に関する結果（第6.4.2節）に分けて述べる。

第6.4.1節 予想1・2・3に関する結果

4つの評価項目（「日本語のレベル」、「丁寧さ」、「親しみやすさ」、「同僚としての望ましさ」）ごとに、2（参加者内要因: 「～ません」「～ないです」）×2（参加者内要因: 発音上群、発音下群）×3（参加者間要因: 2年群、10年群、対照群）の3要因混合分散分析を行った。分析にはRを、多重比較にはBonferroni法を用いた。また、調査協力者ごとに、対照群の「日本語のレベル」に関する評価結果を見たところ、発音上群・下群の分類と一致した（表6.3参照）ことから、筆者らによる分類の妥当性が示された。言語形式（予想1）、発音（予想2）、話者情報（予想3）の主効果に関する結果を図6.1~6.3に、交互作用の見られたものに関する単純主効果検定の結果を図6.4~6.7に示す。以後、図に関して、エラーバーは標準誤差を、「*」「**」「***」はそれぞれ「 $p<.05$ 」「 $p<.01$ 」「 $p<.001$ 」であることを示す。

表 6.3 対照群による「日本語のレベル」評価の平均値(標準偏差)

	R1 (40 歳台)		R3 (30 歳台)		R6 (20 歳台)	
	～ません	～ないです	～ません	～ないです	～ません	～ないです
発音上群	4.24(0.83)	4.00(0.95)	4.33(0.80)	4.48(0.51)	4.57(0.60)	4.38(0.74)
	R2 (40 歳台)		R4 (30 歳台)		R5 (30 歳台)	
	～ません	～ないです	～ません	～ないです	～ません	～ないです
発音下群	3.10(0.94)	3.43(0.98)	3.86(0.65)	3.48(0.87)	3.86(0.79)	3.67(0.91)

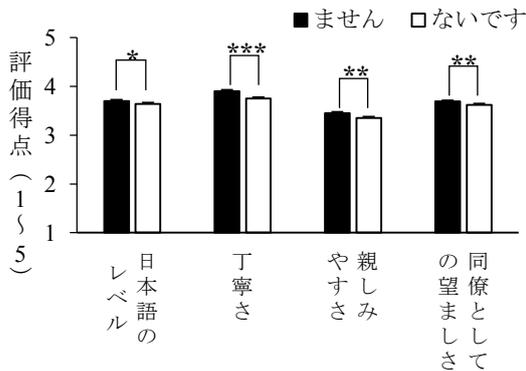


図 6.1 言語形式の主効果

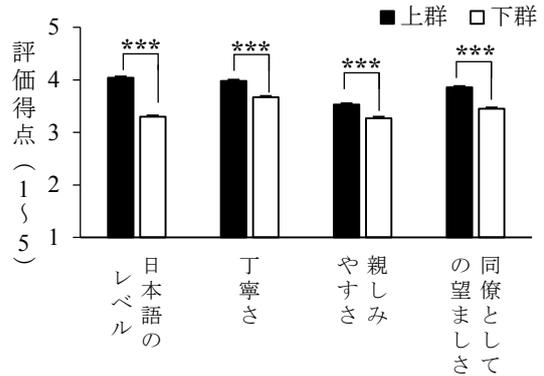


図 6.2 発音の主効果

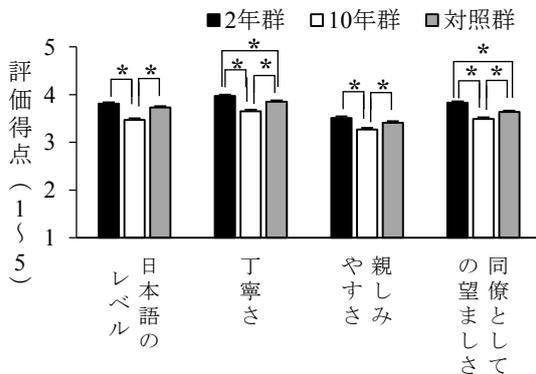


図 6.3 話者情報の主効果

分析の結果、予想 1 (「～ないです」発話は「～ません」発話より評価が高い) は必ずしも妥当しないことがわかった。「日本語のレベル」における発音下群, 「丁寧さ」における発音上群($p<.05$)および発音下群($p<.05$)では、予想に反し「～ません」発話が「～ないです」発話より有意に高い評価を得た。平均値レベルではあるが、「～ないです」発話の評価が「～ません」発話を上回ったのは、「日本語のレベル」における発音上群の 2 年群と 10 年群, 「丁寧さ」における発音上群の 10 年群, 「同僚としての望ましさ」における発音上群の 10 年群のみであった。予想 2 (発音上群は発音下群より評価が高い) はおおむね妥当することが明らかになった。「日本語のレベル」および「丁寧さ」, 「同僚としての望ましさ」にお

いては、発音上群の評価が発音下群の評価より有意に高く、「親しみやすさ」では平均値レベルで発音上群の評価が発音下群の評価より高かった。予想3(2年群・対照群は10年群より評価が高い)もおおむね妥当することがわかった。「親しみやすさ」と「同僚としての望ましさ」の発音下群では2年群・対照群が10年群より評価が有意に高く、発音上群では2年群が10年群・対照群より評価が有意に高かった。

以下、評価項目ごとに詳しく見ていく。「日本語のレベル」において、言語形式の主効果($F(1, 728)=6.04, p=.014$), 発音の主効果($F(1, 728)=527.30, p<.001$), 話者情報の主効果($F(2, 728)=17.56, p<.001$), 言語形式×発音の良さの交互作用($F(1, 728)=4.89, p=.027$)が有意であった。言語形式においては、「～ません」が「～ないです」より評価が高かった。発音においては、発音上群が発音下群より評価が高かった。話者情報に関する多重比較の結果、2年群と10年群の間($p<.05$)と、10年群と対照群の間($p<.05$)に有意な差が認められ、評価の関係は2年群=対照群>10年群であった。交互作用が認められたため単純主効果検定を行った結果、発音下群における「～ません」の評価が「～ないです」より有意に高かった($p<.01$)。他方「～ません」発話($p<.001$)および「～ないです」発話($p<.001$)における発音上群の評価が発音下群より有意に高かった。

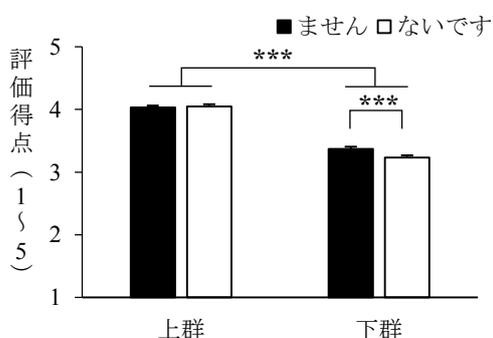


図 6.4 「日本語のレベル」の単純主効果

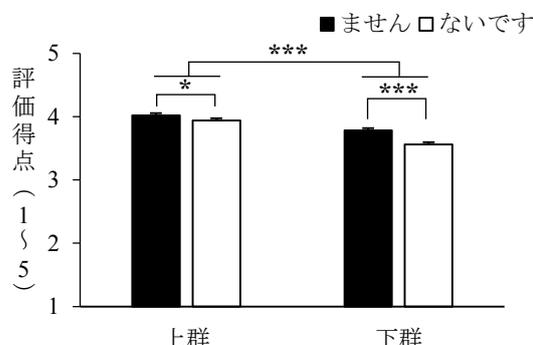


図 6.5 「丁寧さ」の単純主効果

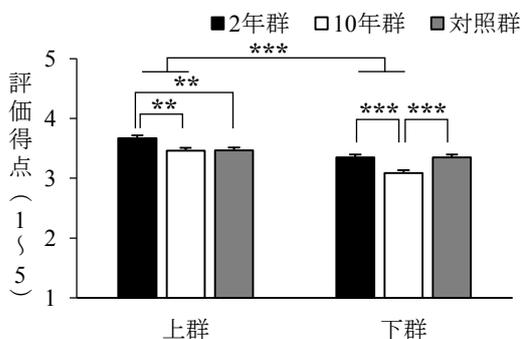


図 6.6 「親しみやすさ」の単純主効果

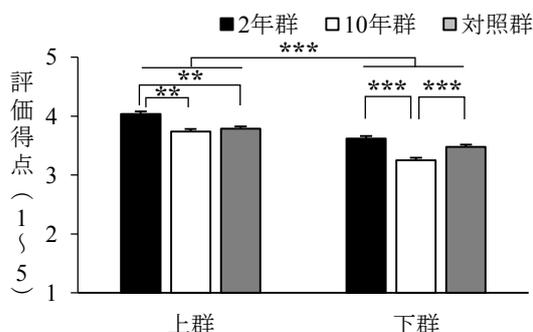


図 6.7 「同僚としての望ましさ」の単純主効果

「丁寧さ」において、言語形式の主効果($F(1, 729)=25.53, p<.001$)、発音の主効果($F(1, 729)=121.15, p<.001$)、話者情報の主効果($F(2, 729)=13.54, p<.001$)、言語形式×発音の良さの交互作用($F(1, 729)=4.36, p=.037$)、言語形式×発音×話者情報の交互作用($F(2, 729)=3.56, p=.029$)が有意であった。言語形式においては、「～ません」が「～ないです」より評価が高かった。発音においては、発音上群が発音下群より評価が高かった。話者情報に関する多重比較の結果、2年群と10年群の間($p<.05$)、10年群と対照群の間($p<.05$)、および2年群と対照群との間($p<.05$)に有意な差が認められ、評価の関係は2年群>対照群>10年群であった。単純主効果検定の結果、発音上群($p=0.02$)および発音下群($p<.001$)における「～ません」の評価が「～ないです」より有意に高かった。他方「～ません」発話($p<.001$)および「～ないです」発話($p<.001$)における発音上群の評価が発音下群の評価より有意に高かった。

「親しみやすさ」において、言語形式の主効果($F(1, 729)=8.57, p=.003$)、発音の主効果($F(1, 729)=48.56, p<.001$)、話者情報の主効果($F(2, 729)=7.41, p<.001$)、発音×話者情報の交互作用($F(2, 729)=4.11, p=.017$)が有意であった。言語形式においては、「～ません」が「～ないです」より評価が高かった。発音においては、発音上群が発音下群より評価が高かった。2年群と10年群の間($p<.05$)と、10年群と対照群の間($p<.05$)に有意な差が認められ、評価の関係は2年群=対照群>10年群であった。単純主効果検定を行った結果、2年群($p<.001$)および10年群($p<.001$)における発音上群の評価が発音下群より有意に高く、対照群でも有意傾向であった($p=.055$)。さらに、発音上群において2年群の評価が10年群($p=.001$)・対照群($p=.001$)より有意に高く、発音下群における10年群の評価が2年群($p<.001$)・対照群($p<.001$)より有意に低かった。

「同僚としての望ましさ」に関して、言語形式の主効果($F(1, 729)=6.70, p=.009$)、発音の主効果($F(1, 729)=174.49, p<.001$)、話者情報の主効果($F(2, 729)=16.95, p<.001$)、発音×話者情報の交互作用($F(2, 729)=3.06, p=.047$)が有意であった。言語形式においては、「～ません」が「～ないです」より評価が高かった。発音においては、発音上群が発音下群より評価が高かった。話者情報に関する多重比較の結果、2年群と10年群の間($p<.05$)、10年群と対照群の間($p<.05$)、および2年群と対照群との間($p<.05$)に有意な差が認められ、評価の関係は2年群>対照群>10年群であった。単純主効果検定を行った結果、また、発音上群において2年群の評価が10年群($p=.001$)・対照群($p=.001$)より有意に高く、発音下群における2年群($p<.001$)・対照群($p<.001$)の評価が10年群より有意に高かった。さらに、2年群($p<.001$)・

10年群($p<.001$)・対照群($p<.001$)において発音上群の評価が発音下群より有意に高かった。

この結果を細かく見てみると、「～ないです」発話が発音や話者情報の影響により低く評価されることがわかる。評価項目ごとの評価得点の平均値を図 6.8～6.11 に示す(言語形式の有意差は、話者情報ごとに求めた対応ありの t 検定に基づく)。

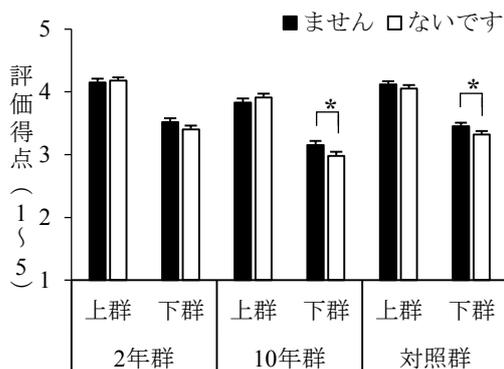


図 6.8 「日本語のレベル」の平均値

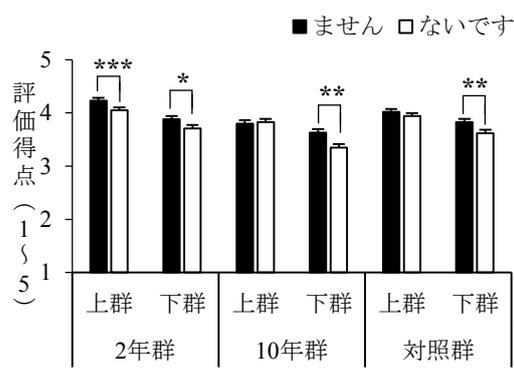


図 6.9 「丁寧さ」の平均値

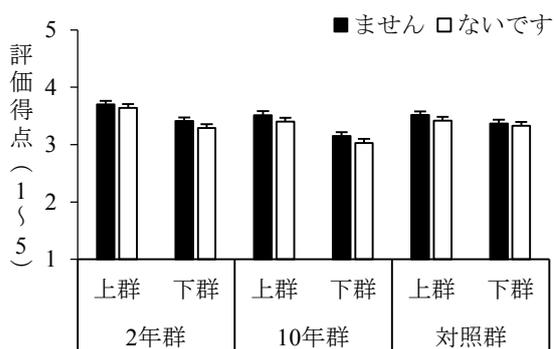


図 6.10 「親しみやすさ」の平均値

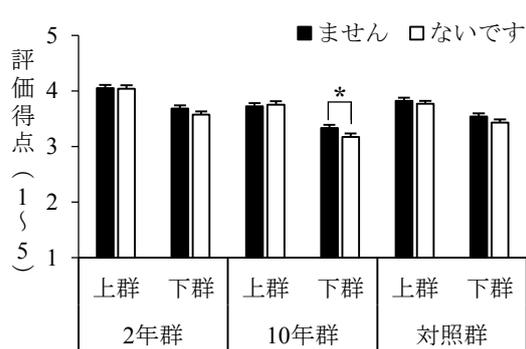


図 6.11 「同僚としての望ましさ」の平均値

まず発音上群に関して、「日本語のレベル」の2年群と10年群、「丁寧さ」の10年群、「同僚としての望ましさ」の10年群において、「～ないです」発話の評価が「～ません」発話の評価より、平均値レベルで高いことがわかる。「日本語のレベル」の「～ないです」の平均値が高かった2年群と10年群を比べてみると、2年群の「～ません」の「丁寧さ」評価が「～ないです」に比べ有意に高いのに対し、10年群では有意差はないが「～ないです」の「丁寧さ」評価がやや高い。

発音下群に関しても、「～ません」発話の評価がすべての評価項目において「～ないです」発話の評価より平均値レベルで高いことがわかる。また、「日本語のレベル」の10年群($p<.05$)および対照群($p<.05$),「丁寧さ」における2年群($p<.05$)・10年群($p<.01$)・対照群($p<.01$),

「同僚としての望ましさ」の10年群($p<.05$)では「～ません」発話が「～ないです」発話より有意に評価が高い。特に、2年群において「日本語のレベル」「同僚としての望ましさ」では両言語形式の評価に有意な差が認められないのに対し、10年群においては「～ません」の評価が「～ないです」より有意に高くなっている。

以上のことから、発音が上手で日本の日本企業での勤務年数が約2年と短い場合、および発音があまり上手でなく勤務年数が10年以上と長い場合、「～ないです」発話に比べ「～ません」発話のほうが「丁寧さ」の評価が高くなることがわかった。話し手がこのような日本語能力および日本での生活歴を持つキャラの場合、丁寧な発話として「～ません」が期待される可能性が示されたと言える。一方発音が上手で勤務年数が10年と長い場合、「～ないです」発話は「～ません」発話と同程度に評価されることがわかった。

第6.4.2節 予想4に関する結果

予想4（評価の高い／低い刺激音声には共通した音響的特徴が存在する）に関して、動詞否定丁寧形以外の発話部分や話者情報が印象評価に影響する可能性を最小限にするため、発話(4)（「入ってません」「入ってないです」）に関する対照群の評価のみを分析対象とした。分析の結果、予想4は「日本語のレベル」においてのみ妥当することがわかった。

ピッチ平均、単音、発話時間、単音の不自然さ、リズムの不自然さ、アクセント・イントネーションの不自然さについて、Praatを用いて、調査協力者ごとに音声情報をまとめた（表6.4参照）。「せ」と「ん」の間にモーラが挿入された発話は観察されなかった。アクセント・イントネーションの不自然さに関しては、R2, R4, R5の発話に、「は(H)いっ(H)て(H)ま(H)せ(L)ん(L)」や、「は(H)いっ(H)て(H)な(H)い(L)で(L)す(L)」といった不自然さが観察されたため、それぞれ1回ずつカウントした。例として、アクセント・イントネーションに不自然さが見られたR2による発話の音声波形を図6.12, 6.13に示す。

発話(4)の対照群の評価結果に関して、 t 検定を行った結果、どの評価項目においても両言語形式の間に有意な差は認められなかった（日本語のレベル： $t(125)=-0.69, p=.494$, 丁寧さ： $t(125)=0.38, p=.707$, 親しみやすさ： $t(125)=0.09, p=.929$, 同僚としての望ましさ： $t(125)=-0.37, p=.710$ ）。そのため、両形式を分けずに、1つにまとめた対照群の評価得点と、表6.3の音声情報との相関係数を求めた（表6.5参照）。単音およびリズムに不自然さは認められなかったため、相関係数は求めていない。

表 6.4 調査協力者ごとの発話(4)に関する音声情報

	発音上群						発音下群					
	R1		R4		R6		R2		R3		R5	
	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N
ピッチ平均 (Hz)	217.0	240.0	205.0	213.4	257.6	248.1	220.6	256.2	193.1	197.1	221.7	244.3
音域 (Hz)	234.2	309.6	217.0	118.2	163.0	181.9	179.7	257.2	124.3	199.4	136.0	229.9
発話時間 (sec)	0.78	0.95	0.99	1.13	0.85	0.94	0.95	1.13	0.93	1.09	1.09	1.11
単音 (回)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
リズム (回)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
アクセント・イントネーション (回)	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	1	1

※ 「～ません」発話を「M」, 「～ないです」発話を「N」, 単音の不自然さを「単音」, リズムの不自然さを「リズム」, アクセント・イントネーションの不自然さを「アクセント・イントネーション」と略記する。

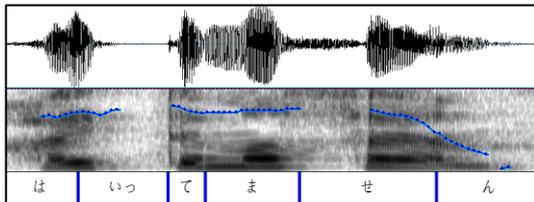


図 6.12 R2の「入ってません」発話の音声波形

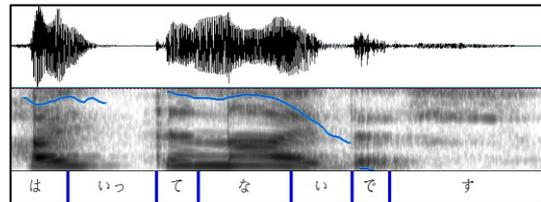


図 6.13 R2の「入ってないです」発話の音声波形

表 6.5 発話(4)評価と音声情報の相関係数行列

	丁寧さ	親しみ	望ましさ	ピッチ平均	音域	発話時間	アクセント・イントネーション
日本語のレベル	0.45	0.12	0.35	0.26	0.07	-0.59*	-0.77**
丁寧さ		0.61	0.92***	0.14	-0.14	-0.46	-0.42
親しみやすさ			0.81**	0.26	-0.25	0.06	-0.09
望ましさ				0.19	-0.12	-0.20	-0.32
ピッチ平均					0.39	-0.02	-0.23
音域						-0.09	-0.34
発話時間							0.56

表 6.6 発話(4)評価と音声情報の偏相関係数

	丁寧さ	親しみ	望ましさ	ピッチ平均	音域	発話時間	アクセント・イントネーション
日本語のレベル	-0.27	-0.33	0.31	0.40	-0.47	-0.36	-0.68
丁寧さ		-0.64	0.93**	0.29	-0.46	-0.62	-0.17
親しみやすさ			0.83*	0.46	-0.54	-0.28	-0.17
望ましさ				-0.34	0.48	0.53	0.14
ピッチ平均					0.57	0.24	0.22
音域						-0.26	-0.50
発話時間							0.03

※表 6.5, 表 6.6 ともに, 「*」「**」「***」はそれぞれ「 $p < 0.05$ 」「 $p < 0.01$ 」「 $p < 0.001$ 」であることを示す。また, 「親しみやすさ」を「親しみ」, 「同僚としての望ましさ」を「望ましさ」, 「アクセント・イントネーションの不自然さ」を「アクセント・イントネーション」と略記する。

分析の結果、「日本語のレベル」と発話時間、アクセント・イントネーションの不自然さの間に強い負の相関が認められた。音声情報項目間および評価項目間に強い相関が見られたため、これらが相互に影響を与えあった見せ掛けの相関である可能性を考慮し、偏相関係数も求めた（表 6.6 参照）。その結果、有意ではないものの、「日本語のレベル」とアクセント・イントネーションの不自然さとの間および「丁寧さ」と発話時間との間に、高い負の偏相関が見られた。相関係数および偏相関係数から、「日本語のレベル」とアクセント・イントネーションの不自然さとの間に高い負の相関が認められたと言える。では、アクセント・イントネーションの不自然さの少ない発話は、「丁寧さ」「親しみやすさ」「同僚としての望ましさ」の評価も高いのであろうか。また、発話時間に関しても「日本語のレベル」や「丁寧さ」と負の相関があると言えるのであろうか。

第 6.4.1 節で述べたとおり、発話(1)~(4)に関する予想 2（発音上群は発音下群より評価が高い）はおおむね妥当した。この結果と、本小節で観察された「日本語のレベル」とアクセント・イントネーションの不自然さの間の負の相関を総合して考えると、アクセント・イントネーションの不自然さが少なければ発音が上手であると評価され、発音が上手ならば「丁寧さ」や「親しみやすさ」「同僚としての望ましさ」の評価が高いということになる。

しかしながら、アクセント・イントネーションの不自然さが認められなかった発音上群の R1 の評価を見ると、そのように明言することは難しいことがわかる。図 6.14 は、R1 の発話(4)の平均値を評価項目ごとに示したものである（有意水準は t 検定の結果による）。R1 の「入ってません」発話は、「入ってないです」同様、「日本語のレベル」では平均値レベルで高い評価を受けているにもかかわらず、「丁寧さ」の評価は平均値レベルで、「入ってません」が「入ってないです」より低い。また「親しみやすさ」($p<.05$)、「同僚としての望

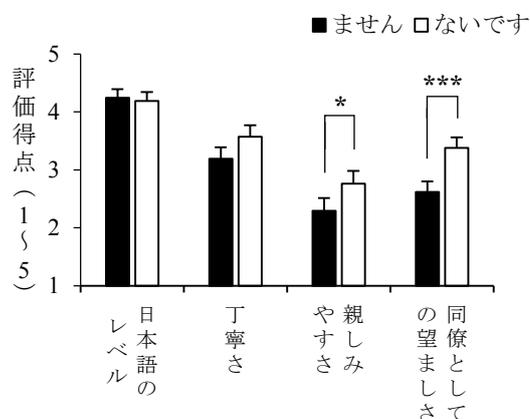


図 6.14 R1 の発話(4)の平均値

ましさ」($p<.001$)の評価では、「入ってません」が「入ってないです」より有意に低い。R1の「入ってません」発話は、自身の「入ってないです」発話やほかの調査協力者の「入ってません」発話に比べて特に発話時間が短い(前述表 6.3 参照)。発話速度については、評価者が早すぎるまたは遅すぎると判断する場合、ポライトネス評価が低くなる(Ofuka *et al.* 2000)ことが先行研究で指摘されており、この点が評価に影響を与えた可能性がある。以上のことから、アクセント・イントネーションの自然さは「日本語のレベル」、つまり発音の上手さの評価には影響するが、それがポライトネスや「同僚としての望ましさ」につながるものであると明言することはできない。また、発話時間の長さが「日本語のレベル」「丁寧さ」と負の相関関係にあるのかに関しては、さらなる調査が必要である。

第 6.5 節 考察

本節では、予想 1~4 の結果について順に考察し、その後総合的に考察を行う。本調査の結果、予想 1(「~ないです」発話は「~ません」発話より評価が高い)は必ずしも妥当しないことがわかった。本研究では、先行研究で日本語母語話者の間で「~ないです」の使用が「~ません」より多いとされる文を主に用いたが、4つの評価項目において、ほとんどの場合「~ません」発話が「~ないです」発話より高い評価を得た。宿利・大内(2018)では、文字言語色の強い刺激音声において、母語話者および学習者による「~ないです」発話に比べ「~ません」発話の評価が高かったことが報告されている。自然発話に近い刺激音声を用いた本研究においても、母語話者の使用が多い言語形式だからといって、学習者の発話の評価が高くなるというわけではないことが示されたと言える。

予想 2(発音上群は発音下群より評価が高い)について、「日本語のレベル」「丁寧さ」「同僚としての望ましさ」および「親しみやすさ」の対照群以外において妥当することがわかった。このことから、予想 2はおおむね妥当と言える。初級学習者による文法・発音等の不自然さは日本語母語話者に甘く評価されるという先行研究もあるが、同じ職場で働く同僚で、ある程度日本での仕事経験があるとわかっている場合、発音が上手なほうがポライトネス(「丁寧さ」「親しみやすさ」と「同僚としての望ましさ」)の評価が高くなることが本調査により明らかとなった。

予想 3(2年群・対照群は 10年群より評価が高い)は、おおむね妥当することがわかった。「親しみやすさ」と「同僚としての望ましさ」の発音下群では 2年群・対照群が 10年群より評価が有意に高く、発音上群では 2年群が 10年群・対照群より評価が有意に高かった。

これらの結果を端的に述べると、言語形式「～ないです」の使用、発音の悪さ、日本の日本企業での勤務年数が長いという話者情報という3つの要素により、発話の印象が悪くなるということになる。そして、「～ないです」発話は発音や話者情報の影響によりさらに低く評価される。すなわち、発音が上手で勤務年数が短い場合、および発音があまり上手でなく勤務年数が長い場合、「～ないです」発話の評価は低くなるということである。一方、発音が上手で勤務年数が長い場合、「～ないです」発話は「～ません」同様、またはそれ以上に高く評価された。これは、先行研究で指摘された、上級学習者の発話は母語話者の発話と同様の基準で判断され、初級学習者はそれらと異なる基準で判断されるという指摘(岡田・杉本 2001)を支持する結果と考えられる。すなわち、発音や勤務年数から話者が「外国人らしい外国人」であると判断された場合は「～ません」発話が期待され、反対に発音や勤務年数から話者が「日本人に近い外国人」であると判断された場合は「～ません」「～ないです」どちらの発話でも受け入れられることを意味すると考えられる。

予想 4 (評価の高い/低い刺激音声には共通した音響的特徴が存在する) に関して、アクセント・イントネーションの不自然さと「日本語のレベル」の評価の間には負の相関が認められた。アクセント・イントネーションを自然なものにすれば、「日本語のレベル」が高く、発音が上手な発話として評価されるであろう。しかしながら、アクセント・イントネーションに不自然さの少ない発話が、必ずしもポライトネスや「同僚としての望ましさ」において高く評価されるというわけではない。第 6.4.2 節で取り上げた発音上群の R1 による「～ません」発話は、「日本語のレベル」で特に高く評価されたにもかかわらず、ポライトネスや「同僚としての望ましさ」では低く評価された。この原因が過剰な発話時間の短さにあるのか、本研究では考察しなかった R1 の声質によるものなのか、本調査の結果から明らかにすることはできない。いずれにせよ、アクセント・イントネーションの自然さは「日本語のレベル」、すなわち発音の上手さの評価には影響するが、それがポライトネスや「同僚としての望ましさ」の高評価につながるものであると明言することはできない。

以上の結果を踏まえ、「～ないです」発話に関するポライトネス評価のメカニズムをまとめると、図 6.15 のようになる。評価者であると同時にキャラ化する表現者でもある日本語母語話者は、話者であると同時にキャラ化される被表現者でもある日本語学習者を、発音の上手さや話者情報といった材料によって「変な外国人」キャラ、「日本人に近い外国人」キャラにキャラ化する。「変な外国人」キャラにキャラ化された日本語学習者による「～ないです」発話は、非キャラ行動と見なされ、評価者にインポライトな言動と認識される。

一方「日本人に近い外国人」キャラによる「～ないです」発話はキャラ行動であり、キャラ維持が認識され、インポライトとはならず許容される。

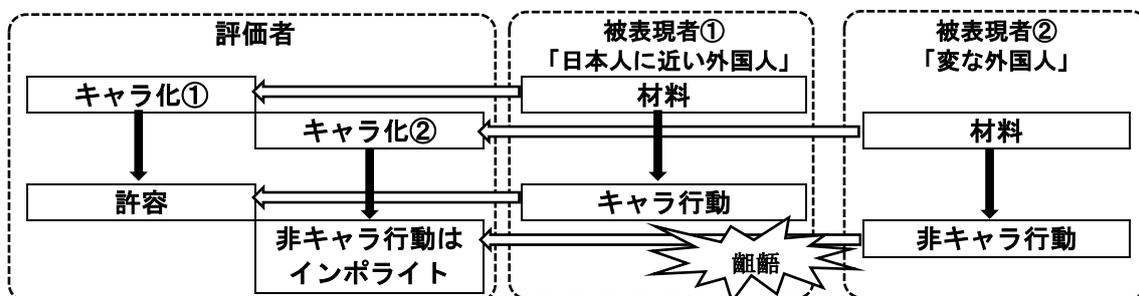


図 6.15 キャラ行動/非キャラ行動としての「～ないです」をめぐるポライトネス評価のメカニズム

それでは、日本語教育は話者である学習者に、音声言語としての「～ません」と「～ないです」の使い分け、特に「～ないです」の使用についてどのように指導すればよいのであろうか。本調査の結果から、音声言語として母語話者による使用が多いからといって、学習者に「～ないです」の言語形式のみを教えるだけでは不十分であることはわかった。アクセント・イントネーションが不自然でない発音を教えることはもちろんだが、それでもポライトネス（「丁寧さ」「親しみやすさ」）や「同僚としての望ましさ」の高評価には繋がらない。最終的には、話者がどのようなキャラかということが評価を左右すると言えるのではないだろうか。

ネウストプニー（1982）は、日本人による外国人の態度を「ハネムーン」の第一期、「拒絶」の第二期、「受け入れ」の第三期の3つに分けて論じている。第一期では、片言の日本語を話す「弱者としての外国人」に対して寛大な日本人が、第二期になると態度を変える。第二期では、ある程度流暢に日本語を話す反面、非言語面での不自然さや位相の側面からふさわしくないと判断される言動を行う外国人が「変な外人」として拒絶されるようになる。第三期では、言語面・非言語面どちらにおいても自然に、日本語でコミュニケーションが取れるようになった外国人が「日本人に近い外国人」として受け入れられるようになるという。

ネウストプニーの指摘に従えば、第一期では、「外国人」という属性から連想される言動、すなわち外国人ステレオタイプどおりの言動が観察されるため、日本人は話者とその発話を受容しやすく、時に甘く評価する。この現象は、本研究における発音下群の両言語形式の発話に対する2年群の評価や、岡田・杉本（2001）における初級学習者に相当すると考

えられる。第二期では、外国人ステレオタイプとの齟齬から違和感や不快感が抱かれる。これは本研究における発音上群の「～ないです」発話に対する2年群の評価、および発音下群の「～ないです」発話に対する10年群の評価に相当すると考えられる。第三期では、外国人ステレオタイプからある程度自由になり、母語話者同様、使用する言語形式は個性の1つと考えられるようになる。本研究においては、発音上群の発話に対する10年群の評価に相当すると考えられる。岡田・杉本（2001）における上級学習者は第二期と第三期に相当し、そのうち第二期で外国人ステレオタイプとの齟齬が生じた場合、「～ないです」発話は厳しく評価されることになる。日本人による外国人への態度とキャラ行動としての動詞否定丁寧形の発話を図6.16に示す。日本語教育は、学習者に「～ないです」の言語形式と適切な発音を教えるだけでなく、このような日本語母語話者の評価も教えるべきである。このような理不尽な評価の現実とともに2つの言語形式が提示されることにより、学習者自身がどちらを使用するかを選択することにつながると考えるからである。

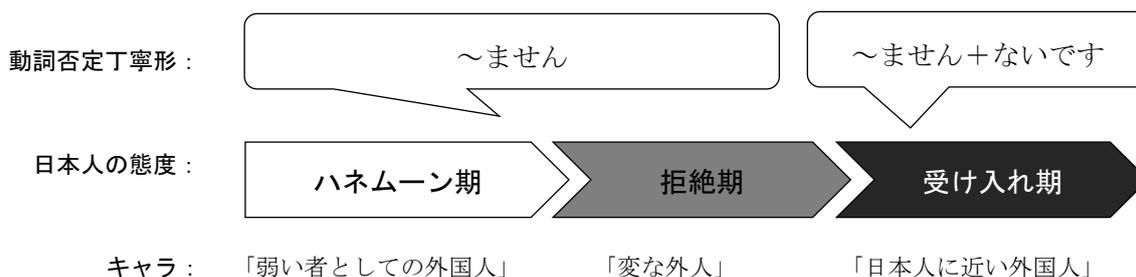


図 6.16 日本人による外国人への態度とキャラ行動としての動詞否定丁寧形発話

ただし、本章で扱った「～ません」と「～ないです」は、従来役割語研究で扱われてきたような非母語話者のキャラのことば遣いほど、キャラとの結びつきは強くないと考えられる。たとえば、非母語話者による日本語役割語として、前述の「西洋人」キャラによる「～ませーん（依田 2011）」や、「アルヨことば」と呼ばれる「偽中国人」キャラの「～アルヨ（金水 2003）」などが挙げられる。どちらもフィクション作品に見られる役割語であり、後者は「偽」と付くように、そのように話す中国人は実在しないが、外国人が日本語を話すという点は本章の考察対象と一致する。多くの日本語母語話者が、「～アルヨ」と聞けば「偽中国人」キャラを連想し、チャイナ服にドジョウ髭の「偽中国人」キャラを見れば「～アルヨ」ということば遣いを連想する（金水 2003; 鄭 2005）する。このことから、「アルヨことば」は役割語度が高く、「偽中国人」キャラとの結びつきが強いと判断で

きる。「西洋人」キャラの「～ませーん」はフィクション作品ではよく観察されるが、日本語母語話者対象の意識調査などによる実証研究はまだ行われていない。さらに、本章の考察対象である「～ないです」は、「日本人に近い外国人」キャラや「勤務年数が長く発音の上手な外国人」キャラが発話すると非キャラ行動となり、キャラ逸脱につながるが、必ずしも「～ないです」発話から「日本人に近い外国人」キャラを連想するというわけではない。「偽中国人」キャラと「アルヨことば」の関係に比べると、「西洋人」キャラの「～ませーん」は役割語度が低く、「変な外国人」キャラの非キャラ行動である「～ないです」はさらに役割語度が低い。

このような考察は、日本語学習者に日本語社会のステレオタイプを刷り込み、「同化」を進める日本語教育を奨励することにはつながらない。発音の上手さや日本での生活歴といった材料は、相対的かつ文脈依存的であり、何年までは「～ません」が良い、などと明確な基準を提示することは困難である。本研究の主張は、発音が上手でも2年という短い勤務年数の非母語話者や、発音があまり上手でなく10年以上と長い期間勤務している非母語話者は、「～ません」を使うべきであり、「～ないです」はふさわしくない」と母語話者に認識されるという理不尽な事実である。このことは、日本語母語話者や「日本人に近い外国人」キャラの学習者には、話者間の関係性や場面などを踏まえ、さまざまな言語変種の中から「～ません」や「～ないです」などの言語形式、または他の表現を意図的・非意図的に選び使用する自由がある一方、「変な外人」キャラにはそのような選択の自由はないという可能性を示唆する。少なくとも、「～ません」のみを扱っている日本語教育は、教育課程自体がこのようなキャラ化とキャラ行動の構造を再生産していると言えるであろう。

第6.6節 まとめ

本章では、日本語学習者による「～ないです」発話はどのように評価されるのか、ポライトネス評価と発話の音響的特徴の関係はどのようなものか、という2つの疑問を明らかにするため、発話の印象として「日本語のレベル」、「丁寧さ」、「親しみやすさ」、「同僚としての望ましさ」という4つの評価項目を設定し、ロシアの学習者による同一の音声刺激に関して母語話者を対象に印象評定調査を行った。その結果、発音が上手で日本の日本企業での勤務年数が短い場合、および発音があまり上手でなく勤務年数が長い場合、「～ないです」発話がインポライトと評価されること、発音の上手さはアクセント・イントネーションの自然さと関連しているが、アクセント・イントネーションが自然ならば必ずしもポ

ライトネスの評価が高くなるわけではないことが明らかになった。この結果は、第5章で残された課題、すなわち日本語社会における推論パターンや社会規範を習得し、日本語母語話者並みの日本語能力を身につければ、ポライトネス評価は高くなるのかという疑問に対して、必ずしもそうはならないという回答を示している。

ただし、本章の調査には少なくとも以下2点の問題がある。1点目は、動詞否定丁寧形のみを考察対象としている点である。本章によって、非キャラ行動とポライトネス評価の関係を捉えきることはできない。役割語の研究はフィクション作品における使用の実体調査研究や他言語との対照言語研究に広がりを見せているが、今後は話者である学習者の人物評価を左右するポライトネスとのかかわりに関してもさらなる研究が望まれる。

2点目は、発話時間とポライトネス評価の関連についてである。第6.4.2節で取り上げた発音上群のR1による「～ません」発話は、「日本語のレベル」で特に高く評価されていたが、ポライトネス（「丁寧さ」「親しみやすさ」）や「同僚としての望ましさ」では低く評価された。その原因が発話時間にあるのか、別の原因が存在するのか、本章の調査で明らかにすることはできなかった。今後、発話時間とポライトネス評価の関係について、追調査を行い、日本語教育に生かせる知見を増やすべきであろう。

第7章 キャラ化と非キャラ行動のポライトネス評価（個別研究3）

本章では、第4.3節で述べた可能性、すなわちキャラ化と非キャラ行動がインポライトにつながるという可能性について、日本語母語話者による合コン場面の談話データをもとに検証する。さらに、第5章で問題となった、キャラ化とキャラ行動の関係（キャラ化と非キャラ行動が同時に起こった場合ポライトネス評価はどうなるのか）についても観察する。合コン場面の談話を取り上げるのは、初対面・非初対面の人たちが、今後の関係の発展性を探りながら、一定時間雑談をして、親交を深めていく様子、また自然に気遣いを示す様子が観察できると考えたためである。特に、2名による会話に比べ、会話参加者が3名以上の場合、被表現者と他者との差別化のため、ラベル付けによるキャラ化が行われると期待できる。第7.1節では、研究の背景と目的を、第7.2節ではラベル付けによるキャラ化と、冗談発話の先行研究を整理しその問題点を述べる。第7.3節では、使用する談話データについて説明する。第7.4節では、会話参加者のキャラによってキャラ化と非キャラ行動のポライトネス評価が異なるという現象を取り上げ、観察する。第7.5節で第7.4節の観察について考察し、第7.6節ではまとめを述べる。

第7.1節 研究の背景と目的

私たちは、状況や関係性によっては攻撃ともとられる内容のことを、親しい相手には冗談発話として発することがたびたびある。たとえば、ヒゲの濃い友人を「ヒゲ」キャラとして扱い、ヒゲの濃さをネタにからかうことで笑いをとることがある（瀬沼 2008）が、これは友人に恥をかかせようという攻撃ではなく、あくまで冗談発話とみなされる。B&Lのポライトネス理論において、冗談は「相互の背景知識や価値観に基づ」くポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとされる(B&L 1978/1987 田中他訳: 170–171)。連帯を強調するメカニズムとしての慣用化（儀礼化）された侮辱や、冗談を言うという手法は、親しい間柄においてはフェイスを侵害する恐れが少ないという予想をもとに行われると考えられている(B&L 1978/1987: 328)。

ラベル付けによるキャラ化も、この B&L のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての側面から説明される。すなわち、慣用化された侮辱や冗談としてのキャラ化により、キャラ化される被表現者に対する理解感や連帯感を示すことができ、キャラ化される被表現者も、キャラ化する表現者や集団からの被理解感が高まり、集団における居場所が確立

できるという利点があるという説明である（千鳥・村上 2016）。

その一方で、キャラ化には、被表現者がキャラ行動を期待されたり強要されたりするという行動の制限が生じるといった問題点の存在も指摘されている（ibid）。第 4.1 節でも挙げたラベル付けによるキャラ化の例をここでもう一度示す。

(7.1) いじられキャラに疲れました。(4.2)再掲

私はよく友達にいじられますが M ではありません。最初はいじられキャラというほどでもなかったのですが、私がぼっちゃりしているので（原文ママ）、別のクラスの友達が私のことを『ぶーちゃん（由来は豚から来ています）』と呼び、それを聞いていた私と同じクラスの友達 2 人がよく私をいじってくるようになりました。[中略] こういうときは最初は適当に笑っていたけどもうヒドすぎて愛想笑いさえ出来なくなりました。[後略]

[Yahoo! JAPAN 知恵袋, 2010/09/16, https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1247095962, 2019 年 01 月 02 日]

(7.1)では、まず「ぼっちゃりしている」という身体的性質の材料から「ぶーちゃん」キャラへのキャラ化が起こり、徐々にからかいの対象である「いじられ」キャラにキャラ化が進んで行く。「最初は適当に笑っていた」被表現者は、最終的にこのようなキャラ化に対してはっきりと不満を持つに至る。

キャラ化された結果、被表現者にとって利点よりも不利益のほうが強く生じているとみなされる場合、キャラ化は被表現者にも周りの第三者にもインポライトと評価されると考えられる。特にラベル付けによるキャラ化には、(7.1)に示した「いじられ」キャラや、「無責任」キャラ、「ゲイ」キャラといったあからさまな侮辱、攻撃とも取れるものが少なくない。このような「マイナスのレッテル（瀬沼 2006: 68）」のラベル付けによるキャラ化は、インポライトと判断される可能性が高いのではないだろうか。さらに、キャラ化された被表現者が、このようなキャラ化を冗談の枠を越え真剣に拒否した場合、集団の和を乱すインポライトな非キャラ行動と認識されるのではないだろうか。

これらの疑問を背景に、本章は、キャラ化された被表現者がそのキャラ化を拒否した場合、キャラ化がインポライトと判断されるのか、それとも被表現者の拒否が非キャラ行動としてインポライトと判断されるのかという、インポライト評価のメカニズムを探ること

を目的とする。そのため、日本語母語話者による合コン場面の談話データを分析、検証する。被表現者に拒否されたラベル付けによるキャラ化の観察からキャラ化のポライトネス評価、冗談発話の観察からキャラ行動および非キャラ行動のポライトネス評価を考察する。また、キャラ化の材料として、話題導入、冗談発話、キャラ化を観察する。キャラ化の材料の観察に話題導入を加えるのは、話題導入は冗談発話同様、コミュニケーション研究において発話の主導権の要素とされている（たとえば (Maltz &orker 1982; Tannen 1990 他) ためである。だれが話題をコントロールし会話の主導権を握っているかということから、会話参加者間のキャラの根拠を捉えることができると考えた。

あらかじめ結論を述べると、キャラ化と非キャラ行動のポライトネス評価は、表現者と被表現者のどちらが会話の主導権を握るキャラか、ということによる。本章では、会話の主導権を強く握っているわけではないキャラが、会話の主導権を強く握るキャラに対してキャラ化を行う場合、キャラ化された被表現者の真剣な拒否という非キャラ行動を引き起こし、生じた齟齬が冗談の枠を越え、結果的にキャラ化がインポライト評価を受けるといふ事例が観察された。

第 7.2 節 先行研究とその問題点

本節では、ラベル付けによるキャラ化 (第 7.2.1 節)、および話題導入と冗談発話 (第 7.2.2 節) のポライトネスに関する先行研究を概観し、その問題点を指摘する。

第 7.2.1 節 ラベル付けによるキャラ化

キャラ研究において、ラベル付けによるキャラ化を取り上げるものは少なくないが、その中でも瀬沼 (2006, 2007) は会話の実例を挙げ、その特徴を論じている。瀬沼 (2006) は、若年層日本語母語話者を対象としたフィールドワークから、「無責任」キャラ、「いじられ」キャラ、「ゲイ」キャラといった「マイナスのレッテル (ibid: 68)」を貼られ、キャラ化された被表現者たちが「笑いが取れておいしー (ibid)」などと言って、キャラ化を受容している様子を報告している。瀬沼はキャラとポライトネス評価については論じていないが、瀬沼の指摘を本研究に即して換言すれば、「マイナスのレッテル」のラベル付けによりキャラ化された被表現者たちは、このキャラ化を攻撃ではなく冗談として捉え、キャラ化した表現者や周囲の第三者を笑わせることができるなら、インポライトではないと考えているということである。

冗談発話としてのキャラ化をインポライトとみなさないというポライトネス評価は、キャラ化される被表現者だけでなく、キャラ化する表現者によっても行われている。第 4.1 節でも挙げたラベル付けによるキャラ化の例をここでもう一度示す。

(7.2) 男女 2 人 A: 女性, B: 男性, 大学生くらいで私服を着ていた ((4.1)再掲)

01 A: (引かないと開かないドアを何度も押していた)

02 B: あれーひょっとして天然?

03 A: (笑って) そんなことないよーたまたまだよー

04 B: さっきも何もないところで、つまずいてたでしょ?

05 A: 本当, 天然じゃないんだって (笑い)

[瀬沼 2006: 66]

(7.2)では、被表現者の「引いて開けるドアを何度も押す」という行動的性質の材料により、表現者が被表現者を、失敗や勘違いの多いキャラである「天然 (ボケ)」キャラとしてキャラ化している。キャラ化された被表現者は「そんなことないよー (3 行目)」「本当, 天然じゃないんだって (5 行目)」という発話で「天然 (ボケ)」キャラではないとキャラ化を拒否している。この拒否が冗談発話のマーカである笑い (大津 2014) を伴って行われているため、この「キャラ化→拒否」というやりとりから、表現者は自身が行ったキャラ化がインポライト評価を受けていないと判断し、それ以降もキャラ化することが可能になると考えられる。第 7.1 節で示した(7.1)の例でも、「ぶーちゃん」キャラ化や「いじられ」キャラ化が複数の表現者から繰り返し行われるが、これは被表現者が「最初は適当に笑っていた」ことがキャラ化の受容として、すなわちインポライト評価を受けていないことの表れとして、表現者に伝わったためと考えられる。また、被表現者がキャラ化に興味を示さず、受容も拒否もしない、無関心の態度をとるという場合もある (千鳥・村上 2016)。これも、真剣な拒否ではないため、消極的受容と受けとられる可能性がある。

先行研究の問題は、キャラ化の受容と拒否といった被表現者の反応と、周囲のポライトネス評価の関係についてほとんど言及されてこなかったということである。前述のとおり、ラベル付けによるキャラ化は、被表現者のポジティブ・フェイスを補償するポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとなるだけでなく、被表現者のネガティブ・フェイスを侵害する FTA となる行為でもある。特にラベル付けによるキャラ化は、キャラ化する表現者が被表

現者を何者と捉えているかを明言する行為であるだけに、FTA となる場合その深刻度は高いと予想される。だが、これまでのキャラ研究において、そもそも表現者と被表現者がどのようなキャラの場合キャラ化が許容されたりインポライトと判断されたりするのか、というポライトネス評価が問題にされたことはない。そこで本章では、ラベル付けによるキャラ化がインポライトと評価される現象について、キャラ化が拒否された事例の観察を通して、従来ポライトネス研究で指摘されてきた状況や話者間の人間関係 (B&L 1978/1987)、性別 (Ide 2003)では説明できず、キャラにより説明できるということを示す。

第 7.2.2 節 話題導入と冗談発話

これまでのコミュニケーション研究において、キャラと冗談発話や話題導入の関係は、主に性別により説明されてきた。話題を決定する、多く話す、話を遮る、冗談を言うといった発話の主導権は女性に比べ男性が握る傾向にあること、一方女性は、相づちや質問で相手の発話を促したり、相手の話を聞いて笑ったりして、相手に同調する支持的な言動が多い (Maltz & Borker 1982; 江原・好井・山崎 1984; Tannen 1990 他) といったコミュニケーションにかかわる傾向の性差が報告されている。さらに、男性は女性に比べ笑わせようとする欲求が強く (上野 2003; 瀬沼 2015; 伊藤 2016)、女性も「ユーモアがある」男性を好ましく思う傾向にあるとされる (上野 2003: 122-123)。それとは対照的に、女性は一般的に冗談を言うことができず、言える場合は「はみだし女のしるし」と考えられるという指摘もある (Lakoff 1975)。同性同士では冗談を言う女性が、男性が同席すると冗談を言わなくなることも報告されている (Tannen 1990)。このような指摘は日本語の談話研究にも見られる。「男性が笑わせ、女性が笑う」という認識が一般的であること (上野 2003; 大島 2006) や、男性上位者は自己に関する話題導入が多いのに対し、女性上位者は聞き手に関する話題導入が多く他者志向的であることが報告されており、このような傾向を社会規範の現れと捉える研究もある (三牧 2013)。

これらの先行研究は、自己に関する話題導入や冗談発話が、男性キャラのキャラ行動であると同時に女性キャラの非キャラ行動であること、他者支持的・同調的でない行動は女性キャラの非キャラ行動であり、そのような行動をとる女性は逸脱的存在と捉えられる可能性があることを示唆する。

これに対し、発話の主導権が性別では説明できないことを主張する先行研究は既に存在する。たとえば宇佐美他 (2014) は、35 歳前後の女性をベース話者とし、同性・異性、10

歳程度年上・年下・同等という対話者を組み合わせた初対面場面の会話データを用い、話題導入および話題展開の傾向を分析している。この報告によると、上位者による聞き手志向的話題導入および話題展開の頻度は高いが、性別による大きな違いは見られないという。女性を対象とした昨今の恋愛指南書や会話術に関する書籍には、「笑わせるテクニック」の重要性を指摘するものも少なくない（たとえば難波 2015）。また、私たちは男性の前で冗談を披露する女性や、自己に関する話題導入をする上位者の女性が少なからず存在することを経験的に知っているし、いつでも彼女たちを逸脱的存在として、その言動を非キャラ行動として認識しているわけではないだろう。

先行研究の問題は、女性による話題導入や冗談発話を単純に数値から捉え、その傾向を女性全般に見られるパタンのように紹介してしまっている点である。だれがどのように発話の主導権を握り維持するのかということは、性別だけでは説明できない。また、宇佐美他（2014）や B&L（1978/1987）が主張するように、状況や話者の人間関係で説明できる場合もあるであろうが、それでも不十分である。本章では、いままでひとくくりにされてきた女性のキャラの多様性を示すとともに、発話の主導権が状況や話者間の人間関係、性別だけでは説明しきれないことを示す。

第 7.3 節 談話データ

本節では、分析に用いるデータについて、合コン談話の収録（第 7.3.1 節）、談話データの転写方法（第 7.3.2 節）、本研究における話題導入（第 7.3.3 節）、冗談発話（第 7.3.4 節）、ラベル付けによるキャラ化（第 7.3.5 節）の順に述べる。

第 7.3.1 節 談話の収録

2017 年 7 月に、大阪市にある居酒屋の個室で、日本語母語話者の男性 3 名（M1, M2, M3）、女性 3 名（F1, F2, F3）による合コン場面を、IC レコーダー 2 台とビデオカメラ 1 台を用いて約 150 分収録した。参加者は、「アラサー（30 歳前後）対象の合コン調査収録する」という名目で調査者の知人を介し集めた。男性 M1 は M2 および M3 と交友があるが、M2 と M3 は初対面である。女性は F1, F2, F3 の 3 名すべてが中学時代からの友人である。男性 3 名と女性 3 名が会うのは収録日が初めてである。合コン参加者の年齢、出身地、交友関係に関する情報を表 7.1 に、収録会場での参加者の配置を図 7.1 に示す。

表 7.1 合コン参加者に関する情報

	男性参加者			女性参加者		
	M1	M2	M3	F1	F2	F3
年齢	30 歳台前半	20 歳台後半	30 歳台前半	30 歳台前半	30 歳台前半	30 歳台前半
出身地	大阪府	広島県	大阪府	奈良県	奈良県	奈良県
交友有	M2・M3	M1	M1	F2・F3	F1・F3	F2・F3

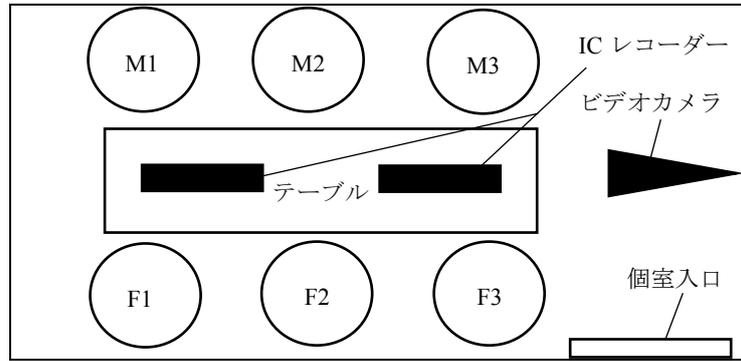


図 7.1 合コン参加者の配置

第 7.3.2 節 談話の転写

高木他（2016: 27–37）を参考に、収録データをトランスクリプトに転写した。以下、高木他による転写方法のうち、本章で使用するものを表 7.2 に示す。トランスクリプトにおける英数字のフォントは高木他（2016）に倣い「Courier New」に統一する。なお、「→」は該当する発話を示すものである。

表 7.2 転写方法

記号	意味
[]	音の重なり
=	発話の密着
(.)	0.2 秒以下の短い間
(m)	0.2 秒より長い間
.	語尾の音調が下がっている場合
,	音が少し上がって弾みが付いていて続きがあることを予測させる場合
?	語尾の音が上がっている場合
¿	語尾の音が上記の疑問符を付けるほどには上がっていないが多少上がっている場合
:	音の引き伸ばし
文字	発話の音量自体が大きい場合
°文字°	声が小さい部分
h	呼吸音、笑い。長くなるごとに h の数を増やす。
(h)	笑いながら産出される発話
()	聞き取りが困難な発話。内容がわからないときは(……)で示す。
(())	転写する人のコメント

第 7.3.3 節 話題導入

本研究における「話題」を、会話の中で導入・展開された、内容的に結束性を有する事柄の集合体(三牧 2013)とした。話題には下位話題を持つものも見られたため、三牧(2013)を参考に、特定の話題を「大話題」、下位話題を「小話題」とし、トランスクリプトに見られた小話題の導入を「話題導入」として数えた。ただし、参加者 1 名が話題候補を導入しても、他の参加者が相づちだけで、その内容をそれ以上取り上げない場合は考察対象から除外した。話題導入には話し手(および話し手を含む複数人)に関する話題と聞き手(および聞き手を含む複数人)に関する話題があるが、前者を「話し手志向的话题導入」、後者を「聞き手志向的话题導入」と呼ぶ。なお、合コン会場の状況や出された料理についての話題は、話し手・聞き手志向とは区別し、「現状に関する話題導入」として数えた。それぞれの例を(7.3)(7.4)(7.5)に示す。

(7.3) 話し手志向的话题導入の例「広島に住んでいた」

- 01 F1:→私 3 年広島に住んできたことありますよ。
02 M2: あ:そうなんですか。なんで、なんで。いつですか?

(7.4) 聞き手志向的话题導入の例「女性 3 名の出身地」

- 01 M2:→皆さん出身は、関西、
02 F3: 関西です。
03 M1: あ:

(7.5) 現状に関する話題導入の例「収録現場の緊張感」

- 01 M3:→(5.0) ただなんかこの緊張感すごいな。
02 F2: [hh]
03 F1: [hh] 書類から書き始め。

第 7.3.4 節 冗談発話

本研究における冗談発話について、笑わせようという意図があったか否かにかかわらず、話し手の発話の最中や直後に聞き手の笑いが起こったとき、その発話を「冗談発話」とした。笑いは、声をたてるものとたてないものに分けられる(笹川 1997)が、本研究では前

者のみを扱う。2名以上のかけあいによって笑いが起こった場合は、かけあいに参加した者それぞれの冗談発話の回数として数える。2名による冗談発話の例を(7.6)に示す。

(7.6) 2名による冗談発話の例

- 01 F2: 小籠包もう無理.
02 F1: え覚えてる?
03 F3: 一回しか覚えてない, 小籠包食べたの.
04 F1: せやな.
05 F2: え:
06 F3: →多分一回しか食べてないで.
07 F2: →そんなことはない.
08 M3: hh
09 M2: hh 覚えてないのいいことに.

(7.6)は、女性3名(F1, F2, F3)が旅行中に何度も小籠包を食べたということについての断片である。F2が何度も食べて大変だったという発話をした(1行目)が、同行したはずのF1とF3は(食べた回数は)1回しか覚えていないと言う(3, 4行目)。「えー」と驚くF2に、F3が「たぶん1回しか食べてないで」と言い(6行目)、それを聞いたF2が「そんなことはない」と否定する(7行目)。F3とF2のかけあいを聞き、M3とM2が笑っている(8, 9行目)。このようなかけあいでは、F2のツッコミ発話(7行目のF2の発話)のみを冗談発話とすることもできるが、本研究では、先行するボケ発話が存在することでツッコミ発話が笑いにつながると考え、7行目のF2の発話だけでなく、6行目のF3の発話も冗談発話とする。なお、ボケ発話とは、「会話者同士の談話の流れの中で、展開が当然推測できるはずの内容から無意識的にそれと勘違いや、意識的にずらした間の抜けた発話」「正常な談話の軌道から逸脱した発話」であり、ツッコミ発話とは「相手のボケの発話内容に対して理不尽、不合理、非常識などを指摘する発話」である(小矢野 2004)。

第7.3.5節 ラベル付けによるキャラ化

本研究では、表現者が第4.2節で示したようなさまざまなキャラ化の材料によって、名詞の形で被表現者を指示する場合、その指示発話を「ラベル付けによるキャラ化」とする。

また、キャラ化された被表現者の態度について、キャラを肯定する場合を「受容」、不同意を示す場合を「拒否」、特に受容も拒否もせずキャラについて触れない場合を「無関心」と呼ぶ。(7.7)にラベル付けによるキャラ化と、それに対する無関心の態度の例を示す。

(7.7) ラベル付けによるキャラ化の例

- 01 M3: なるべく[, 自分]で, あのなんかご飯作ろうみたいな.
02 M2: [はい] [あ:]
03 F1: [へ:]
04 F2:→女子や. 女子や.
05 M1: いや女子っぽい, 彼は. ほんまに.
06 M2: なんか食材もこだわってたりするんですか.
07 M3: 別にこだわらないですけど.

(7.7)では、「よく自炊する」という M3 の発話 (1 行目) が行動的性質の材料となり、F2 が「女子」というラベルを付けキャラ化している (3 行目)。M3 と交友のある M1 が F2 のキャラ化を支持する発話をするが、キャラ化された M3 は受容も拒否もせず、無関心の態度を取っている。

第 7.4 節 キャラ化と非キャラ行動のポライトネス評価分析

本節では、キャラ化と非キャラ行動のポライトネス評価を分析する。談話データから、参加者全員がラベル付けによってキャラ化されていることがわかった。本節ではまず、キャラ化の材料となったと考えられる、話題導入 (第 7.4.1 節)、冗談発話 (第 7.4.2 節)、ラベル付けによるキャラ化 (第 7.4.3 節) の回数について述べる。次に、キャラ化とキャラ行動・非キャラ行動のポライトネス評価の順に事例を挙げながら分析する (第 7.4.4 節)。

第 7.4.1 節 キャラ化の材料としての話題導入

調査の結果、志向性にかかわらず、男性による話題導入の回数が女性より多いことがわかった。男性による話題導入は 164 回、女性による話題導入は 110 回観察された。志向性別に見ると、男性は話し手志向的話題導入が 73 回、聞き手志向的話題導入が 77 回、現状に関する話題導入が 14 回で、女性は話し手志向的話題導入が 49 回、聞き手志向的話題導

入が 50 回、現状に関する話題導入が 11 回であった。参加者別の話題導入数を志向性ごとに図 7.2 に示す。図 7.2 から、M2, F1 以外の参加者は話し手志向的话题導入数が聞き手志向的话题導入数より多いこと、話し手志向的话题導入数は M3 と F2 が同数で最も多いこと、M2 の聞き手志向的话题導入数が他の参加者の 2 倍程度多いことがわかる。先行研究で指摘された男性上位者の傾向である話し手志向的话题導入数の多さは女性である F2 の言動にも見られ、また女性上位者の傾向とされた聞き手志向的话题導入数の多さは最年少の男性である M2 の言動に強く見られたことになる。このことから、話題導入の傾向に関して、本研究の会話参加者に関しては、従来のコミュニケーション研究の知見を支持しない結果が得られたと言える。

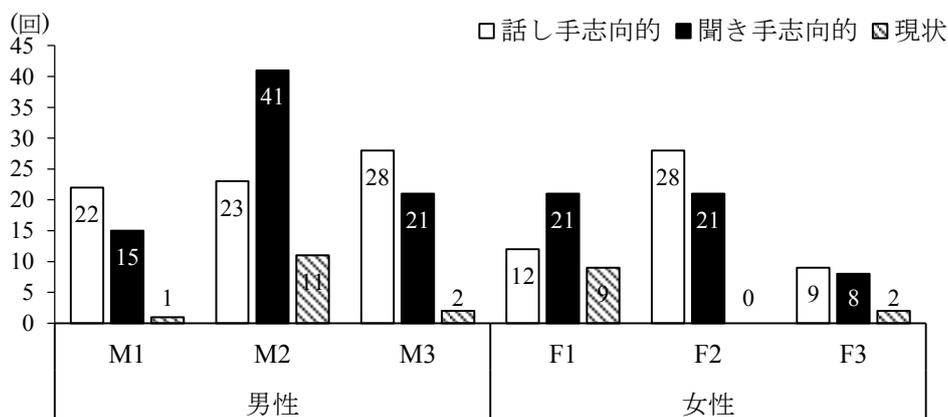


図 7.2 志向性別話題導入の参加者別回数

次に示す(7.8)は、F2 による話し手志向的话题導入の例である。1 行目の F1 の発話に対し F2 が 5, 7 行目で自身との相違を示す。6 行目の M2 の「なんかいきなり突き放した」や 13 行目の沈黙、14 行目の M2 の「うーん」という唸りなどから、F2 による相違の指摘をどのように扱ったらいいかわからないという男性たちの気まずさが垣間見える。そこで F2 が、このような意見の相違や不一致は女性たちにとってよくあることであるという趣旨の自己志向的话题導入を行い (15~18 行目)、女性 3 名の関係性を男性たちに説明する。F2 の話題導入は、女性たちのやりとりや関係性を説明することで男性たちの理解を促し、男女の壁を取り払うものと言える。

(7.8) F2 による話し手志向的话题導入の例

- 01 F1: そんなに1つの事考えて、真剣に考えて生きてない。hh
- 02 M2: [あ: そうすよね.]
- 03 F2: [そうや、確かに.] そうやな。F1 そういやそうやな。
- 04 F1: あ、私、が? あ、
- 05 F2: 私考えてるよ。
- 06 M2: なんかいきなり突き放した。
- 07 F2: F1よりは考えてる。
- 08 F1: あ、あ: ほんま。
- 09 M1: F1よりは。hh
- 10 F1: [hh]
- 11 F2: [hh]
- 12 F3: [hh]
- 13 F1: (6.0) かもね:
- 14 M2: う:ん
- 15 F2:→この前、こう、喫茶店に行ってて、
- 16 M2: [はい]
- 17 F3: [うん]
- 18 F2:→うん、3人が[, 全]然違うことしゃべってた。hh
- 19 M2: [はい]
- 20 F1: [hh]

説明的な内容の多いF2に対し、同じく話し手志向的话题導入数の多いM3の話題導入の内容は、前の話題との関連は見られるが自由な印象が強く説明的でない。(7.9)に例を示す。コーヒーをよく飲むM2とF2を中心にコーヒーの話題が続いていたところに、M3が缶コーヒーはまずいという発話をし(1行目)、コーヒーをよく飲むF2もその意見に同意する(2行目)。その後、M3が「オーガニックにはまっている」という発話をし(6行目)、健康志向についての話題に移る。

(7.9) M3による話し手志向的话题導入の例

- 01 M3: 缶コーヒーまずいな。

- 02 F2: まずいですねえ。
 03 F3: う:ん
 04 M1: ()
 05 M2: はい
 06 M3:→最近 hh ちょっと, こう, hh オーガニックな方について。
 07 M2: オーガニック. hh
 08 F1: [hh
 09 F2: [hh
 10 F3: [hh
 11 M2: なんかすごい hh, おしゃれですね. hh

続いて示す(7.10)は M2 の聞き手志向的話題導入の例である。M2 が M1 に調査者との関係性を確認する話題導入をし (1 行目), その後女性 3 名にも同様の質問で話題導入をする (6 行目)。F1 の回答 (7, 9 行目) を受け, M3 が F1 に質問をし (10 行目), その後しばらく調査者についての会話が続いた。M2 の話題導入が, 結果的に M3 の F1 への質問につながり, 男性と女性の間の壁を取り払う役割を果たしていることが見て取れる。

(7.10) M2 による聞き手志向的話題導入の例

- 01 M2:→どういう, つな, セッティングはどうなってるんですか?
 02 M1 さん, つながり?
 03 M1: (せ:じん)は宿利さんから[, M3]くんに発信があつて,
 04 M2: [はい]
 05 M1: M3 くんから僕に, 来て, M2 くん連絡した感じ。
 06 M2:→あ: (4.0)女性陣もそんな感じなんですか?
 07 F1: 宿利さんと [同じ]職場の人が私の友達で[その友達から]連絡が来て,
 08 M2: [はい] [あ: なるほど.]
 09 F1: ここは友達です。
 10 M3: あ: じゃ: あんまり宿利さんとは直接関わりは?
 11 F1: 今日初めて会いました。
 12 M3: そうなんですか。

以上、本小節で示した話題導入の回数から、F2、M3、M2の3名が会話の主導権を握っている可能性が示された。主導権を握る人物として女性や最年少の男性が含まれており、従来のコミュニケーション研究で述べられてきた、話者間の上下関係や性別では会話の主導権を説明しきれないことが示された。また、(7.8)(7.10)に示したとおり、F2とM2による話題導入は、決して自己中心的なコントロールではなく、参加者間の関係を説明したり他の会話参加者たちの発話を促したりする補助的なものである。一方、(7.9)に示したとおり、M3による話題導入はやや自由度の高い内容であった。このような話題導入の実践が、第7.4.3節で見るラベル付けによるキャラ化に影響していると考えられる。

第7.4.2節 キャラ化の材料としての冗談発話

冗談発話は男性204回、女性252回、計456回、笑いは男性255回、女性320回、計575回観察され、どちらも女性の回数が多いことがわかった。参加者別の冗談発話および笑いの回数を図7.3に示す。図7.3から、F2(122回)とF1(93回)の冗談発話の回数が男性3名より多いことがわかる。このことから、冗談発話においても、本調査の参加者に関しては、「男性が笑わせ、女性が笑う」という先行研究の指摘する構図は支持されないとと言える。

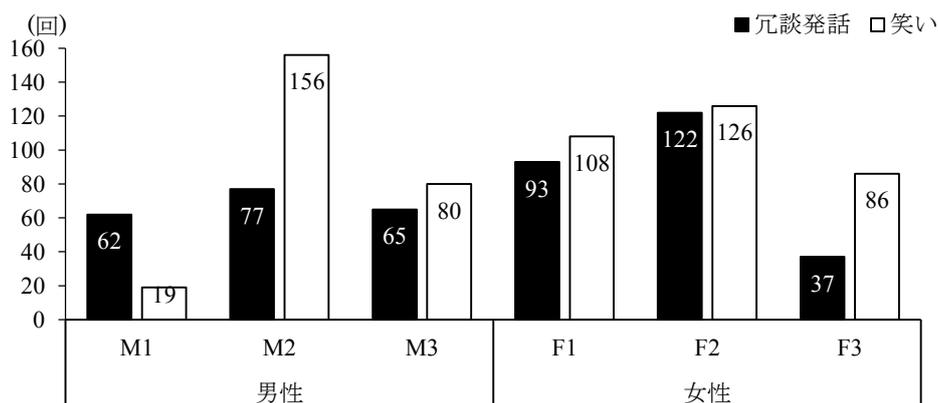


図7.3 冗談発話と笑いの参加者別回数

456回の冗談発話のうち、2名以上のかけあいによる発話が210回(ボケ発話113回、ツッコミ発話97回)観察された。これらをツッコミ発話とボケ発話に分け、参加者ごとに分

類したものを図 7.4 に示す。図 7.4 から、M2、F2、M1 はツッコミ発話が多く、F1、M3、F3 はボケ発話が多いことがわかる。また、だれのボケ発話にだれがツッコミ発話をしたのかをまとめた表 7.3 から、F2 による F1 へのツッコミ発話が 16 回、M2 による M3 へのツッコミ発話が 12 回と多いことがわかる。

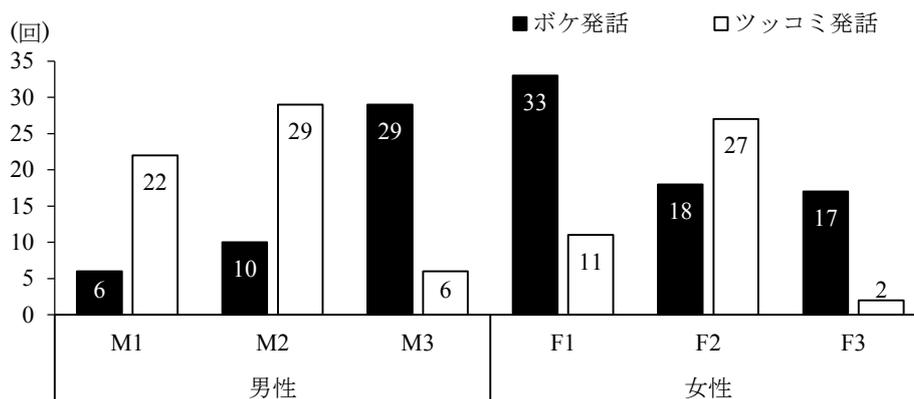


図 7.4 ボケ発話・ツッコミ発話の参加者別回数

表 7.3 冗談発話の参加者別ボケ・ツッコミ発話内訳

		ツッコミ発話						ボケ発話 合計	
		M1	男性 M2	M3	F1	女性 F2	F3		
ボケ発話	男性	M1	-	4 回	0 回	1 回	1 回	0 回	6 回
		M2	6 回	-	1 回	2 回	1 回	0 回	10 回
		M3	7 回	12 回	-	3 回	7 回	0 回	29 回
	女性	F1	6 回	9 回	0 回	-	16 回	2 回	33 回
		F2	4 回	7 回	3 回	4 回	-	0 回	18 回
		F3	2 回	7 回	2 回	1 回	5 回	-	17 回
ツッコミ発話合計		25 回	39 回	6 回	11 回	30 回	2 回	113 回	

なお、複数人のボケ発話に対して 1 回のツッコミ発話が観察された場合、図 7.4 では話し手のツッコミ発話は 1 回と数えているが、表 7.3 ではボケ発話の話し手の人数に合わせた回数がツッコミ発話の回数となっているため、図 7.4 と表 7.3 の M1、M2、F2 のツッコミ発話の回数と合計に差が生じている。実際のツッコミ発話の合計数は図 7.4 および上述のとおり 97 回である。

次の(7.11)は F1 と F2 の、(7.12)は M1、M2、M3 の、(7.13)は M1 と M3 の冗談発話の例である。

(7.11) F2 と F1 による冗談発話の例

01 M2: 食べ物, 何が好きなんですか? ((F1 に))

02 F1:→何が好き? ((F2 に))

03 F2:→なんで私に聞いてん?

04 M2: hh

((12 行省略))

17 F1:→苦手なもの以外はだいたい, 食べます.

18 F2:→そらそうやろ.

19 F1: あそっか.

20 M2: hh

(7.11)では, 自身への質問をそのまま F2 に質問し直したり (2 行目), 不適切な回答をしたり (17 行目) する F1 のボケ発話に対し, F2 が即座にツッコミ発話を返し (3, 18 行目), それを聞いた M2 が笑っている。

(7.12) M1, M2, M3 による冗談発話の例

01 M1: 知ってるとは口走って悪いんやけど, 結構知らないなあ.

02 確かによく知らんな俺は. 結構ま: ベールに包まれてる宿利さん.

03 M3:→ほんま, そうやな. ちょっと不思議やな. hh

04 M1:→不思議や hh.

((店員が入ってくる))

05 M2:→hh[なんかこれ, [たぶん後に聞くので, これ.

06 F1: [hh

07 F2: [hh

08 F3: [hh

09 M3: [hh

(7.12)では, 調査者の知人である M1 と M3 が, 調査者について「ベールに包まれてる」「不思議」という評価をし (1~4 行目), M2 が「たぶん後で聞くので, これ」という発話で笑いながらツッコミを入れている (5 行目)。それを聞いた F1, F2, F3, M3 が笑っている

(6～9行目)。

(7.13) M1 と M3 による冗談発話の例

01 M3:→M3 ((苗字名前)) です. まだいたい「((名前の一部))」さんとか,

02 F1: ふ:ん

03 M1:→なんでそんな職人感出してるん. hh

04 F1: [hh

05 F2: [hh

06 F3: [hh

07 M2: [hh

(7.13)では, M3 が苗字と名前を言い, その後呼び名である名前の一部を発話する(1行目)。それを聞いた M1 が, 名前の一部が職人の名前のように聞こえるというからかいのコメントをし(3行目), 他の参加者が一斉に笑っている(4～7行目)。

以上の観察から, M2, F2, M1 のツッコミ発話が多く, F1 と M3 のボケ発話が多いことがわかる。このような冗談発話の実践も, 第 7.4.3 節で見るラベル付けによるキャラ化に影響していると考えられる。

第 7.4.3 節 ラベル付けによるキャラ化

ラベル付けによるキャラ化は, 第 7.4.1 節, 第 7.4.2 節で見てきた話題導入および冗談発話の実践を材料として行われると同時に, キャラ化するかされるかという実践自体がさらなるキャラ化の材料となると考えられる。そこで, 本小節では, まずラベル付けによるキャラ化の回数とラベルの実例を紹介し, その後ラベル付けによるキャラ化と被キャラ化の回数から見えてくる, ラベル付けによらないキャラ化について論じる。

ラベル付けによるキャラ化は, 全部で 9 回観察された。ラベル, キャラ化された被表現者, キャラ化した表現者, 予想されるキャラ化の材料, 被表現者のキャラへの態度(受容・拒否・無関心), ラベル付けによるキャラ化が行われた時間を表 7.4 に示す。キャラ化した表現者が複数いる場合は, 「表現者」の欄にキャラ化した順に参加者名(記号)を, 「時間」の欄にラベル付けによるキャラ化が見られたおおよその時間を示す(時間は収録開始を 0 分とし, キャラ化時点を分で示す)。

表 7.4 観察されたラベル付け

ラベル	被表現者	表現者	材料	被表現者の態度	時間
1. 「女子」	M3	F2, M1	「よく自炊する」という行動	無関心	21 分
2. 「生姜」	M3	F2, F1, M2	「生姜にはまっている」という嗜好	拒否	26 分 109 分 122 分 140 分
3. 「オーガニック」	M3	M2	「オーガニックにはまっている」という嗜好	受容	26 分 98 分 122 分
4. 「ボケ」	F1	M2	「よくツッコまれる、物忘れや勘違いが多い」という行動	拒否	78 分
5. 「ボケ」	F3	M2	「物忘れや勘違いが多い」という行動	受容	78 分
6. 「ツッコミ」	F2	M2	「よくツッコむ、F1・F3の物忘れを指摘する、説明的話題導入が多い」という行動	受容	78 分
7. 「栄養士」	M3	F2	「栄養バランスを考えた食事をする」という行動	無関心	91 分
8. 「営業（さん）」	M2	M3, M1, F1	「聞き手志向的言動を取る」という行動	拒否→受容	100 分
9. 「オネエ」	M1	F1	「時々「女ことば」で話す」という行動	拒否	123 分

表 7.4 から、すべての参加者が少なくとも 1 度はラベル付けによりキャラ化されていることがわかる。いずれも最初のキャラ化は初対面の被表現者に対して行われている。合コン開始から 30 分以内と早い段階で M3 に対して 3 回のキャラ化が行われ、開始から 1 時間経過後に F1, F2, F3 へのキャラ化が、開始から 1 時間半経過後にもう 1 度 M3, そして M2, M1 へのキャラ化が続いた。キャラ化の材料は、行動や嗜好の行動的性質のもののみが観察され、身体的性質や資本的性質のものは見られなかった。キャラ化に対する被表現者の態度は、受容 (M3 の「オーガニック」キャラ, F3 の「ボケ」キャラ, F2 の「ツッコミ」キャラ, M2 の「営業 (さん)」キャラ), 拒否 (M3 の「生姜」キャラ, F1 の「ボケ」キャラ, M1 の「オネエ」キャラ), 無関心 (M3 の「女子」キャラ, M3 の「栄養士」キャラ) のすべてが観察された。

次に、図 7.5 にキャラ化と被キャラ化の回数を参加者別に示す。キャラ化された (被表現者になった) 回数は、M3 が 4 回と最も多く、他の参加者が 1 回ずつだったのに比べて多いことがわかる。キャラ化した (表現者になった) 回数は M2 が 4 回と最も多く、続

いて F2 が 3 回であった¹⁸。キャラは、1 人に 1 つしかないと見なされている（定延 2006）ため、ここで行われている M3 に対する複数回のキャラ化は加算的、複合的なものと考えることができる。すなわち、合コン開始から 21 分経過時点で「女子」キャラ化された M3 は、26 分経過時点で「生姜とオーガニックにはまっている女子」キャラにされているという解釈が可能だということである。このような解釈に従うと、M3 は最終的に「生姜とオーガニックにはまっている栄養士的女子」という複合的なキャラになったことになる。

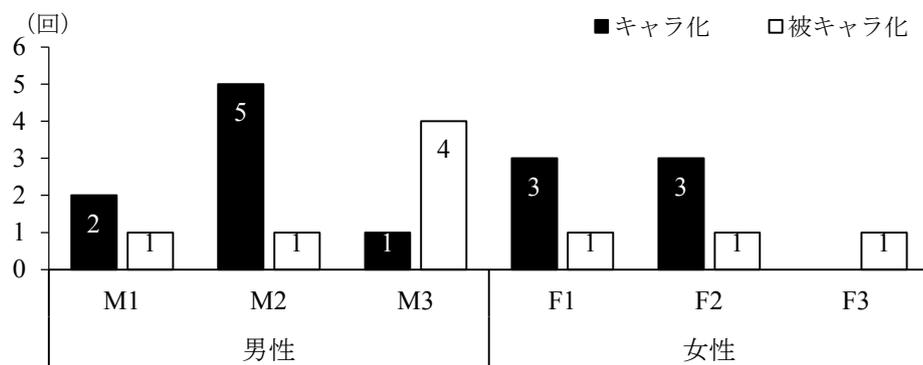


図 7.5 ラベル付けによるキャラ化・被キャラ化の参加者別回数

ラベル付けによるキャラ化は、キャラ化するかされるかという実践自体がさらなるキャラ化の材料となると考えられる。本稿で何度も言及している「いじられ」キャラや、それに対応する「いじり」キャラは、「おい、「ヒゲ」！」「うちのクラスの「メガネ」がね」といった発話における「ヒゲ」や「メガネ」のように呼称としては用いられにくい。そのため、直接的なラベル付けの実践を観察することは難しいと考えられる。本小節で観察されたラベル付けによるキャラ化をからかいの冗談発話と考えると、被キャラ化の回数が多い者はよくからかわれる「いじられ」キャラ、キャラ化する回数の多い者はよくからかう「いじり」キャラとみなすことができる。このような考察の結果、M3 がからかいの対象、つまり「いじられ」キャラであり、M2 が「いじり」キャラである可能性が高いと言える。

第 7.4.4 節 キャラ化と非キャラ行動のポライトネス評価

本小節では、キャラ化された被表現者がキャラに不同意を示し拒否した、2.「生姜」キャラ、4.「ボケ」キャラ、9.「オネエ」キャラの 3 例（前述表 7.4 参照）を観察する。「生

¹⁸ 複数人によるキャラ化が観察されたものに関しては、最初にキャラ化した者のみをキャラ化の回数として数えた。

姜」キャラは、生姜にはまっているという嗜好の行動的性質の材料によりキャラ化され、生姜に詳しい、生姜が好きといった言動がキャラ行動として期待されると考えられる。「ボケ」キャラは、よくツッコまれる、物忘れや勘違いが多いという行動的性質の材料によりキャラ化され、これらの行動をとり続けることがキャラ行動として期待されると考えられる。「オネエ」キャラは、時々「女ことば」を話すという行動的性質の材料によりキャラ化され、このような行動をとり続けることがキャラ行動として期待されると考えられる。

次に示す(7.14)と(7.15)はどちらも M3 に対する「生姜」キャラ化であるが、(7.14)のみからではキャラ化であることがわかりにくいため、(7.15)と合わせて示すこととする。

(7.14) M3 の「生姜」キャラ化 1 回目 (約 26 分経過時点)

- 01 F1: マイブーム. なんだろう. 何?
- 02 M3: マイブームって何? hh
- 03 F2:→hh いや生姜でしょ? hh
- 04 F1: そんな, 何? hh
- 05 M3: 生姜ちゃいますよ.
- 06 M2: オーガニック.
- 07 M3: 生姜今からやりたいことなんで.
- 08 M2: 新生姜.
- 09 F2: 紅茶, 紅茶, 今は生姜, じゃあ. 今から.
- 10 F3: 今は生姜じゃない, [今紅茶. 今紅茶.
- 11 M3: [ちよっとしゃべっていいですか.
- 12 F2: あ:どうぞどうぞ. hh
- 13 M3: しそジュース作ってて.
- 14 M1: [うそや.
- 15 M2: [へ:
- 16 F2: [hh
- 17 F3: え:
- 18 M3: なくなったら次生姜行こうかなと思って.
- 19 F2: あ:

(7.15) M3 の「生姜」キャラ化 2 回目 (約 109 分経過時点)

- 01 F3 : あ, ガリあります.
((9 行省略))
- 10 F1:→生姜, 生姜です, 生姜 hh
- 11 F2: hh あほんまや.
- 12 M3: いや, いや別に生姜あれですよ.
- 13 F2: [え, hh
- 14 M1: [hh
- 15 M2: 生姜といえばみたいな. hh
- 16 M1: 生姜といえば. hh
- 17 M2: やっぱいち早く. hh
- 18 F1: すごいひらめいたと思った.
- 19 M2: hh
- 20 F2: 甘酢生姜ぐらいだったら, 反応せえへんと思ってた.
- 21 M2: hh
- 22 F1: あ:
- 23 F2:→生姜博士 () .
- 24 F1: これなんでピンクなん?
- 25 F2:→そらもう生姜博士に聞こう.
- 26 F1: hh
- 27 M3: 色つけてるだけす. 色つけてるだけです.

(7.14)は M3 に対する F2 による 1 回目の「生姜」キャラ化, (7.15)は F1 による 2 回目の「生姜」キャラ化である。いずれにおいても、「生姜にはまっている」というキャラ化の材料自体が事実と反するという理由により, M3 は「生姜ちゃいますよ ((7.14)の 5 行目)」「いや, いや別に生姜あれですよ ((7.15)の 12 行目)」という発話で明確に拒否の態度を表明している。しかしながら, F2 は M3 を「生姜博士」と呼び ((7.15)の 23, 25 行目), M3 はそれを拒否せず生姜に関する質問に答えている (27 行目)。M3 の拒否の後もやりとりは続き, 笑いも起きていることから, キャラ化は参加者たちにインポライトとは評価されていないことがわかる。これは, F1 や F2 によるキャラ化が, 冗談発話のマーカである笑い(大津 2014)

を伴うものであり、それに対する拒否も冗談発話のやりとりの一部として参加者全体に認識されているためと考えられる。その証拠に、(7.15)以降にも2回M2への「生姜」キャラ化が行われたが(前述表7.4参照)、いずれも笑いを伴う冗談発話であった。

次に示す(7.16)は、M2によるF1・F3・F2に対する「ボケ・ボケ・ツッコミ」キャラ化の例である。(7.14)(7.15)で見た「生姜」キャラは事実と異なるという理由で拒否されたが、「ボケ」キャラは明らかな「マイナスのレッテル(瀬沼 2006: 68)」であり、キャラ化が侮辱や攻撃になりうるという理由からも拒否される可能性が高い。

(7.16) F1・F3・F2の「ボケ・ボケ・ツッコミ」キャラ化

- 01 F1: 私がぼそぼそ変なことしゃべってるのが入る, からあげる.
- 02 F2: ちよっともう意味がわからへん.
- 03 F1: [hh
- 04 F3: [hh
- 05 M3: M1 食べるこれ.
- 06 M1: あ, もう, 3つぐらい食べたよ俺.
- 07 M3: 大丈夫.
- 08 M2:→(5.0)あれなんすね, 普段は, ボケボケツッコミみたいな.
- 09 F1: [ボケ]じゃないよな. hh [ボケてないよね.]
- 10 F3: [hh.]
- 11 F2: [天然, 天然.]
- 12 M2: [え, 違う?]
- 13 F1: 至って真面目やな. hh
- 14 M2: あれ? hh
- 15 F3: hh
- 16 M2: hh あれ. (3.0) 心外だ, みたいな.
- 17 F1: そうそう.
- 18 M1: コント集団みたいな.
- 19 F3: hh
- 20 M2: [()].]
- 21 F2: [良かった]やん. 客観的データ.

- 22 F1: 違う違う違う.
- 23 M2: 3人組じゃないんすね.
- 24 F1: 至って真面目にしゃべってるな.
- 25 F2: [うん]
- 26 F3: [うん]
- 27 M2: hh
- 28 F3: hh

(7.16)では、1行目でF1が録音用のICレコーダーが自分の前に置かれていることについてコメントし、F2のほうに移動している。その発話に対してF2が2行目で「ちょっと意味がわからない」とツッコミを入れている。このやりとりを受け、M2がF3も含める形で女性3名の関係性を「ボケ(F1)・ボケ(F3)・ツッコミ(F2)」であると指摘する(8行目)。F1とF2のやりとりが行動的性質の材料となり、M2によりキャラ化が行われたことがうかがえる。「ボケ」キャラ化されたF3は笑って受容し(10行目)、「ツッコミ」キャラ化されたF2はF1に対して「天然(ボケ)」であると発話したり(11行目)、「客観的データ」だと指摘したり(21行目)して、キャラ化を受容している。一方、「ボケ」キャラ化されたF1は、笑いながら「ボケじゃない」と否定し(9行目)、「至って真面目(13行目、24行目)」「違う違う違う(22行目)」といった発話で最後まで拒否している。F1の発話に対し、F2とF3が「うん」と相づちを打って受け入れ(25, 26行目)、M2とF3が笑っている(27, 28行目)。

以上に示した、M3の「生姜」キャラ化、およびF1の「ボケ」キャラ化は、キャラ化された被表現者が拒否しているにもかかわらず、合コン参加者からインポライトと評価されなかった例と言える。これらに対し、(7.17)に示すM1の「オネエ」キャラ化は、合コン参加者からインポライトと評価された例である。

(7.17) M1の「オネエ」キャラ化

- 01 M1: あ:なんか悪いことしたわ。(「わ」は上昇調)
- 02 F1: なんで、なんでちょいちょいオネエになるんですか?
- 03 M2: [hh]
- 04 M3: [hh]

- 05 F2: [hh]
- 06 F1: ずっと気にはなってるん。
- 07 M2: なってました。
- 08 M1: いや:
- 09 F2: [し: し:]
- 10 M3: [ちょいちょい]ね, 標準語はね。
- 11 M1: 標準語は。
- 12 F1: あ, なるほど。
- 13 M3: [でも大阪人やんな。
- 14 F2: [うちでも同僚が1人オネエやからな, 全然違和感感じへん。
- 15 F1: あ:
- 16 M2: えオフィシャルなオネエなんすか?

(7.17)では、M1が上昇調の「～わ」を用いていわゆる「女ことば」¹⁹を発話した(1行目)。F1がその理由を尋ねる形でM1を「オネエ」キャラにキャラ化した。F1の質問(2行目)を受け、M2、M3、F2が一斉に笑い(3～5行目)、M2も「オネエ」キャラ化を肯定する発言を行った(7行目)。M1のキャラ化拒否以前は、キャラ化を行ったF1だけでなく、M2、M3、F2もこのキャラ化を受容していたということがわかる。これに対し、M1は笑うことなく「いやー」と否定的に考えてみせ、キャラ化を拒否した(8行目)。F2による大げさな感情表現「しーしー(9行目)」は、おそらく冗談発話であることを示していると思われる。その後、M3が「標準語はときどき「女ことば」に聞こえる」という意味で「標準語はね」と発話し(10行目)、M1も同意する(11行目)。それを受けたF2が「オネエ」キャラである同僚の話を始め(14行目)、そのままM1に対する「オネエ」キャラ化の話は終わる。10行目～14行目を見ると、M1、M2、F1、F2は、M1による「女ことば」使用を「オネエ」キャラのキャラ化の材料ではなく、「標準語」使用が「女ことば」のように聞こえただけ」と捉え直していることがわかる。笑いを伴わないM1のキャラ化拒否により、気まずくなった雰囲気、3～5行目では笑っていたM2、M3、F2が協力して変えようとしている様子がうかがえる。

¹⁹ 「～わ」「～かしら」などの女性に特有とされる文末表現は「女性文末詞」と呼ばれる女ことばの一種だが、近年若い女性による使用は少なく、「オネエことば」と認識している母語話者の存在も指摘されている(水本他 2009)。

M1 は、(7.17)で「オネエ」キャラ化される前にも、「女ことば」とされる文末表現や声色を変えた発話を2度行っている。1度目は、自身の発話に間違いがあったことを認める場面 ((7.18)参照)、2度目は、F1 と F3 のやりとりを想像して発話した場面 ((7.19)参照)である。特に(7.18)では大きな笑いが起きており、M1 の「女ことば」による発話が冗談として受け入れられていることがわかる。

(7.18) M1 の「女ことば」発話1回目

- 01 M1: うん、そっちやったら長野やなと思って。ごめんな。
02 F1: うん
03 F3: へ:
04 F1: 間違っていない大丈夫[, 自]信持てば大丈夫。
05 M3: [hh]
06 M1:→せやな。ひとつ勉強になったわ。((「わ」は上昇調))
07 M3: [hh]
08 M2: [hh]
09 F1: [hh]
10 F3: hh

(7.19) M1 の「女ことば」発話2回目

- 01 M1:→乗っかるわ: 言うて乗っかってんねんな。((「わ」は上昇調))
02 F3: うんそんな感じ。

(7.17)のF1による「オネエ」キャラ化は、このような背景から行われたわけだが、一度は他の参加者から受け入れられたキャラ化が否定される結果となった。(7.17)において、M1は、笑いや「女ことば」を伴う「オネエ」キャラとしてのキャラ行動ではなく、非キャラ行動である真剣な拒否の表明を行っている。第6章で示したとおり、非キャラ行動はインポライト評価を受ける可能性があるが、合コン参加者たちはM1の拒否をインポライトと評価せず受容している。このことは、「女ことば」による発話が「実は標準語による発話」であったというキャラ化の材料の見直しが行われ、「オネエ」キャラ化が否定されることから明らかである。キャラ化と非キャラ行動が同時に起こった(7.17)の事例では、

M1 の拒否を受け、一度は参加者たちが許容したキャラ化が、遡ってインポライトと評価されたと言える。

第 7.5 節 考察

本節では、第 7.4.4 節で示した(7.17)のキャラ化のインポライト評価について、許容された(7.14)(7.15)(7.16)のキャラ化と比較しながら考察する。

キャラ化された被表現者がキャラ化を拒否したからといって、いつでもそのキャラ化がインポライトと評価されるわけではない。F2 により「生姜」キャラ化された M3 は何度も拒否し、キャラ化との間に齟齬が生じたが、他の参加者は M3 の「生姜」キャラ化を許容し、自らキャラ化する者も出てきた。これは、F2 によるキャラ化と M3 による拒否のやりとりの齟齬自体がかけあいの冗談発話と認識されたためと考えられる。また、F1 の「ポケ」キャラとその拒否も、インポライトとは判断されず、キャラ化は許容された。この 2 つのキャラ化をめぐるポライトネス評価の流れを図 7.6 に示す。

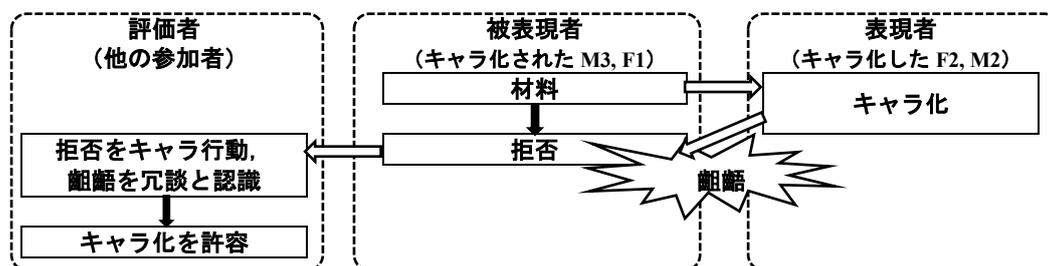


図 7.6 「生姜」キャラ化と「ポケ」キャラ化をめぐるポライトネス評価のメカニズム

キャラ化と拒否のやりとりの齟齬からインポライト評価につながった、M1 の「オネエ」キャラの例では、まず F1 による「オネエ」キャラ化が笑いとともに他の参加者たちに許容されるが、M1 による非キャラ行動の拒否により、そこから遡ってキャラ化の材料に対する理解が修正され、キャラ化がインポライトと評価されるという流れになっている (図 7.7 参照)。

なぜ参加者たちはキャラ化を許容した後、M1 の拒否をインポライトと判断せず、キャラ化を改めてインポライトとみなすに至ったのか。F2 による M3 への「生姜」キャラ化および M2 による F2 の「ポケ」キャラ化と、F1 による M1 の「オネエ」キャラ化の違いは何か。それはキャラ化された被表現者とキャラ化した表現者のキャラにあるのではないだろうか。前者 2 つの例に共通するのは、拒否がキャラ行動となり、キャラ化と拒否のかけ

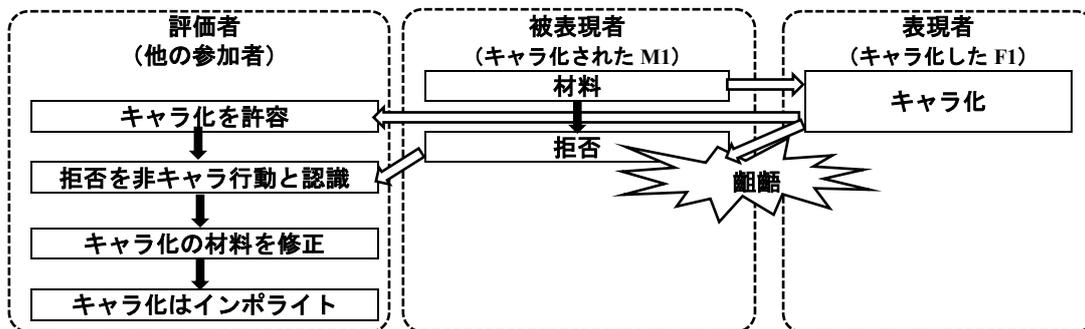


図 7.7 「オネエ」キャラ化をめぐるポライトネス評価のメカニズム

けあいがある冗談発話となっている点である。「生姜」キャラ化された M3 は、短時間に何度もさまざまなキャラ化の対象となる、いわゆる「いじられ」キャラである。冗談発話でも、M3 はからかわれることが多い。また「ボケ」キャラ化された F1 はツッコまれることが多く、キャラのラベル付けでも「ボケ」キャラにキャラ化されている。一方、キャラ化した M2 は「いじり」キャラ、F2 は「ツッコミ」キャラであり、ともに話題導入においても発話の主導権を握る存在である。これら 2 例に対し、「オネエ」キャラ化の表現者は「ボケ」キャラの F1 であり、被表現者は「ツッコミ」キャラの M1 であった。つまり、「いじり・ツッコミ」キャラから「いじられ・ボケ」キャラへのキャラ化は冗談として許容される一方、「いじられ・ボケ」キャラから「いじり・ツッコミ」キャラへのキャラ化は、キャラ化された被表現者の真剣な拒否によりやりとりで齟齬が生じた場合、冗談の枠を越え、結果的にキャラ化がインポライト評価を受けることになるということである。

このような説明は、次に示す(7.20)からも支持される。(7.20)では、「いじられ」キャラである M3 が「いじり」キャラである M2 を「営業 (さん)」キャラ化する (1 行目) が、拒否される (2 行目)。その後、「ツッコミ」キャラの M1 が M3 のキャラ化を許容、支持し (5 行目)、それを受けて M2 がキャラ化を受容する (13 行目) という流れになっている。

(7.20) M2 の「営業 (さん)」キャラ化

- 01 M3:→(), 営業すね.
- 02 M2: hh ラーメン営業しても全然もないんですけど.
- 03 M1: [hh]
- 04 M3: [話の]ネタとして.

- 05 M1:→そうやね, 営業さんやね.
- 06 F1: 盛り上がりますもんね話.
- 07 M2: そうすね, ラーメン好きの人は特に, なんかこう, おわってなるんで.
- 08 M1: うん, 営業さんは雑学のネタが多い方が.
- 09 M2: [うーん.
- 10 F1: [うーん.
- 11 M1: 絶対. ラーメンであれ何であれ.
- 12 F1: うーん.
- 13 M2: そうすね, 本当に.

以上のとおり, キャラ化と非キャラ行動に関するポライトネス評価は, 上下関係や親疎関係のような話者間の関係性や性別ではなく, 表現者と被表現者のキャラによってダイナミックに判断されるものである。

第 7.6 節 まとめ

本章はキャラ化された被表現者がそのキャラ化を拒否した場合, キャラ化がインポライトと判断されるのか, 被表現者の拒否が非キャラ行動としてインポライトと判断されるのかという, インポライト評価のメカニズムを探ることを目的とし, 日本語母語話者による合コン場面の談話を分析した。その結果, 「いじられ・ボケ」キャラの「いじり・ツッコミ」キャラに対するキャラ化が, キャラ化された被表現者の真剣な拒否により齟齬が生じた場合, 冗談の枠を越え, 結果的にキャラ化がインポライト評価を受けることになるという, ポライトネス評価のメカニズムを明らかにすることができた。この結果は, 話者間の人間関係や状況, 話者の性別だけではポライトネス評価を説明することはできず, その判断基準として行為者のキャラを加えるべきことを主張する根拠となる。

ただし, 本章の調査には, 1 つの合コン場面の談話のみを分析しているという問題点がある。本章によって, キャラ化および非キャラ行動とポライトネス評価の関係についてすべてを論じることはもちろんできない。本研究に用いたデータの合コンが, 30 歳前後の男女を対象としたものであること, また参加者のほとんどが関西出身者であることも結果に影響を与えた可能性がある。今後, 異なる年齢層, 地域の参加者を対象としたさらなる研究が望まれる。

しかしながら、これまでポライトネス研究やキャラ研究において取り上げられてこなかった合コン場面でのポライトネス評価や、キャラにかかわる男女の言動の諸相を観察できた点において、本章に示した個別研究3は十分に意義あるものであると考える。

第8章 総合考察

本章では、個別研究1～3で得た結果をもとに行為者のキャラとポライトネス評価のかわりについて述べ（第8.1節）、それを踏まえた日本語教育への提案を行う（第8.2節）。その後、本研究の実証性について述べ（第8.3節）、予想される反論に対し再反論を試みる（第8.4節）。

第8.1節 行為者のキャラとポライトネス評価

個別研究1では、不適切なキャラ化はインポライトな言動と評価されることがあることが示された。まず、日本語社会では話者間の社会的距離が近い場合や力関係が下の被表現者の笑いを表現する場合に、「ニヤニヤ」の使用が許容されることが多いこと、オノマトペ研究や日本語教育の世界では、「ニヤニヤ」と笑いを表現される被表現者が男性性に偏っていることが示された。また、日本語母語話者は「ニヤニヤ」の被表現者として、「子ども」「若い女性」「若い男性」「中年男性」のうち「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」という特徴を持つキャラがふさわしいという認識をある程度共通して持っていることが明らかになった。さらに、日本語学習者はふさわしくない被表現者の笑いに「ニヤニヤ」を使用することがあり、そのキャラ化が母語話者に誤用として修正されたり、否定的な意図を伴うインポライトな表現の使用と判断されたりすることがあることもわかった。

話者間の社会的距離が近い場合や力関係が下の被表現者の笑いを表現する場合に、「ニヤニヤ」を使用しても許容されるという点は、従来指摘されてきたポライトネス評価における推論の材料、すなわち話者間の人間関係で説明することができ、また「人はみな同じ」という行為者観を前提にしても問題はない。さらに、「ニヤニヤ」の被表現者が男性性に偏っているというオノマトペ研究や日本語教育の現状は、「実は性差は存在する」という行為者観の現れと見ることができる。しかしながら、個別研究1ではこれらの行為者観を前提にしては説明できない事例が示された。話者間の人間関係や性別では捉えきれない「ニヤニヤ」にふさわしいキャラの存在は、日本語社会である程度共通して認識されており、「ニヤニヤ」によるキャラ化のポライトネス評価が被表現者のキャラとの整合性からなされることが明らかになった。個別研究1では、キャラ化の材料としての日本語能力とポライトネス評価の関係はどのようなものか、キャラ化とキャラ行動が同時に起こる場合のポライトネス評価はどうなるのか、という2つの疑問が残されたが、これらは続く個別研究

2, 3で検証された。

個別研究2では、非キャラ行動がインポライトな言動と評価されること、日本語学習者の発音の上手さおよび日本企業での勤務年数という話者情報がキャラ化の材料としてポライトネス評価に大きな影響を与えることが示された。ロシアの学習者による「～ないです」発話に関して、母語話者を対象にポライトネスを含む印象評定調査を行った結果、話者が、発音が上手で日本の日本企業での勤務年数が短いまたは発音があまり上手でなく勤務年数が長い、「変な外国人」キャラの場合、「～ないです」発話がインポライトと評価されること、発音が自然ならば必ずポライトネスの評価が高くなるというわけではないことが明らかになった。

この結果は、状況や話者間の人間関係が一定であっても、資本的性質の材料（外国人、および日本企業での勤務年数）や行動的性質の材料（発音の上手さ）から「変な外国人」キャラにキャラ化された被表現者は、「～ないです」発話が非キャラ行動となり、インポライト評価を受けることを意味する。推論の材料となる状況、話者間の人間関係、さらに性別でもこのポライトネス評価の差を説明することはできない。本研究の結果もまた、「人はみな同じ」「実は性差は存在する」という行為者観に立っていても、発話に対するポライトネス評価の実像をつかむことはできず、話者のキャラを加えるべきことを示している。さらに、発音の上手な日本語能力の高い学習者の発話においても、キャラによってポライトネス評価が変わりうるという個別研究2の結果は、キャラ化の材料としての日本語能力の高さが必ずしもポライトネス評価の高さにつながるわけではないことを示すものである。ただし、個別研究3で示されたとおり、非キャラ行動が必ずしもインポライトと判断されるわけではなく、被表現者のキャラにより許容される場合もある。

個別研究3では、キャラ化された被表現者がそのキャラ化を拒否した場合、キャラ化がインポライトと判断されるのか、被表現者の拒否が非キャラ行動としてインポライトと判断されるのかという、インポライト評価のメカニズムを探ることを目的とし、日本語母語話者による合コン場面の談話を分析した。その結果、「いじられ・ボケ」キャラの「いじり・ツッコミ」キャラに対するキャラ化が、キャラ化された被表現者の真剣な拒否という非キャラ行動を引き起こし、生じた齟齬が冗談の枠を越え、結果的にキャラ化がインポライト評価を受けることになるというポライトネス評価のメカニズムを明らかにすることができた。

この結果は、個別研究1で示した不適切なキャラ化へのポライトネス評価と、個別研究

2で示した非キャラ行動へのポライトネス評価が、実は複雑に影響しあっていることを示している。個別研究1および2では、考察対象として個別の言語形式を取り上げたため、単純でわかりやすい結果を得たが、個別研究3では母語話者の談話を扱ったため、キャラ化と非キャラ行動のポライトネス評価に関する諸相を観察することができた。そしてこの結果も、話者間の人間関係や状況、話者の性別だけではポライトネス評価を説明することはできず、その判断基準として行為者のキャラを加えるべきことを主張する根拠となる。また、日本語母語話者間の発話においても、キャラによってポライトネス評価が変わりうるという個別研究3の結果は、キャラ化の材料としての日本語能力の高さが必ずしもポライトネス評価の高さにつながるわけではないことを改めて示している。以上をまとめると、下の図8.1のようになる。

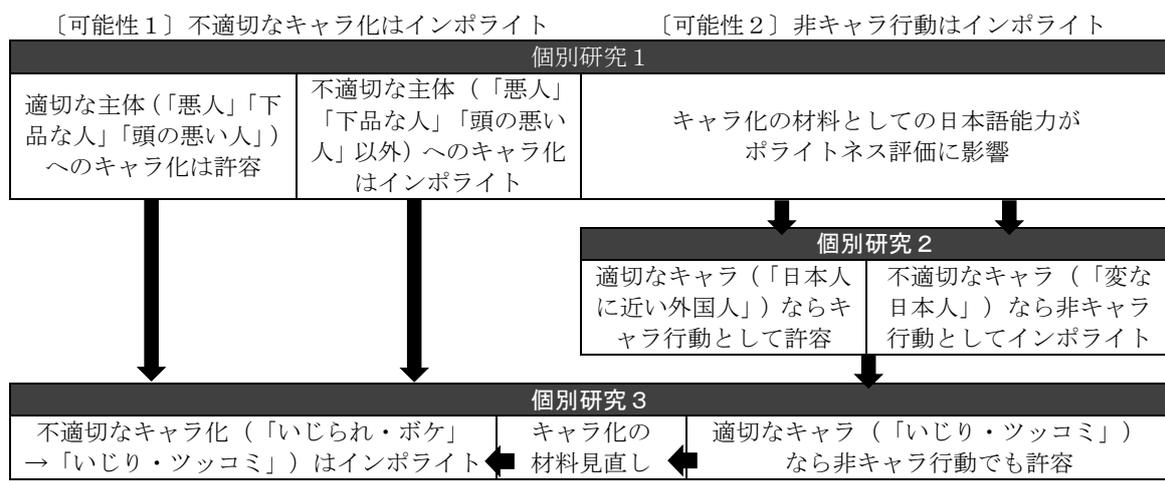


図 8.1 2つの可能性と3つの個別研究の関係

第 8.2 節 日本語教育への提案

本節では、キャラ化とキャラ行動に分け、日本語教育へのキャラ概念の導入を提案する。

キャラ化について。キャラ化する表現者が日本語学習者の場合、日本語社会である程度共通して認識されているキャラとことばの結びつきとは異なるキャラ化は、インポライトと評価されることが第5章の個別研究1により明らかになった。第7章で見たように、日本語母語話者によるキャラ化がインポライトとなる場合もあり、キャラ化の適切性は日本語母語話者にとっても難しい問題であることは事実である。だが、本稿で取り上げた「ニヤニヤ」のように、キャラとの結びつきの強いことばは存在する。特にポライトネス評価にかかわる、キャラとの結びつきの強いことばについては、教材にキャラを明記するなど

して指導を行っていく必要があるのではないだろうか。

キャラ行動について。日本語学習者がキャラ化される被表現者の場合、第5章の個別研究1および第6章の個別研究2では、「日本語能力の低い外国人」キャラであることがポライトネス評価に影響を与えていることが示された。これは一見、「日本語能力の高い者対低い者」「日本語母語話者対非日本語母語話者」「日本人対外国人」といった二項対立的な捉え方につながる結果と言える。日本語学習者の日本語能力が母語話者程度まで高くなならないかぎり、母語話者と同じようなポライトネス評価を受けることができないとすれば、日本語教育の未来は暗いと言わざるを得ない。

ここに光を照らすのが、第7章の個別研究3で見た日本語母語話者女性のキャラである。第2.2節で見たとおり、ジェンダー・ポライトネスの基準がステレオタイプの存在しており、女性に関しても「規範的な女性対逸脱した女性」という二項対立的な捉え方がなされてきたという指摘は多い。だが、第7章に示した合コン参加者の女性たちは、規範的と言われてきたものとは異なる言動を見せ、さらに彼女たちの言動は逸脱ではなくキャラ行動として男性参加者たちに受け入れられていた。これはジェンダー・ポライトネスの存在自体を否定するものではなく、その影響力弱化の可能性、言い換えれば、「規範的な女性」と「逸脱した女性」しかいないとされていた時代から、女性に関しても多様なキャラの存在が認識され、受容される時代になったという可能性を示唆する。女性のキャラの多様化は、アニメやお笑い芸人に関する研究でもすでに指摘されている（たとえば村瀬 2006; 宿利 2017c）。

このようなキャラの多様化を、日本語教育も目指すべきというのが本稿の提案である。現存する日本語教科書は、学習者を「弱い者としての外国人」キャラから「変な外国人」キャラに「昇進」させることは達成しているかもしれないが、それ以上の「昇進」は難しく、「変な外国人」キャラの生産を循環させているだけではないかと筆者は考えている。そして、すべての日本語学習者が「日本人に近い外国人」キャラまで日本語能力を上げることは難しい。では、日本語能力は「変な外国人」キャラレベルのままでも、そこにさまざまなキャラが存在すればどうだろう。女性に関して「規範的な女性対逸脱した女性」という二項対立的な捉え方が薄れるのと同時に、キャラが多様化したことを鑑みれば、「日本語能力の高い者対低い者」という日本語学習者に関する捉え方もキャラの多様化により薄れるのではないだろうか。

第 8.3 節 本研究の実証性と意義

繰り返し述べてきたとおり，本稿で行った3つの個別研究のみから，キャラとポライトネス評価の関係を捉えきることはできない。その限界と問題点を認めた上で，本稿は，ことばとキャラのさまざまな結びつきとポライトネス評価のかかわりを実証できたと考えている。

個別研究1では，「ニヤニヤ」ということばと「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」キャラとの結びつきを考慮に入れなければ，日本語学習者の作文における「ニヤニヤ」使用がインポライトとなる理由を説明することはできなかった。また，個別研究2では，「～ないです」発話が非キャラ行動となる「変な外国人」キャラの存在を考慮しなければ，日本語学習者の動詞否定丁寧形「～ないです」発話がインポライトとなる理由を説明することはできなかった。個別研究3でも同様に，「いじられ・ボケ」キャラから「いじり・ツッコミ」キャラへのラベル付けによるキャラ化がインポライトとなる理由は，それぞれのキャラ行動による解釈なしに説明することはできない。

これまで，社会的距離や相対的力関係といった話者間の人間関係，そして性別で説明されてきたポライトネス評価の要因だけでは，少なくとも3つの個別研究で取り上げた現象を説明することはできない。この点において，本研究の実証性を主張したい。

また，キャラ概念をポライトネス研究に取り入れることにより，日本語社会におけるポライトネス評価をより現実的に記述することができるようになると同時に，その記述を日本語教育において学習者に提示することができるようになる。さまざまなキャラとポライトネス評価の結びつきに関する情報を提供していくことにより，それぞれの日本語学習者が自分に合ったポライトな言動を習得，実践していくことが可能となる。このことは，日本語学習者に対する「日本人に近い外国人」キャラ，「変な外国人」キャラのような二項対立的キャラ化の弊害の軽減や，ポライトネスの実践および評価の多様化にもつながる。本研究の知見は，このような多様化の第一歩となる点でも意義深いと考える。

第 8.4 節 予想される反論

本節では，予想される反論を3つ挙げ，再反論を試みる。

1つ目は，「キャラも結局は B&L の主張する相対的力で説明可能なのではないか」という反論である。個別研究1および2では，「非母語話者」キャラであること，「変な外国人」キャラであること，個別研究3では「いじられ・ボケ」キャラであることが，発話や作文

におけることばのインポライト評価につながることを示された。これも結局は、「日本語母語話者が上で日本語学習者が下」「いじり・ツッコミ」キャラが上で「いじられ・ボケ」キャラが下」という差別的な上下関係の現れであり、その上下関係に関する推論パターンや規範の認識を誤った、または知らないために不適切なことばを発し、インポライト評価を受けたのではないかと主張される可能性がある。これに対し、2つの点から反論したい。

まず、B&Lの相対的力が、当事者間の共通認識を前提とした、場面によって変わる役割セットのようなものである(B&L 1978/1987 田中訳: 101)のに対し、キャラはそれを前提とするのが難しい場合があるという点が挙げられる。B&Lの相対的力は、銀行の支店長といった地位や階級によるもの、また銃を持っているといった武力によるものなど、明確に顕在化したものであり、力が強い者と弱い者の対比が話し手や聞き手、周囲の第三者に認識されやすい。一方、日本での滞在期間や発音の上手さ、ツッコミ発話の回数など、多分に相対的、文脈依存的な材料によるキャラは、自身のキャラを把握していない者が多いという指摘(瀬沼 2007)からもわかるように、集団内における自身の力を把握することが困難な場合がある。また、本稿の個別研究では扱っていないが、集団内のキャラが相対的力につながるとは言いがたい事例も存在する。たとえば瀬沼(2007: 79)で紹介された「クール」キャラ、「格闘」キャラ、「なぞ」キャラの3名で構成される集団において、果たしてだれの力が強く、だれが弱いのかは判断しがたい。キャラは、当事者間で相対的力に関して共通した認識を持たれにくいものをも含む概念である。

次に、相対的力の強さがインポライト評価の深刻度の軽減につながらない場合がある点である。B&Lが主張する $W_x = D + P + R_x$ という公式に従えば、話し手の相対的力が強ければ、インポライトとなる可能性は低く見積もられることになる。第7章の個別研究3で見たとおり、「いじられ・ボケ」キャラによる「いじり・ツッコミ」キャラへのラベル付けによるキャラ化は不適切でインポライトな言動と判断された。この結果から、「いじり・ツッコミ」キャラが上で「いじられ・ボケ」キャラが下」と言い切れるかというところではない。たとえば、「いじられ・ボケ」キャラの上司による注意や叱責に比べ、「いじり・ツッコミ」キャラの上司による同様の行為が威圧的でよりインポライトな印象を与えることがある。いずれも上司であることは変わらない、つまり当事者間で共通した認識を持たれる B&Lの相対的力は同じである。本稿が主張するのは、前提となりうる当事者間で了解された相対的力(役割セット)の存在を認めた上で、それとは別に行為者のキャラが存在し、そのキャラによってポライトネス評価が異なってくるということである。以上の理由により、

「キャラも結局は B&L の主張する相対的力で説明可能なのではないか」という反論を否定し、「キャラはこれまで主張されてきた相対的力とは異なるものである」と主張したい。

2つ目は、「何でもかんでもキャラなのか」という反論である。確かに個別研究1～3で扱ったキャラは、「ボケ」キャラや「オネエ」キャラといったキャラのラベルを有する知名度の高いものから、「日本企業での勤務年数が短い発音の上手な外国人社員」キャラというラベルらしいラベルのないもの、「話し方が日本人から遠い外国人っぽい」という発音の行動的材料によるものから、「生姜にはまっている」という嗜好の行動的材料によるものまで、実にさまざまな人間類型をキャラとして扱っている。ことば、イントネーション、つかえ方、空気すすり、手振り、姿勢、文字、文章、美術品、歌など、キャラは万物に宿るものである(定延 2011)。第3章で述べたとおり、キャラとは「スタイル以上、人格未満」の、状況に応じて変わる人間の類型であり、本研究で扱ったものはすべてキャラである。

もちろん前述した通り、人間の類型の中にも例外は存在する。「1年2組は男子15名、女子16名、計31名です」という場合の、「男子」「女子」のようなものはキャラに含まれない。これは、人間に関する直接的、事務的指示であり(Schegloff 2007)、役割概念や成員カテゴリーではあるが、キャラではない。その理由は、「本当は意図的に変えることができるが、変わらない、変えられないことになっているもの。それが変わっていることが露見すると、見られた方も、見たほうもそれが何事であるかすぐに分かり、気まずい思いをする(定延 2015)」というキャラの特徴を、上の「男子」や「女子」が有していないからである。以上のとおり、何でもかんでもキャラとして扱っているわけではない。

3つ目は、「日本語教育がキャラの多様化を目指すというのは、キャラが意図的に操作可能なスタイルであるということ的前提にしているのではないか」という反論である。本研究は、意図的な「キャラ作り」(千島・村上 2015)やキャラの演技性(瀬沼 2007, 2018)の存在も否定しないが、日本語教育でのキャラに関する指導は、意図的なキャラ作りのみを想定したものではない。現存する日本語教科書の多くはキャラの選択肢の提示すらしていない。そのため、そのような日本語教科書を用いた指導が、「変な外国人」キャラの生産を繰り返し循環させている可能性がある。多様なキャラとことばの結びつきを教科書に示し、授業で扱っていけば、インプットレベルでの多様化が進み、その多様なインプットが学習者のハビトゥスとなっていずれアウトプットにも現れてくるのではないだろうか。まずは、「人はみな同じ」「実は性差は存在する」という行為者観から脱却し、さまざまなキャラの存在を学習者に示していくことから始め、それが将来的に学習者のキャラの多様化

につながると考える。

第9章 終わりに

本研究は、ポライトネスの判断基準として行為者のキャラを加えるべきことを示すために、「行為者のキャラを考慮しないことがコミュニケーションの失敗を導きうること」を調査により明らかにし、うまくいかない原因について考察した。具体的には、「被表現者が表現者にキャラ化され、被表現者や第三者がそのキャラを受容しない場合、表現者によるキャラ化はインポライトと評価される」「キャラ化された被表現者の非キャラ行動はインポライトと評価される」という2つの可能性について、3つの個別研究を通して検証した。さらに、そのことを踏まえた従来よりも現実的な日本語教育のあり方を提案した。

個別研究1では、他者の笑いを「ニヤニヤ」と表現する際の、状況および被表現者について調査を行った。その結果、日本語社会では、話者間の社会的距離の近い場合や力関係が下の被表現者の笑いを表現する場合に「ニヤニヤ」を使用しても許容されることが多いこと、オノマトペ研究や日本語教育の世界では、「ニヤニヤ」の被表現者が男性性に偏っているが示された。また、日本語母語話者は「ニヤニヤ」の被表現者として、「子ども」「若い女性」「若い男性」「中年男性」のうち「悪人」「下品な人」「頭の悪い人」という特徴を持つキャラがふさわしいという認識をある程度共通して持っていることが明らかになった。さらに、日本語学習者はふさわしくない被表現者の笑いに「ニヤニヤ」を使用することがあり、そのキャラ化が母語話者に誤用として修正されたり、否定的な意図を伴う使用と判断されたりすることがあることもわかった。

個別研究2では、ロシアの学習者による「～ないです」発話に関して母語話者を対象にポライトネスを含む印象評定調査を行った。その結果、話者が、発音が上手で日本の日本企業での勤務年数が短いまたは発音があまり上手でなく勤務年数が長い、「変な外国人」キャラの場合、「～ないです」発話がインポライトとして評価されること、発音が自然ならば必ずしもポライトネスの評価が良くなるというわけではないことが明らかになった。

個別研究3では、キャラ化された被表現者がそのキャラ化を拒否した場合、キャラ化がインポライトと判断されるのか、被表現者の拒否が非キャラ行動としてインポライトと判断されるのかという、インポライト評価のメカニズムを探ることを目的とし、日本語母語話者による合コン場面の談話を分析した。その結果、「いじられ・ボケ」キャラの「いじり・ツッコミ」キャラに対するキャラ化が、キャラ化された被表現者の真剣な拒否という非キャラ行動を引き起こし、生じた齟齬が冗談の枠を越え、結果的にキャラ化がインポライト

評価を受けることになるというポライトネス評価のメカニズムを明らかにすることができた。

これらの結果は、行為者のキャラを考慮しないことがコミュニケーションの失敗を導きうることを示すものであり、ポライトネスの判断基準として行為者のキャラを加えるべきであると主張する根拠と言える。今後、日本語教育がより現実的な指導を行っていくため、「人はみな同じ」「実は性差は存在する」という行為者観から脱却し、多様なキャラ概念を取り入れていくことを提案する。

ただし、本研究には以下3つの問題点が残された。まず、繰り返し述べてきたとおり、3つの個別研究で取り上げた現象の数が少ない点である。キャラ化に関しては、笑いの表現（個別研究1）と合コンにおけるラベル付け（個別研究3）を扱った。前者は、「ニヤニヤ」以外の笑いの表現やその他のキャラクタ動作の表現についても検証していく必要がある。後者は、複数回の合コンを観察すること、参加者の年齢や開催地域の偏りを解消することが今後の課題となる。非キャラ行動に関しては、動詞否定丁寧形発話（個別研究2）と合コンにおけるラベル付けへの拒否（個別研究3）を扱った。前者について、ポライトネス研究と役割語研究を融合し、動詞否定丁寧形以外の言語形式についても検証していくことで、日本語教育に役立つ知見は増えると予想される。今後、キャラ化、非キャラ行動として扱う現象を増やし、本研究の主張をさらに強化していきたい。

次に、個別研究2の課題として残された、発話時間とポライトネス評価との関連の検証が挙げられる。個別研究2では、ポライトネス評価に影響を与える発話の音響的特徴について分析したが、ポーズを含む発話時間とポライトネス評価の間に関連があるか否かを明言するには至らなかった。今後、発話音声の速度などを操作し、発話時間とポライトネス評価との関連についてさらに調査していく必要がある。

最後に、本研究で得られた知見の、日本語教育への具体的な応用方法の提示が不十分な点が挙げられる。キャラ化につながることばについては、第8.2節に書いたとおり、インポライト評価につながるキャラを教材に明記するという方法が可能である。だが、キャラ行動・非キャラ行動に関しては、どのような言動がインポライト評価につながるか予測が難しく、たとえば「入ってません」と発話するか、「入ってないです」と発話するか、別の表現を用いるか、何も言わないかというように、扱う内容が限りなく増える可能性がある。多様な言動を紹介することで、多様なキャラの日本語学習者は誕生するかもしれないが、それに合わせて日本語能力の測定方法も多様化させることはできるのかといった新たな問

題も生じてくるだろう。キャラ行動・非キャラ行動とポライトネス評価についての日本語教育への具体的な応用方法は、測定方法も含め、今後の課題としたい。

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々からご教示やご支援をいただきました。ここに、お世話になった方々のご氏名を記させていただくとともに、御礼申し上げたいと思います。

まず、神戸大学大学院国際文化科学研究科の先生方に、深謝の意を表したいと思います。指導教員の林良子先生には、博士課程2年目と3年目の2年間、論文執筆にかかわるご指導をいただいただけでなく、進路や研究発表に関する相談に乗っていただくなど、大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。感性コミュニケーション

コースの水口志乃扶先生、米谷淳先生、松本絵理子先生には、コース内の集団指導において、建設的なコメントやアドバイスをたくさんいただきました。心よりの謝意を表したいと思います。朱春躍先生には、博士論文審査員として、また科学研究費助成事業の会議においても、貴重なご指導や有益なコメントをいただき、深く感謝しております。

感性コミュニケーションコースの先輩方との議論は多くの示唆を与えてくれました。特に、お忙しい中丁寧に統計処理の手法を教えてくださいくださった林萍萍さん、音響分析や立論に関するアドバイスをくださった王睿来さん、そして調査方法や立論に関するアドバイスをくださった羅希さんに深く感謝いたします。皆様のおかげで、3度目となる大学通学が楽しく有意義なものになりました。

また、調査にご協力くださったノボシビルスクの日本語教師の皆様、大内将史先生（元ノボシビルスク国立工科大学教師）、日本語学習者の皆様、日本語母語話者の皆様、合コン調査協力者の皆様に心から御礼申し上げます。皆様のご協力がなければ、本論文を完成させることはできませんでした。

なお、本研究は、日本学術振興会の科学研究費補助金・特別研究員奨励費（課題番号：17J04518、課題名：「コミュニケーションにおける丁寧さに関する齟齬について」）、日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(A)「つかえタイプの非流ちょう性に関する通言語的調査研究」（課題番号：15H02605、研究代表者：定延利之）の助成を受けています。ここに記して謝意を表します。

最後に、定延利之先生（京都大学）に深く感謝いたします。神戸大学ご在籍中はもちろん京都大学に移られてからも、ご指導をいただくだけでなく、論文集原稿の執筆やインターネット座談会、学会発表など、さまざまなチャンスを与えていただきました。定延先生の講義を聞き、ご著書を何冊も読んだからこそ、博士課程に進もうと決め、神戸大学に行

こうと決意し、研究を続けていきたいと今日も思っています。先生のような、天才的頭脳を持つことも、超人的体力を発揮することも、私にはおそらく難しいと思いますが、先生の研究と教育への姿勢を見習い、日々精進していきたいと思えます。本当にありがとうございました。

資料

Hinoki Project (2012) 「学習者作文コーパス「なたね」」 [<https://hinoki-project.org/natane>, 2018年10月30日最終確認]

伊能裕晃・本田ゆかり・来栖里美・前坊香菜子・阿保きみ枝・宮田公治 (2011) 『新完全マスター語彙日本語能力試験 N2』 スリーエーネットワーク

科研グループ「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」(2010) 「日本語学習者作文コーパス」 [<http://sakubun.jp>,]

河野桐子・野口仁美・馬原亜矢 (2003) 『語彙力ぐんぐん1日10分』 スリーエーネットワーク

国際交流基金関西センター (2010) 『NIHONGOe な』 [<http://nihongo-e-na.com>, 2018年10月30日最終確認]

国立国語研究所 (2007) 『日本語を楽しもう！』 [<http://pj.ninjal.ac.jp/archives/Onomatope>, 2018年10月30日最終確認]

—— (2009) 「日本語学習者による, 日本語・母語対照データベース (作文対訳 DB)」 [https://db3.ninjal.ac.jp/contr-db/essay_01.html, 2018年10月30日最終確認]

小野正弘 (2007) 『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 小学館

スリーエーネットワーク (2000 編) 『みんなの日本語初級 1 教え方の手引き』 スリーエーネットワーク

東京外国語大学「オンライン日本語誤用辞典」 [http://cblle.tufs.ac.jp/lc/ja_wrong, 2018年8月4日最終確認]

山口仲美・佐藤有紀 (2006) 『「擬音語・擬態語」使い分け帳』 山海堂

引用文献

- 安部達雄 (2005) 「漫才における「ツッコミ」の類型とその表現効果」『国語研究と資料』28, pp. 48–60.
- 荒川歩・鈴木直人 (2006) 「ジェスチャーは会話スタイルの一部か? : 発話の近言 語的特徴とジェスチャー頻度との関係およびその性差」『対人社会心理学研究』6, pp. 57–64.
- 有賀亮・菊池英明・野嶋栄一郎 「自発音声におけるパラ言語情報の種類の評価語を用いた印象評定」『音声研究』14 (2), pp. 25–34. 日本音声学会
- 井出祥子 (2006) 『わかまへの語用論』大修館書店
- 井出祥子・彭国躍 (1994) 「敬語表現のタイポロジー」『月刊言語』23(9), pp. 43–50.
- 伊藤剛 (2005/2014) 『テヅカ・イズ・デッドーひらかれたマンガ表現論へ』星海社
- 上野行良 (2003) 『ライブラリ パーソナリティ 3 ユーモアの心理学—人間関係とパーソナリティ—』サイエンス社
- 宇佐美まゆみ (1994) 「言語行動における “politeness” の日米比較 : 談話レベルにおける “politeness” の普遍理論確立への模索」 *Speech communication education*, 7, pp. 30–41.
- (2003) 「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』54 (3), pp. 117–132.
- 宇佐美まゆみ・野口美美・木林理恵 (2014) 初対面二者間会話における話題導入と展開のプラクティス : 対話相手との年齢差・性差に着目して『言語・音声理解と対話処理研究会』71, 23–28.
- 榎本博明 (2014) 『バラエティ番組化する人々 あなたのキャラは、「自分らしい」のか?』廣済堂新書
- 江原由美子 (2001) 『ジェンダー秩序』勁草書房
- 江原由美子・好井裕明・山崎敬一 (1984) 「性差別のエスノメソドロロジー—対面的コミュニケーション状況における権力装置—」『現代社会学』18, アカデミア出版会, pp. 143–176.
- 大島希巳江 (2006) 『日本の笑いと世界のユーモア』世界思想社.
- 森英樹 (2013) 「日本語否定命令文の歴史的変遷」『福井県立大学論集』40, pp. 1–13.
- 大津友美 (2004) 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス—「遊び」としての対立行動に注目して—」『社会言語科学』6(2), pp. 44–53.
- 小河原義朗 (2001) 「日本語非母語話者の話す日本語の発音に対する日本人の評価意識—社

- 会人の場合—」『日本語教育方法研究会誌』8 (2), pp. 10–11.
- 荻野綱男・洪珉杓 (1992) 「日本語音声の丁寧さに関する研究」 国広哲弥 (編) 日本語イントネーションの実態と分析 文部省重点領域研究 日本語音声における韻律的特徴の実態 屠蘇の教育に関する総合的研究 (研究代表者: 杉藤美代子) C3 班 日本語音声の韻律的特徴に関する言語的理論の研究 研究成果報告書, pp. 215-258.
- 岡田安代・杉本和子 (2001) 「外国人の断り行動と日本人の評価」『愛知教育大学研究報告』50, pp. 153–160.
- 金田純平 (2016) 「笑い話における言語・非言語行動の特徴—関西芸人と一般の女性の比較から」, 研究集会「プロフィシエンシーと語りの面白さ」2, 三宮コンベンションセンター, 2016年10月1日.
- 川口良 (2006) 「母語話者の「規範のゆれ」が非母語話者の日本語能力に及ぼす影響: 動詞否定丁寧形「(書き) ません」と「(書か) ないです」の選択傾向を例として」『日本語教育』129, pp. 11–20. 日本語教育学会
- (2014) 『丁寧体否定形のバリエーションに関する研究』くろしお出版
- 金銀珠 (2010) 「動詞否定丁寧形「～ません」と「～ないです」のモダリティ機能の比較」『日本語文法学会第11回大会予稿集』 pp. 164–171. 日本語文法学会
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- (2015) 「役割語からみた日本語とキャラ」パネルセッション日本語とキャラ, 日本語文法学会第16回大会, 学習院女子大学, 2015年11月15日.
- 栗原豪彦 (2008) 「ポライトネス理論をめぐる論争: 「合理主義的(rationalist)アプローチ」と「言説的(discursive)アプローチ」」『北海学園大学人文論集』41, pp. 1–51.
- (2009) 「ブルデューの言語論」『北海学園大学学園論集』140, 81–106.
- 洪珉杓 (1993) 「丁寧表現における日本語音声の丁寧さの研究」『音聲學會會報』204, pp. 13–30.
- 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ: 初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価」『北海道大学留学生センター紀要』2, pp. 138–156.
- 小林ミナ (2005) 「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」」『日本語教育』125, pp. 9–17. 日本語教育学会
- 斉藤環 (2011) 『キャラクター精神分析—マンガ・文学・日本人』筑摩書房

- 笹川洋子 (1997) 「儀礼行為としての「笑い」 —電話会話にみられる笑いを手がかりとして—」『親和国文』 32, pp. 84-109.
- (2016) 『日本語のポライトネス再考：発話行為・発話媒介行為・相互行為』 春風社
- 定延利之 (2006) 「ことばと発話キャラ」『文学』 7-6, pp. 117-129.
- (2009) 「日本語社会のぞきキャラくり第 42 回キャラは万物に宿る」
[<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/chara42>, 2018/01/03 最終確認]
- (2011) 『日本語のぞきキャラくり』 三省堂
- (2015) 「コミュニケーション原理—言語研究からの眺め—」『電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ Fundamentals Review』 8 (4), pp. 276-291.
- (2016) 『コミュニケーションへの言語的接近』 ひつじ書房
- (2018) 「日本語社会における「キャラ」」 定延利之 (編) 『キャラ概念の広がりと深まりに向けて』, 三省堂, pp. 120-133.
- (近刊) 『コミュニケーションと言語におけるキャラ (仮)』 三省堂
- 澤田田津子 (2012) 「学習者に教えるべき日本語の「かたち」について: Can-do シラバスにおいて求められる文法的正確さの基準とは」『ヨーロッパ日本語教育第 1 回ヨーロッパ日本語教育ワークショップ報告・発表論文集』 pp. 65-74. ヨーロッパ日本語教師会
- 宿利由希子 (2016) 「キャラと役割語の教育」ワークショップ発表, 日本語学会 2016 年度秋季大会, 山形大学, 2016 年 10 月 30 日.
- (2017a) 「キャラの笑いの表現に関する日露対照—ドストエフスキー『罪と罰』の用例と日本語訳から—」『国際文化学』 30, pp. 40-64.
- (2017b) 「キャラの笑い方の表現に関する日露対照—『罪と罰』の用例から—」ポスター発表, ヨーロッパ日本語教師会リスボンシンポジウム, リスボン新大学, 2017 年 9 月 1 日.
- (2017c) 「笑わせる女: 女芸人とホステスの面白い話」口頭発表, ヨーロッパ日本語教師会リスボンシンポジウムプレ会議, 2017 年 8 月 30 日.
- (2018a) 「日本語教育とキャラ」 定延利之 (編) 『キャラ概念の広がりと深まりに向けて』, 三省堂, pp. 224-241.
- (2018b) 「動作主のキャラと表現に関する日本語学習者の誤用について」ポスター発表, ヨーロッパ日本語教師会・ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会, 2018 年 8 月 4 日.

- 宿利由希子・大内将史 (2018) 「動詞否定丁寧形で終わる文の発話の印象評定実験報告—日本語母語話者とロシアの学習者の比較から—」『日本語音声コミュニケーション』6, pp. 138–157.
- 宿利由希子・羅希 (2017) 「キャラと笑い方の表現に関する考察—ロシア語小説の日本語訳と中国語訳から—」口頭発表, 日本語学会 2017 年度春季大会, 関西大学, 2017 年 5 月 13 日.
- 鄭惠先 (2005) 「日本語と韓国語の役割語の対照—対訳作品から見る翻訳上の問題を中心に—」『社会言語科学』8 (1), pp. 82–92.
- (2008) 「日本語役割語に対する韓国人日本語学習者の意識」『長崎外大論叢』12, pp. 49–58.
- 張允娥 (2017) 「日韓同性間の会話における不同意・否定的評価の相互行為：ジェンダーとポライトネスの観点からみる対立と冗談」『阪大日本語研究』29, pp. 101–128.
- 新城カズマ (2009) 『物語工学論—入門篇 キャラクターをつくる』角川文芸出版
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語初級 1・2』スリーエーネットワーク
- (2000) 『みんなの日本語初級 1・2 教え方の手引き』スリーエーネットワーク
- 瀬沼文彰 (2006) 「「キャラ化」して「笑い」を操る若い世代」『笑い学研究』13, pp. 62–70.
- (2007) 『キャラ論』Studio Cello
- (2018) 「若者たちのキャラ化のその後」定延利之 (編) 『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』三省堂
- 高木智世・細田由利・森田笑 (2016) 『会話分析の基礎』ひつじ書房
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
- 崔文姫 (2008) 「韓国人日本語学習者の言語・非言語行動に対する日本語母語話者の印象形成—異なる属性を持つ母語話者の評価の相違—」『日本語研究』28, pp. 1–15.
- 千島雄太・村上達也 (2015) 「現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連：—“キャラ”に対する考え方を中心に—」『青年心理学研究』26(2), pp. 129–146.
- (2016) 「友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応：—中学生と大学生の比較—」『教育心理学研究』64(1), pp. 1–12.
- 辻本桜子 (2007) 「あいづちの男女差に関する—考察—トーク番組における司会者のあいづちを通して—」『日本言語文化研究』11, pp. 33–45.

- 鶴谷千春 (2016) 「丁寧さを表現するために日本語母語話者が用いる韻律的特徴」『国立国語研究所論集』11, pp. 167-180.
- 難波義行 (2015) 『売れっ娘ホステス笑わせ上手の会話術』 こう書房
- ネウストプニー J. V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書
- 福嶋教隆 (2012) 「スペイン語の「役割語」：日本語との対照研究」『CLAVEL』2, pp. 70-86.
- 文化庁文化語課 (2017) 「平成 29 年度国内の日本語教育の概要」
[http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h29/pdf/r1396874_01.pdf, 2018 年 12 月 25 日最終確認]
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘 (2007 編) 『エスノメソドロジー 人びとの実践から学ぶ』 新曜社
- マディヤロヴァ サヨラ (2004) 「ロシア語を母語とする日本語学習者のイントネーション 第2会日本語教育と音声研究会 2004 年 11 月 13 日」 [<http://www.gsjal.jp/today/dat/kenkyuukai0201.pdf>, 2018 年 12 月 25 日最終確認]
- 水本光美 (2015) 『ジェンダーから見た日本語教科書-日本女性像の昨日・今日・明日-』 大学教育出版
- 水本光美・福盛寿賀子・高田恭子 (2009) 「日本語教材に見る女性文末詞—実社会における使用実態調査との比較分析—」『日本語とジェンダー』9, pp. 11-26.
- 峯松信明・平野宏子・中村則子・笈川幸司 (2016) 「OJAD を用いた日本語韻律トレーニングによる自然性向上に関する実験的検証」『信学技報』115 (392), pp. 13-18.
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析』くろしお出版
- 村瀬ひろみ (2006) 「日本の商業アニメにおける女性像の変遷と「萌え」文化—新しいジェンダーを求めて—」, *Gender and Sexuality: Journal of Center for Gender Studies. ICU*, 1, pp. 77-92.
- 山住賢司・籠宮隆之・榎洋一・前川喜久雄 (2005) 「講演音声の印象評定尺度」『日本音響学会誌』61 (6), pp. 303-311. 日本語音響学会
- 山口治彦 (2007) 「役割語の個別性と普遍性-日英の対照を通して-」金水敏 (編) 『役割語研究の地平』くろしお出版, pp. 9-25.
- 依田恵美 (2011) 「役割語としての片言日本語—西洋人キャラクターを中心に—」金水敏 (編) 『役割語研究の展開』くろしお出版, pp. 213-248.
- 羅米良 (2011) 「博士論文 現代日本語副詞の記述枠組みに関する研究」神戸大学

- 渡辺裕美・松崎寛 (2014) 「発音評価の相違」『日本語教育』159 (0), pp. 61–75.
- Bourdieu, P. 1979. *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Editions de Minuit: Paris. [P.ブルデュー (著), 石井洋二郎 (1989 訳) 『ディステインクシオン I 社会的判断力批判』新評論]
- . 1980. *Le Sens pratique*, Editions de Minuit: Paris. [P.ブルデュー (著), 今井仁司・港道隆 (2001 訳) 『実践感覚 1』みすず書房]
- . 1990. *The Logic of Practice*, Cambridge: Polity Press.
- Brown, P., and Levinson, S. C. 1978/1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. [P. ブラウン・S. C. レヴィンソン (著), 田中典子・斎藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子 (2011 訳) 『ポライトネス: 言語使用における, ある普遍現象』研究社]
- Burr, V. 1995. *An Introduction to Social Constructionism*, London: Routledge. [V. バー (著) 田中一彦 (1997 訳) 『社会的構築主義への招待—言説分析とは何か—』川島書店]
- Comrie, B. 1984. “Interrogativity in Russian.” In Chisholm, William S, Louis, Milic T, & Grep-pin, John. A. C. *Interrogativity*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp.7–46.
- Crosby, F. & Nyquist, L. 1977. “The Female Register: An Empirical Study of Lakoff’s Hypotheses.” *Language in Society*, 6(3), pp. 313–322.
- Eelen, G. 2001. *A Critique of Politeness Theories*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Ekman, P., and W.V. Friesen. 1969 “The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage and coding.” *Semiotica*, 1-1, pp. 49–98.
- Garfinkel, H. & Sacks, H. 1970. “On formal structures of practical action.” In John C. McKinney, E.A. Tiryakian (eds.), *Theoretical sociology: perspectives and developments*, New York: Appleton-Century-Crofts, pp. 338–366.
- Goffman, A. 1955/1956/1967. *Interaction Ritual*. Chicago: Aldine Pub. Co. [A. ゴッフマン (著), 浅野敏夫 (2002 訳) 『儀礼としての相互行為』法政大学出版局]
- Grice, P. 1967/1971/1975/1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University Press [P. グライス (著), 清塚邦彦 (1998 訳) 『論理と会話』勁草書房]
- Gu, Y. 1990. “Politeness phenomena in modern Chinese.” *Journal of Pragmatics*, 14(2), pp. 237–257.

- Gumperz, Z. 1982. *Discourse Strategies*, Cambridge University Press.
- Ide, S. 1989. "Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness." *Multilingua*, 8(2/3), pp. 223–248.
- Ide, S. 2003. "Women's language as a group identity marker in Japanese." In Marlis Hellinger, Hadumod Bussmann (Eds.), *Gender Across Languages: The Linguistic Representation of Women and Men*, Vol.3, Amsterdam: John Benjamins, pp. 227–238.
- Lakoff, R. 1973. "The Logic of Politeness: Or Minding your P's and Q's." C. Corum, T.C. Smith-Stark, and A. Weiser. (eds.) *Papers from the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp. 292–305.
- . 1975. *Language and Woman's Place*. Oxford: Oxford University Press. [R. レイコフ (著) かつえ・あきば・れいのるず (1990 訳) 『言語と性 英語における女の地位』 有信堂]
- . 1977. "What you can do with words: politeness, pragmatics, and performatives." Rogers, P. et al (eds.) *Proceeding of the Texas Conference on Pragmatics, Presuppositions and Implicatures*, pp. 79–105.
- Leech, G. N., 1980. *Explorations in Semantics and Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. [G. N. リーチ (著) 内田種臣・木下裕昭 (1986 訳) 『意味論と語用論の現在』 理想社]
- . 1983 *Principles of Pragmatics*. London: Longman. [G. N. リーチ (著) 池上 嘉彦, 河上 誓作 (1987 訳) 『語用論』 紀伊国屋書店]
- Maltz, D. N. & Borker, R. A. 1982. "A cultural approach to male-female communication." In John J. Gumperz (eds.) *Language and social identity*, pp. 196–216. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsumoto, Y. 1988. "Reexamination of the Universality of Face: Politeness Phenomena in Japanese." *Journal of Pragmatics*, 12: pp. 403–426.
- Mills, S. 2003. *Gender and Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press. [S. ミルズ (著), 熊谷滋子 (2006 訳) 『言語学とジェンダー論への問い—丁寧さとはなにか』 明石書店]
- Nadel, S. F. 1957. *The Theory of Social Structure*, London: Cohen & West. [S. F. ネーデル (著) 斉藤吉雄 (1978 訳) 『社会構造の理論—役割理論の展開—』 恒星社厚生閣]
- Ofuka, E, McKeown, D. J, Waterman, M. G, & Roach, P. J. 2000. "Prosodic Cues for Rated Politeness in Japanese Speech." *Speech Communication*, 32, pp. 199–217.

- Parsons, T. 1951. *The Social System*, New York: The Free Press/Macmillan. [T. パーソンズ (著) 佐藤勉 (1974 訳) 『社会体系論』 青木書店]
- Sacks, H. 1972. “An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology.” In David Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*, The Free Press, pp. 31–73.
- Schegloff, E. A. 2007. “Categories in action: person-reference and membership categorization.” *Discourse Studies*, 9(4), pp. 433–461.
- Shannon, C. E., and Weaver, W., 1949. *The Mathematical Theory of Communication*. Urbana: University of Illinois Press. [C.E. シャノン・W. ウィーヴァー (著), 長谷川淳・井上光洋 (1969 訳) 『コミュニケーションの数学的理論：情報理論の基礎』 明治図書]
- Sperber, D., and Wilson, D. 1986/1995 2nd Edition. *Relevance: Communication and Cognition*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. [D. スペルベル・D. ウィルソン (著), 内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 (1993/1999 訳) 『関連性理論：伝達と認知』 研究社出版]
- Tannen, D. 1990. *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. New York: William Morrow. [D. タネン (著) 田丸美寿々 (1992 訳) 『わかりあえない理由』 講談社]
- Thompson, J. B. 1991. “Editor’s Introduction.” In Bourdieu, P. 1991. *Language and Symbolic Power*. Cambridge: Polity Press, pp. 1–31.
- Watts, R. J. 1992. “Linguistic politeness and politic verbal behaviour: Reconsidering claims for universality.” In Watts, R., Ide, S., and Ehlich, K. (eds.) 1992/2005. *Politeness in Language: Studies in its history, theory and practice*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 43–69.
- . 2003 *Politeness: Key Topics in Sociolinguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Watts, R., Ide, S. and Ehlich, K. 1992. Introduction, in Watts, R., Ide, S. and Ehlich, K. (eds.), *Politeness in Language: Studies in its history, theory and practice*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 1–17.
- Zimmerman, D. H. & West, C. 1975. “Sex Roles, Interruptions and Silences in Conversation.” In B. Thorne & N. Henley. (eds.) *Language and sex: difference or dominance?* Rowley, Mass.